
光天成 ブライトライズ

グレイプ=k=マスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光天成 ブライトライズ

【Nコード】

N8439K

【作者名】

グレイプ＝k＝マスカ

【あらすじ】

作者を美化した主人公：灯闇光牙、私の分身とも言える彼はこれから起こる非日常的な生活に何を見て、何を思うのか。
物語はここから始まる……。

プロローグ

朝。

必ず来る朝の光。

同じようで同じ事の無い新しい朝。

そんな新しい朝の光の下

俺の意識は覚醒していった。

第0話「プロローグ?ちよつ、それ詳しく。」

「灯闇宅2F 自室」

俺の名前は「灯闇^{とうやみ} 光牙^{こうが}」極普通過ぎて困るくらいに普通な高校生。ちなみに今日から高校3年生だ。いわゆる進級というやつだ。見た目は作者とほぼ同じだが、ちよつと美化されている。

光牙「んゝゝゝ。朝か。」

俺は伸びをして、ベットから降りた。

光牙「いやあゝ。今日から最上級生か。時が経つのは日が沈み昇ってくるぐらいスピーディーだ。こーやって俺はあつという間に大人の階段を登っていくことになるのか。うんうん。」

ドタドタバタバタ

階段からドタドタつと音がする。

光牙「ふつ。来たか。・・・しかし。」

そー俺の部屋に来るのは奴だ。奴しかないない。

バターン！

???「おっはよゝゝう！お兄ちゃん!・・・うつ、嘘ー
ー!?!?おっおっ、おつきしているなんて!」

光牙「ふつふつふ。残念だったな。俺は既に起きていた。」

こやつの名前は「灯闇^{とうやみ} 明^{あかり}」俺の妹だ。今日から俺と同じ高校「

高山高校」の新1年生いわゆる新入生だ。髪は黒髪ポニーテール、背丈は小さい方、スリーサイズは知らないが、胸は大きめ、ウエストは普通、ヒップも普通といった感じに見える。

明「むゝゝゝ。私はお兄ちゃんを起こすのが毎朝楽しいの！だからもう一回寝ろお！」

無茶を言う。

明「ぶううゝ（´ε、`）ゝ。」

ふて腐れた。まあいつもみたいにあんな物を喰らいたくわない。そういつもみたいに。

「How To」

光牙「zzzzzz」

明「おっはよゝゝう！お兄ちゃん！……ふふん。やつぱりまだ寝てる。じゅあいつもものようにいつてみよう！」

明はドアから俺のベットの横に移動した。そして跳躍する姿勢を構えた。

明「灯闇流！」

明が跳んだ。部屋の天井に届きそうなくらいに。

明「必殺！『ウエイク ノン・レム！』」

明はまるで隕石のようになぜか体中が大気圏から落ちてきているかの如く赤い衝撃波を纏い光牙の腹に跳び蹴りを喰らわした。

チュドーン！

光牙「ふげばお！」

光牙は起きた。

明「おっはよゝう。」

返事がない、ただのしかばねのようだ。

「灯闇宅2F 自室」

といった風に起こすのでかなり迷惑なのである。

母「光牙。起きてるなら早く顔洗っちゃいなさーい。」

光牙「へーい。」

俺の家族構成は、母、妹の家族だ。父は謎の事故に遭い他界した。だから今は3人家族だ。ちなみに家は2階建ての普通の一般住宅だ。俺の部屋は2階の奥の部屋にある。妹は手前。母は1階の居間の隣の部屋だ。さあ、とりあえず顔でも洗ってくるか。

「灯闇宅1F ダイニングルーム」

母「おはよう。光牙。」

母は微笑みながら挨拶してきた。俺も負けじと微笑み返した。

光牙「おはよう。母さん。」

おっと、母さんの名前を紹介してなかったな。母の名前は「あかね灯闇茜」髪は黒髪ストレート、ボン、キュツ、ボンな見た目。そして父の名前は「とうやみ灯闇輝」だ。見た目は記憶が曖昧で覚えていない。ちなみに氏は結婚の時に決めたらしい。

明「おっはよ！お母さん。」

いつものようにテンションがやたら高い挨拶。

茜「おはよう。明。」

俺のときと同様に笑顔で返した。

光牙「おっ！今日の朝ご飯は天ぷらか。……。てっ、てんぷら！朝っぱらでか！有り得ないだろう普通！」

茜「なーに言ってるの！今日からあなたは3年生よ。これくらい食べて精力付けなきゃ！」

光牙「かつ、関係無くないかあ。それ！」

朝から天ぷらだぜ？天ぷら。ありえんだろう普通。寝言は寝て言えよ常考。って言うか天ぷらじゃあ精力は付かないのでは？精力なら普通はイモリやすっぱんだよなあ。

明「わーい。天ぷらだーい！」

我が妹がやたら嬉しそうにキャツキヤ騒いでいた。

光牙「本当にお前は新1年生（高校生）なのか！？頼む、嘘つて言ってくれ。」

茜「ほーら、あなたも明のように四の五の言わずに美味しく嬉しくいただきなさい。」

光牙「なんかやたら言い方怖いぞあんだ！」

茜「そんなこと言つて。時間間に合うの？あなた、今日の入学式にはあなた達3年生が1年生を歓迎するんでしょ。」

光牙「おーっと。すっかり忘れていたぜ。」

俺は席に着いた。そして箸を手に取り朝飯（？）を食べ始めた。

明「うまいぞおー！」

好物の天ぷらを食べてハイテンションの妹。

光牙「あのさぁ。明。」

俺はふと思った。

明「うん？らひ？」

明が天ぷら（海老）を丸ごとほうばりながら返事した。

光牙「お前。……。」

明「……。」

光牙「……高校生なのか？」

とてもじゃないがそうは見えるわけない。

明「（。ω。、）ひふれいな！ほうみへもほうほうへいへはらいか。」

解説「失礼な！どうみても高校生ではないか。」

光牙「どこが。」

明は天ぷらを丸呑みして言った。

明「それでも、お兄ちゃんの好きな所は日々成長してますよーだ。」

俺の好きな所？それは一体？

光牙「なんだよそれ？」

いきなり胸を張って自信たっぷりに言った。

明「胸のサイズ」

たゆん、たゆん

光牙「ぶはっ！」

飲んでる牛乳が宙を舞った。

光牙「なっ、なに言っただお前は！？」

俺が焦っていることをいい事にお調子に乗りすごいことを言うてくる。

明「ちなみに3日前にめでたくCカップです。」

なっ、なんだってー！？（。D。）

光牙「それは、中々丁度よく大きいサイズ……じゃなくって！」

しまった。つい本音が。

明「ふふん。妹に欲情する？」

光牙「……。」

欲情……するかもしれないな。

明がいきなり顔を赤くしてそして小さい声で言った。

明「……いいよ。お兄ちゃんになら何されても。」

……。兄と妹、お、おいしい。じゃなくて！

光牙「バカ者。」

俺は明の頭を小突いた。

茜「じゃあ。このGカップの熟女を好きにしていいわよ。」

光牙「シヤラップ！プリーズクローズユアマウス！アフター、

ノットジユクジヨ。」

解説「黙れ！頼む口を塞げ！後、熟女はいらん。」

そっいつも俺はこんな風にいじられキャラ。なぜかは知らん。

光牙「ごちそうさまでした。」

明「ごちでしたー。」

茜「はいはい。お粗末様でした。」

飯を食べ終わった俺達は学校に登校する準備をし始めた。はつきり言っって朝食は胃もたれした。

「自宅2F 自室」

光牙「……………」

光牙（今日から3年生なのか。大学どうしようかな。就職はちよつとな。今の世の中大不況だし。）

そうこの世界では今大不況の真っ只中だ。なぜかと言うとこの世界には普通では有り得ない用な事が起きている。この世界には、なんと悪の秘密結社チックな組織が存在しているのだ。その名も『ネガティブ』こいつらは私利私欲のために巨大ロボットというかなり有り得ない物を持ち出し銀行強盗を働いている。

……………どう考えてもやるのがしょぼい。巨大ロボット使って銀行強盗……………ある意味すごい組織だ。本当の目的は分かっていないらしい。本当に目的があつてやっているかも謎だ。まあそいつらがアメリカの銀行をだな。巨大ロボットで（こけて）潰したそのせいで大不況だ。許すまじ『ネガティブ』の巨大ロボット。

光牙「よし。着替えたしいくか。」

俺は部屋を出て妹の部屋へと向かった。

光牙「おい。明、学校行くぞー。」

俺はドアを開けた。……………ん？

明「あ……………」

光牙「……………」

俺はこのときかなりの時間が経過したように思えた。

明「……………」

光牙「……………」

永遠と思わせるような静寂。

明「……………」

光牙「……………」

＼（。。。）／……………。

そして時が突然動きだした。

明「行つてきまーす。」

茜「はい。行つてらっしゃい。あ、そうそう。」

母さんは俺の方を向き言った。

茜「なんか、変な予感がするから気を付けてね。」

？どうしたつていうんだ。いきなり？

光牙「どしたの？、いきなりそんな事言うなんて？」

茜「いえ、なんとなくね。そんな気がしてならないの。」

明「大丈夫だよ。お母さん！私もいるし、お兄ちゃんもいるし！」

光牙「えっ？そこは普通『お兄ちゃんのことならまかせなさい！』とかじゃないの？」

明は笑顔のままこう言った

明「いやあ。あれだよ。お互いサポート的な感じで、えーっと、心中？」

光牙「怖！俺、お前と一緒に死ぬのか。いやじゃ、いやじゃ。それなら俺はパイオツのおつきお姉さんの胸の中で窒素死したい！または萌え死ね。じゃなかった。それを言うなら、えーっと。」

茜「殺陣？」

明「ヤンデレ？」

光牙「なぜ、殺たし！」

茜「相互扶助？」

光牙「それだ！・・・たぶん。」

明「ねえ。そろそろ行かないとまずくない？」

・・・（。D。）あつ。

光牙「やつ、やばい！」

俺は明の手を取りドアを開け走り出した。

茜「いつてらっしゃーい。」

光牙・明「いつてきまーす！！」

「通学路」

・・・。

明「どしたの？お兄ちゃん？」

光牙「な、なぜだ。」

明「何が？」

光牙「なぜ、玄関の時計が、8分も進んでんだぁー！結
構リアルっぽい数字出しやがって、焦って走っちゃたじゃないか！」
俺は自分の体内時計を信じることが出来なくなってしまった。

明「ねえ、お兄ちゃん」

光牙「ん？何？」

明「えーつとお。」

明がいきなり顔を赤くし始めた。どうしたんだ一体？

明「あのね・・・（小声で）手。」

光牙「え？・・・。ああ、ごめんごめん。」

俺は手を離れた。しかしなぜ顔を赤くするのか？

明「あ・・・」

なぜか明は寂しそうな顔で俺の手を見た。

光牙「？どした？」

明「え？ああなんでもないよ。」

？さっぱり分からん。てか、キヤラ崩壊？お兄ちゃん全くビツク
りだお（＾＾ω。。）

光牙「ていうか、お前そんなこと気にしたっけ？」

明「！」

なんやら明が驚いた。

明「・・・お兄ちゃんの。」

光牙「？」

明「ヴァカーーーーーー！」

早い！バチーン！

光牙「ごはぁ！」

ビターン（ビンタ）された。

明「ふん！」

明が速いペースで歩き始めた。

光牙「うーい。待てよう明。」

明「お兄ちゃんなんか知らないんだから。」

はあ、なに不機嫌になつてんだか。お兄ちゃん訳分からんぞ。

「学校 校門前」

光牙「じゃあ、兄者は教室にいくぞよ。」

明「うん。行つてら。」

俺は校舎に向かったその時

明「あ。お兄ちゃん」

光牙「ん？（´。ω。´）なんだお？」

明が心配そうな顔をしてこつちに来た。

明「新入生はどこに集まるの？」

光牙「ああ。確かそこら辺でえ……………」

俺は周りを見た。

光牙「ほれ。あそこ見てみそ。」

明「あ。」

俺は「来たれ新入生！！！」と書かれている大きい縦看板を指した。……どんなセンスだ。

明「ありがと。お兄ちゃん。」

明の友達「あ！明ちゃん。」

光牙「じゃ、友達も来たみたいだし。俺はこれでな。がんばれよ。」

明「ありがと。お兄ちゃん。あ、そうだ。」

明が思いついたように言った。

明「えーっと、あ、あのね。帰り、い、一緒に帰ろ。」

なぜか明は赤面してそんなことを言った。

光牙「ああ。別にいいけど。じゃあ、校門で待ってるよ。」

明の表情が一気に明るくなった。

明「ありがとう！お兄ちゃん！」

俺は教室に向かった。

「学校 3 - A」

光牙「おはよう。影次」

影次「おう。おはよう光牙」

こ奴の名前は『無風 影次』俺の中学からの親友だ。趣味が俺と同じなんだぜ。性格は俺と似ているらしい。だが俺の性格なんて自分じゃ分かんぜよ。見た目は、なんと俺のドッペルゲンガーかと思えるぐらい似ているらしいがなぜか俺たちは他人から間違えられない。

影次「昨日さあ。買ったぜス。ロボ」

光牙「え！新作か？」

影次「ああ。新規作品は「霸王。系リユー。イト」「NG騎。ラム。& amp; 40」「獣。ラ。ガー」「エル。ランシリーズ」とかが出る奴。」

光牙「まじか。スパロボなのにフラゲ（フライングゲット）したのかよ。いいなあ。」

そう、俺の趣味、好きなものはアニメ、音楽、ゲームだ。特に好きなものはメカだ。ロボットものだ。他にも色々PCゲームやジャンルに手を出している。

影次「ところでさ。」

光牙「ん？」

影次「「3Dカスタ。少女」のパッチいる？」

光牙「コスは？」

影次「「ら。すた」の「こ。た（制服）」に「柊。妹（巫女服）」と「機神。哮デ。ンベイン」の「ア。（デフォ）」と「覇。

しまう。まあ俺たちのグループの一人だが、そんな浮いた話はない。まあ、二次元おいしいです。ていう人間が多いしなあ。

樹「でだ。光牙君。君に聴きたいことがあるんだけどなあー。」
ニヤけた顔を近付ける樹。正直暑苦しい。

樹「あの女の子は誰だい？仲良く手をつないで登校しちゃってえ。」

命「え？」

命の顔がなぜか不安がっている。

影次「光牙、まさかリア充になってしまったのか？まあ、おめでとう。と言うけど」

光牙「待て待て、あの子はそんな子じゃない。」

命「じゃあ、なんなの？」

おお、なんだか妙に命が喰い付いてるなあ。なんか新鮮。

光牙「今日からこの学校に通うことになった。新1年生の妹だ。」

樹「なん、だと。」

命「妹さんのね。」

命はなぜか安心したかのような仕草を見せた。

光牙「そだよ。」

影次「なんだ。妹か。」

樹「光牙のバカ！私というものがありながら妹に走るのね。このロリコン！」

教室の皆が俺の方に目を向けた。

光牙「誤解を受けさせるようなことを言うなと！っていうかキモいって話だ。それに妹ならシスターコンプレックスだからシスコんだ！」

影次・命「うんうん。」

樹「えっ、っていうか、キモいってちょっと酷くね？（´ε、`）」

教室の隅っこにいる女子達が黄色い声でキヤーキヤーいつてるの

が聞こえた。この腐女子どもめ。っていうかあれ？俺の訂正部分スルー？

影次「そういえばさあ。このニュース知ってるかな？」

光牙「なんのニュースだ？」

影次「最近ネットで話題になってるんだけどさ。」

樹「なんだなんだ。陵辱系統の規制のことか？」

命「むしろ、児童ポルノの規制の方じゃない。」

光牙「いや、そっちの方は廃案になったはず。」

影次「そっち系統の話じゃないんだ。」

3人「あ、そうなの。」

ついシンクロしてしまった。

光牙「んで、一体何の話だ？」

影次「なんかね。最近、妙な飛行物体がこの辺りを飛んでるとかなんとか。」

光牙「？どういうことだ。」

妙な飛行物体だあ？知らんな。まさか……。

光牙「もしかして、ネガティブの新型か？」

命「いや、WDF (Would Defence Force) の新型の戦闘機の実験かも。」

『WDF (Would Defence Force)』とは市民の安全を最優先としネガティブやテロリストからの攻撃を防ぐ組織のことだ。別名は『オールディフェンス』（略は「オーディン」と言われている。）

樹「ここでまさかのUFOとか。」

影次「まあ、UFOなんじゃないかな。」

樹「え、宇宙人すか？」

光牙「宇宙人とは限らないさ。UFOは未確認飛行物体の略なんだからさ。ネガティブやテロリストの新型ならオーディンにとっちゃ全部UFOさ。」

命「じゃあ、民間人じゃあ理解できないね。」

影次「そうだね。」

そう、ようするにUFOの定義はあくまでもデータの無い未確認物体で飛行する物体であることだ。だからオーデインのデータバンクにない飛行物体なら全部UFOになる。データがないからな。

光牙「んで、なんで話題になってるんだ？」

影次「なんかね。その飛行物体には機体が積載されているのではないか。と言われてるんだ。」

光牙「何を根拠に。」

影次「なんでも、人の肉眼でも見えないステルスをはってるらしいんだけどその大きさが普通のネガタイプの巨大ロボットくらいの大きさらしいんだ。」

樹「あれと同じくらいだって！随分大きいな。」

光牙「いや、待て。なんで大きさが分かるんだ。ステルスはってるんだろ？」

影次「なんかね。情報によるとサーモバイザーで見たところ機体の中に別の熱源反応が一つあったらしいよ。」

なるほど、サーモバイザー（熱源探知式スコープ）で熱源体の大きさを計った訳か。

命「でもその情報ってどこからの情報なの？」

影次「この情報自体はオーデインの公式ホームページに書き込みがあった。」

光牙「なんてページに」

影次「『いくぜオーデインズ』ってある一人のオペレーターの日記に。」

樹「どことなく信憑性があるな。」

全くだ。なぜか信じられる気がするから困る。だが、名前が怪しいとまでは行かないがなにかひどい日記だ。

光牙「それで、ネットではその輸送艦らしき中に新型のロボットが積まれているのじゃあないかと話題になってるわけか。」

樹「どうせ、お前らみたいなメカオタたちがだろ。」

光牙「うるさいぞ如月スケベ君。」

樹「ひでえ。(´。ω。´)」

影次「ま、とにかく。その新型のデザインや性能のことで話題になってるわけよ。」

命「本当に光牙君と影次君って、ロボットが好きなんだね。」

光牙・影次「ああ、三度の飯より」

樹「なんか、おかしいような気がするぞ。」

光牙「いや、どこも。ロボットは漢のロマンだからな。」

樹「そんなもんかねえ。」

命「そうかもね。」

影次「あれ、命は分かっちゃうのかな。」

これは以外。

命「ほら、男の子はロボット、女の子は人形やアイドル、って
いうじゃない。」

光牙「あーっ。それ何かで聞いたことあるは、あれ、じゃあ命
は人形で遊んだりしたのか？」

今の話的にそうなるよな。

命「昔はね。今はアイドル。マス。ーかな。」

影次「あー、アイマスね。」

そう、命はモテるらしいのだが、若干オタクが入ってるため俺た
ちのグループなのだ。そしてそのことのせいで引いてる野郎もいる
らしい。だから浮いた話が一切無い。俺的にはかなりのポイントだ
と思うが。

光牙「なるほど。女の子はアイドルか。それ以外は。」

命「うーん。お姫様ということで。プリメかな。」

光牙「や、それはなんか違うかな命さん。プリンセスメー
ーはロリコン御用達のゲームなのでは！」

プリメをやつてるとはおじさんびつくりだお(´。ω。´)。

命「ちなみに私は4が好きかな。」

光牙「ああ。奈々様だもんな。」

命「やったの？4」

光牙「借りてやった。ちなみにスーパーファミのエミュで初代もやった。あれは3、4周したなあ。」

そう、俺はやった。ロリコン御用達のゲームを。複雑な心境である。

樹「なんだあ。やつぱロリコンじゃん。（´ε、`）」

光牙「いや、あれは絵がいいからだなあ。」

影次「そうだね。美少女ゲームも絵買いさえあるもんね。」

樹「そーいゃあ。美少女ゲームってなんのゲームのこと？」

樹は俺たちのグループで唯一の一般人である。ただ、一緒にいると楽しいらしいから俺らのところに来るらしい。

光牙・影次・命「（。D。）！！！」

三人とも固まった。顔が劇画調で。

樹「？どしたん。」

命「言わなきゃダメ？」

樹「うん。」

しょうがないな。いつもの説明といくか。

光牙「しょうがない。俺が説明してやろう。初心者や一般人にも分かるギャルゲーと美少女ゲーの違いと本当の言い方を。」

そんなことを話してるから普通のクラスメイトの耳は俺らの方に向けられていた。

樹「よろしくお願いします。」

その時であつた。

明「あ！お兄ちゃん。」

クラス全体「！！！」

皆そつちに目がいった。

光牙「……。明！なつ、なぜ！」

そういうと、担任が教室に入ってきて言った。他にも明以外にたくさん的一年生が入ってきた。

光牙「あ、ていーちゃー。なんで明たちがこの教室にいるのか

なあ？」

3 - A担任「おお光牙。今な新入生に『我が校の三年生が何を話題としているのか。』とか『どんな感じなのか』を集会の前に学年主任の俺が紹介して回ってるんだ。」

この俺のクラスの担任の名前は『熱意^{ねつい}学^{まなぶ}』。名前の通り熱血先生だ。まあテレビにいるような暑苦しい熱血じゃない、密かに燃やしているって感じ。性別は漢（男）。髪はなぜか長髪。なんでも髪を切りに行く時間が無いらしく三つ編みしている。背は高い。痩せてもいないし太ってもいない。女子生徒に人気がある。通称マナブ先生またはマナ先。地味にこの先生はオタク趣味であるからして俺たちと話す機会が多い。俺は良い先生だと思ってる。

光牙「はあ、なるほど。どつかの異議ありと言ってるナル。ドさんみたく納得しました。」

ふつ、我ながら苦しいネタだ。……じゃあ、言つなよ俺！！

影次「お前、言いたいだけちゃうんかと。」

光牙「あふん。痛いところ突いちやらめ。」

樹「きめえw」

光牙「うつさい。お前に言われたかない。」

マナブ先生「ま、そんな訳で今お前が演説するものを聴くとする。」

光牙「なん、だと。」

命・影次「な、なんだってえー！」

明・樹「さあ、どうぞ！」

くつ、覚悟を決めるんだ光牙。やるしかない。こんなキツイのは園芸部の部活紹介以来かもな。っていうか、俺基準で話していいのか？新入生に。マズイだろ。

光牙（新入生は……さ、30人すか。きついぜよ。）

命「やるしかないよ光牙君。」

命が耳打ちしてきた。

明「……………」

その姿を見てなぜか明がむくれているのが見えた。なぜだ？

光牙「じゃあ、説明してやるうじゃないか諸君。」

「灯闇 光牙の教えてそれなんて教室」

ナレーション「説明しよう。この空間は光牙の気迫により作り出された幻覚だ。この空間内では光牙はマイペースで物事を説明・解説していくぞ。」

樹「背景が変わった！」

明「何をやったし。」

命「今のナレーションなに？」

光牙「ふふん。君達が見えているのは幻覚だ。実際ここは教室だ。」

影次「どんな。とんでも設定だよ。」

さあ、いくぜ。

光牙「はい、じゃあまずギャルゲーの説明をお兄さんと一緒に見ていこうね。」

樹「あ、はあ。」

光牙「ギャルゲーとは恋愛シミュレーションゲームの通称だよ。大体のものは15禁なんだ。ハードとしてはP.O.2やP.O.Pのゲームだよ。例としては「人生」とかな。」

樹「はい、先生。」

光牙「はい、樹君。」

樹「恋愛シミュレーションゲームとはどんなことをするゲームですか。」

光牙「うん。中々良い質問だね。恋愛シミュレーションゲームというのはね。大体は女の子とのフラグを立ててその女の子と付き合うことになって女の子ごとの個別ストーリーをプレイするというアドベンチャーゲームだよ。まあ、物によっては告白されるまでの話ってこともあるけどね。まあ、せいぜいキスや水着シーンがある

ので15禁なんだ。」

マナブ先生「フラグって？」

光牙「その女の子が主人公に対して恋愛感情を抱くことだよ。一応。っていうかあんた分かってて聴いてるだろう！！」

くそ、マナブ先生め楽しんでやる。

明「はい、先生。」

光牙「何かな。妹君。」

明「「人生」ってなんのこと？」

光牙「それは大人の事情により禁則事項です」

クラスメイト「とき。きメモリ。ルとかもそう？」

光牙「ああ。そうだよ。」

新入生「美少女ゲーの説明は？」

光牙「そうだね。んでだ、美少女ゲームっていうのはね。」

ついに来てしまった。

光牙「美少女恋愛シミュレーションゲームって言うんだ。」

樹「で、通称は？」

光牙・影次・命・明・マナブ先生「・・・・。」

光牙「エツ、エロゲーって言うんだよ。18〜20禁のゲームなんだ。ハードとしてはPCだね。ちなみに多種類にカテゴライズされているんだ。そして18禁〜20禁の理由としてはせ、SEXシーンや、り、陵辱シーン、鬼畜、姦、スカ。口、痴漢などのシーンやグロテスク過ぎる画像があるからだよ。」

クラスメイト「その多種類って？」

光牙「抜きゲーとか泣きゲーとか凡ゲーとかだよ。通常は純愛ゲーかな？たまにエロ有りグロゲーがあるけどね。そのエロ有りグロゲーが20禁かな。」

マナブ先生「どんなタイトルのゲームを君はやってるのかなあ？」

光牙「サー！！D。。。？。。。C・FORT。NEAR。ERIAL。とっ。らゝざし。わらしのは。しゝ。3Dカスタム。

女・ぬる。・ブル。・Chux2ア。ドル・しこたまスレ。ブ・大
。長・Duel。avior justice。おしえて！。子
先生・幼なじみと甘く。ツチに。ごす方法、などであります！」

マナブ先生「テラ抜きゲー。」

光牙「失礼な！！デモベみたいな話が神ゲーをやると、抜きゲ
ーか話やゲームシステムが神ゲーぐらいしかできないんだい。」

マナブ先生「でも、D。？やフォーチュン、とつ。らの3
作品は凡ゲーだぞ？」

光牙「まあ、初めてやった3作品ですから。」

明「ていうか、お兄ちゃんそんなゲームやってたんだ。」

はっ！？明が怒っていらっしやる。ああ！地味に命さんも！

マナブ先生「俺は大。長とDuel。avior justice
は古い方だからやったな。」

光牙「マジッすか！？っていうか自重した方が良いでしょう役

職柄あなたは！」

マナブ先生「でも光牙は歳いくつかなあー？」

光牙「18歳です。」

影次・命・マナブ先生「オイオイ。」

光牙「その突っ込みは17歳だろう！！常考！！」

樹「じゃあさ。」

光牙「もう許してください。」

「学校 3-A」

光牙「ああ。父さんらしき屍が向こうの岸で僕を呼んでいる。」

影次「死ぬなあ、光牙！お前この説明が終わったら、結婚する
って言ってたじゃないか！」

光牙「影次、こいつをあの娘に届けてくれ。頼。ん。だ。
。そ。。。。」

影次「光牙ーーーーー！！」

命「やつぱり、この羞恥プレイには耐えられなかったのね。」
まあ、この後は酷いものだった。当然、担任には軽い叱咤（という名の建前）を喰らい、クラスメイトや新入生の半分の人間に見事なまでに引かれた。そして……。

「体育館」

今日は始業式だから全員体育館にいる。今は校長の話をひたすら聞いているところだ。

光牙（ああ。やつぱり、校長の長話はきついものがあるな。）

校長「話を変えて最近のニュースについてです。最近この辺りの地区に不審者に気を付けるようにとWDFから呼びかけられます。皆さん気を付けましょう。」

？あのオーディンがただの不審者に気を取られてるとでも？おかしい話だ。なにか匂うな。

「廊下」

光牙「うーっ、足が重いお。」

???「おはようございます、光牙様。」

！俺はびっくりして振り向いた。俺のことを様付けするのは……。

光牙「ああ。リープ姫さんか。おはよう。」

この女の子の名前は『リープセンス』。クラスは違えど学年は同じ（去年は同じクラス）この日本の学校に留学しているヨーロッパのどこかの国の真正正銘のお姫様である。見た目は金髪ツインテール、背は小さめ、ボン、キュツ、ボン。性格はおっとりしていて和めるような人。去年この学校に留学してきた時に姫さんは自分の趣味を理解してくれる友達がいないく、一人だったんで声をかけてみたらなんとお姫様の趣味が俺と合っていたので仲良くなった。そん

なお姫様の趣味はピアノ、日本文化との触れ合いだった。えっ？俺みたいな趣味の人間はマズインじゃないかって？それはノープログレム。お姫様は日本文化を勘違いなさってるようで、姫さんはそっちの方に興味があつた。そう、最近のマイブームはエロ同人と美少女ゲーだそうだ。いやあ、趣味があることはいいことだけでも、まさか一国のお姫様がそんないかがわしいものに興ぜられていいのだろうか？

リープ「どうしたのですの？少し体調が悪そうに見えますが？」

いやあ、お姫様とお話するのはいいが、周囲の視線が酷く痛いんだよなあ。ヲタクでも見た目が美少女なせいでモテるし。噂では西洋のアンティークドールとまで言われてるし。

光牙「いやあ、ちよつと朝に鬼畜（羞恥）プレイを敢行されてですね。ちよつと教室に足を運ぶのがきついんですよ。」

リープ「鬼畜？ですか。」

なぜかリープの目が光った

光牙「はい。」

リープ「それはそれは。光牙様は一体どのような恥辱な事になったんですの？」

光牙「へっ？」

リープ「鬼畜プレイということは、もしかして光牙様が鎖にながれてアナ。バ。ブを。それとも、誰かに奴隷にされあんなことやこんなことを！」

や、やばい！リープの頬が紅色に染まってきている。暴走を止めるために話をそらさなくては！

???「姫さん。光牙は別にそんなことされてませんよ。ほんの少し痛い目見ただけですよ。」

光牙「おーっ！ナイスタイミングだドール。」

この気の優しそうな男は『ドールⅡシラヌイ』。日本人と米人のハーフ。見た目は銀髪ストレート、ヒョロそうに見えるが運動はかなり出来るIKEMENである。付き合いやすい友達。ちなみに

俺らのグループだ。そう、ヲタクなのだ。ちなみに女子にはモテる。
 ……いいなあ。

リープ「えっ？そうなんですの？ドールさん。」

リープの暴走は止まった。

光牙「ドールの言うとおりだよ。」

「ドール、分かっていたら光栄です。」

リープ、「ごめんなさい！光牙様。私っただらなんて言
つたらよいか。」

慌てるぐらいなら言わなきゃいいのと思った。

光牙「ああ、大丈夫です。そんなに頭を下げないでください。」

生徒A「あいつ、我らの姫にあんな行動させやがって。」

生徒B「これは許しては置けないな。」

うおーい！お前ら俺だけに聞こえるように言つなよそんな怖いこと！

リープ「こうなったら、光牙様。」

光牙「え、あつ、はい。」

「えーっと……」

リープが顔を赤くし始めて、俺の人生が幕を閉じることになった。

リープ「光牙様の性欲を満たすために、ふしだらな私を使って好きにして下さい。」

リープの頬が爆発しそうなくらい赤くなった。

光牙
「
・
・
・
・
・
○
」

死んだ。俺は、今絶対死んだ。萌え死んだのと、今から起こりうる大量の殺意に。

生徒複数「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す。」

うわあ。おつかねえ。そのおつかなびつくりの殺気が俺に向けられている。

「ドール、良かったじゃない光牙。君専属の性奴隷ができて。」

ああ！こいつさらに修羅場になるようなことを。

リープ「さあ、光牙様。どうかこの淫乱なメス。を好きになさ
って下さい。」

光牙「お前らエロゲー（抜きゲー）のやりすぎだああー！
ー！！！」

俺は廊下から自分の教室まで走った。姫さんの後ろから迫り来る
多々の殺気から逃げる、もとい後ろに向かって前進した。

こういう奴らと俺は学校生活を共にしている。こんな日常がずっ
と続くかと思っていた。そう、あの日が来るまでは。

END

第0話「プロローグ？ちよっ、それ詳しく。」

第1話「BOOT 〽起動〽」(前書き)

高山高校の3年生、灯闇光牙は趣味はオタクだが極普通の男の子。
ここから、彼の運命が動き出す。

第1話「BOOT」起動」

朝。

必ず来る朝の光。

同じようで同じ事の無い新しい朝。

そんな新しい朝の光の下

俺の意識は覚醒していった。

OT「起動」

第1話「BO

「灯闇宅2F 光牙の部屋」

光牙「ああ〜眩。」

俺は起きた。太陽の光があまりにも眩しいから。

光牙「さあ。着替え済ませちゃうか。」

俺は体を起こし、タンスの方に移動しシャツを出し、壁に掛けられている制服をシャツと一緒にベッドの上に置いた。

ダッ、ダッ、ダッ

階段の方から音がしているのを光牙は気付いていない。

光牙「さてと、とりあえずトランクス一丁になつてと。」

俺はスムーズに自分の羽衣を脱いでいった。

トットトット

廊下からの足音さえも気付いていない光牙。

光牙「ああ〜、今日はいつもと違って比較的暑いなあ。」

俺はなぜかパンツ一丁のまま伸びをした。

ガタン！

ドアが壊れたかと思うぐらい強く開いた。

光牙「へっ？」

明「HEY！BROTHER！おつはよう……………」

光牙と明はザ・ワー。ドを掛けられた。

光牙「……………」

明「……………」

またこの展開か。今度は俺が被害者か。

明「き、きやあああー！ー！お、お兄ちゃんの変態！そんな赤黒くて大きいモノ早くしまつてよお。」

光牙「はあ？お前何言つて。」

気になつたので下半身を見てみた。

光牙「……………」ああー！ー！見事にナニを出すところから朝。ちしたのがこんにちはしているー！ー！」

明「は、早くしまつてよお。BAKAAAAAAAAAAAAAAH！！！」

明は稲妻の速さでパンチを繰り出してきた。

バチコーン

光牙「ひでぶ！」

俺は空？高く天井のすれすれまで舞い上がった。その姿はまるで裸の天使なりけり。

光牙「なぜ、俺の方が、……………」なんか、理不尽だよなあ。」

ドサ

光牙は天国から地獄の床へと頭から落ちた。

明「……………」はっ！お、お兄ちゃん。ごめん、大丈夫。」

返事がない。ただのしかばねのようだ。

明「……………」つていうか、隠して速く。」

光牙「……………」むしろ、お前はそんなこと言ったり殴ったりするならマジマジと見ないで後ろを向け！」

は、恥ずかしすぎるぞ。くそお。早くしまつてこ。つか殴られるの俺かよ何か理不尽ではないか？

明「お、お兄ちゃんのおつて……………」おつきくて。あんな色してるんだ。」

明がもの凄く小さな声で発した。

光牙「？なんか言ったか明？」

明「ななな、何でもない。」

明が今何か言ってたっぽいけど、まあいいか。速く着替えよっと。

光牙「いいぞ。明、もう着替えた。」

明「う、うん。」

明がこちらに振り向いた。

光牙「おはよう。明。」

明「お、おはよう。お兄ちゃん。……。」

うーん、なんか気まずい雰囲気だなあ。

光牙「よし、朝飯でも食うか。」

俺は現状を打破したいため声を大きめにしていた。

明「あ。……うん！」

明は元気に返事してくれた。

「灯闇宅1F ダイニング」

茜「おっはよう。光牙、ちゃんと下の方を納めとけよ。その怪物を。」

光牙「はあ！朝っぱらからなんだこの変態熟女は！そういう話あまりしないでくれ。それに今から朝飯なんだぞ。下ネタをやられると飯がまずくなる。」

明「おっはよう！母さん。今日も一日気張っていこう！」
何を気張るのだろう。

茜「おっはよう。明、さっご飯にしませう。」

光牙「あれ、あの？俺の突っ込みはスルーですか？」

ひ、ひでえ。

茜「何一人でゴチャゴチャ言ってるの。さあ椅子に座ってご飯
ご飯。」

明「ご飯ご飯。」

スルー来たコレ。もういいや、ご飯ご飯w

朝飯を食っていて思った。

光牙「そいや、母さん。」

茜「うん、何？」

明「どした兄者。」

光牙「ああ、妹者にも聴いとこうかな。」

俺は昨日の学校での校長の話を出して要点を言った。

光牙「WDFがただの不審者如きで学校に直接注意しろって連絡があつたらしいんだ。」

明「ああ、言つてた言つてた。」

茜「ほう。それで。」

光牙「あのオーディンがそこら辺の不審者について注意するなんて考えられない。だからなんか怪しい感じがするんだよね。」

そう、WDFとは、世界各国の軍人で構成されている。設立の目的は武力による戦争をさせないための各国への抑止力と圧力（力を持つて制裁する訳ではない。あくまで威嚇だ。）といつか来るかも知れない外宇宙からの侵略やアニメのような悪の組織への防衛手段だ。ちなみに、今は「核」の存在は全世界であつてはならないことになっている。でもエネルギーとして原子力を使っている。だから、核所持の違反は恐らく意味はない。マスコミは「もう、大丈夫。」なんて一般人に報道しているが、俺はあり得ないと思う。結局、どこにでも支配欲や野望を抱えている危険分子はいくらでもいるんだ。核兵器がどこかに存在してもおかしくない。まあ、話を戻すと、WDFは軍隊だから不審者にはかまつてられない訳だ。今は悪の秘密結社ネガティブによる犯罪が多数起きてるからな。

茜「そうね。今までは不審者ぐらいじゃあ。注意なんてなかったのね。」

明「考えすぎかもよ。世界が平和に近づいてきたからじゃない。」

光牙「それはあり得、」

光牙はいきなり口を閉じた。

明「どしたの？」

光牙「そうだな。平和なのかもな。ハハツ……。」

明は平和だと思ってるんだし。不安がらせることも無い。それにネガティブが絡んでるかも知れないと思うのは俺の考えな訳だし下手に何か言くと明を困らせるだけか。

茜「でも、やつぱりちよつと気になるわね。」

光牙「うん。」

明は首がもげるんじゃないかと思わせる速さで俺の方に顔を動かしよう言つた。

明「お兄ちゃん！時間！！」

と言つた。……えっ？

光牙「じ、時間？」

俺は恐る恐る時計に目をやつた。

光牙「うわあああー！つてなんだ。まだ7時30分じゃん。

驚かすなお。（´。ω。、）」

んっ？何か時計に違和感が……。

茜「ああ、その時計はインテリアの時計だから、動いてないわ

よ。」

（。D。）……。

光牙「イ・ン・テ・リ・ア・だとお！」

どんだ！

明「私は携帯で時間を見たの。今は8時10分だよ！」

8時10分？えーつと、いつも俺が家から学校までは大体20分か。んで、余裕を持って登校したいから学校のHRが始まる2、30分前に着くようにしている訳で、それで学校のHRの始まりの時間は……8時30分か。うーん、なるへそって！

光牙「ぎり遅刻だ！」

明「速く食べなきゃ！」

光牙「トーストはくわえて走りながら食うしかないか。」

茜「なにより、速さが足りない。」

光牙「どこの津久井さんかと。まあ、やっぱり保志いいもだけど、ヘルシー太郎イトケンと俊彦、明夫、毅、グリリバだる常考。」

明「じゃあ、女性声優は？」

光牙「三咲里奈と木村アヤカ（ツンデレver）、佐本二厘おっとりだる常考。」

・・・は！？（。A。）

光牙「んなこと話てる場合じゃあねえーーーーー！」

俺たちはすぐに飯を片付けて口にトーストを咥えて家を出た。

茜「いつてらっさい。」

光牙・明「いつへひまーふ。」

「通学路」

俺たちは最初に走ったせいか時間に余裕が出来たから歩き始めた。トーストを食べながら。

光牙「そーいやさあ。もぐもぐ。」

明「うん。何お兄ちゃん？もふもふ。」

明は顔をこちらに向け少し頭を傾けながら反応した。

光牙「どだ、うちの高校の雰囲気は。もぐもぐ。」

明は少し考える素振りをしてこーいった。

明「まだ、はつきりとわかんないや。もふもふ。」

光牙「それもそっか。もぐもぐ。」

俺は、もつと明と話していれば良かったとなぜか思っていた。なぜだかは分からない。なぜかもつと話しておきたかったなあと考えた。

「3・A」

光牙「おはよー。」

光牙は教室の扉を開けながら挨拶した。

影次「ああ、光牙おはよ。」

命「光牙君、おはよう。」

樹「おはよっす。」

光牙が席に着くと皆が集まってきた。

命「ねえ、光牙君。」

光牙「うん、何命？それにお前らまで。」

影次「昨日いった輸送機の新たな情報が出たよ。」

光牙「ほう。」

樹「なんでも、この空域を飛んでるだ。」

光牙「この空域を？」

光牙（なんだろう、何かおかしくないか。この辺りには軍事基地も自衛隊基地もない。しかも輸送機が降りられる場所もない。一体何が。）

影次「なんでも、噂では敵と思われるものに追われているとか。」

光牙「敵と思えるものか・・・。」

キン、コーン、カーン、コーン

命「あ、今日は全校朝会だから体育館に集合だよ。急ごう。」

光牙・影次・樹「OK」

「体育館」

光牙（また、校長の長話か。誰かと話したくても、命は放送部、樹は後ろの方、影次は人混みでこの列のどっかに。そして俺は前から5番目か。はーあ、つまんねえなあ。）

ズズーン

変な音が鳴った。光牙にとってはその音はゲームでよく聞く音だった。

光牙（今、校長の話で聞こえなかったけど、今のは確かに爆発音だった。どこからだ？いや、でもそんな馬鹿なことがあるとは・

。。
)

バキバキ、ズズーン！

突如、体育館の校長の立っている舞台の後ろに何かが、落ちてきて体育館の10分の1を崩壊させた。

光牙「んな、バカな。これは夢か？現実？リアル？」

教職員・生徒「ぎゃあああーーーーー！！」

光牙「えつ、ちよつ。」

ズドドドドド

光牙は姿を消したと思ったら、逃げた人たちの下敷きになっていた。

ズドドドドド

嵐は去った。

光牙「いっつつつ、痛いなあ、もう。踏みつけやがって。」

光牙は痛みを我慢しつつ立ち上がった。

光牙「まあ、おかげで落ち着いたけどな。にしても……

一体何が落ちてきたんだよ？」

俺はそつと目を落ちてきた物体にやった。

光牙「！こいつは。」

「渡り廊下」

影次「あつ、命さん！」

命「影次君！」

影次「良かった。無事だったんですね。」

命「うん、影次君こそ良くあの集団の走りについてくれたね。」

影次「偶然さ。僕はちょうど、体育館の入り口近くにいたから。」

「

樹「おい。命、影次！」

影次・命「樹君！」

樹「よかった。無事だったのか。」

影次「そつちこそ。」

ドール「ああ、皆無事だったんだね。良かった。」

影次「ドールさん！」

リープ「命さん！大丈夫でしたか？」

命「リープさん！」

樹「とりあえず、皆、無事そうだ・・・な・・・？」

命「光牙君が・・・」

影次「いない？」

皆の顔が青ざめた。

影次「この中で光牙を見たのは・・・？」

樹「俺は見えてない。」

ドール「同じく。」

リープ「私もですわ。」

命「だ、大丈夫かなあ？」

影次「きつと先に逃げたんだろう。だから僕たちも早く指示された教室に行こう。きつとそこにいるさ。」

マナブ先生「おお、お前らここに居たか！さあ、速く、とりあえず3-Aに避難だ！」

影次「でもそれ、逆に危なくないですか！？」

マナブ先生「それが、この街の人全員がこの学校を避難場所としているから生徒達と教師達は全員各教室に避難なんだ！」

ドール「ようするに、大人達が生き残るか確率の方が高くないとうるさいのね。ハア、こんな非常事態の時にまでそんな扱いなんだ。酷いもんだ。」

マナブ先生「俺もそう思う。この国のお偉いさんは国の宝であるはずの子どもより年齢が高い奴を優先しているんだ。馬鹿げてる。」

そして影次たちは指示された3-Aへの避難を開始した。

「体育館」

光牙「！こいつは。」

俺は驚きを隠せなかった。

光牙「ロボットだと・・・。」

光牙はその機体から目を離せなかった。

光牙「あの機体のディテイルからして特機か。スーパロボットなんでここに

落ちてきたんだ？まさか噂の輸送機に積まれていたオーデインの新
型か？」

ズズーン

光牙はその振動と音に聞き覚えがあった。

光牙「機体が着地する音か！？」

その方向に耳を向けると、外部スピーカーで通信しているらしき
声が聞こえた。

「???1『なあ、ここに落ちたんだよな。あの機体?』

「???2『ああ、そのはずだが・・・おかしいな、どこか
に埋まつているらしくて目視できないぞ。』

「???1『だあから俺はミサイルで落とすより近接で直接叩き
のめした所を回収した方が良いつて言っただ。』

「???2『俺のせいだとも言っのか?』

「???1『モチのロンよ。』

そんな声を聴いて思った。

光牙「随分、緊張感に欠ける会話だなあ。いやあ、何か皆の生
命の危険性を感じられないなあ。(まあ重い展開で人が死ぬなんて
ことがあるより大分マシか。)」

そう呟いていると奴らの機体が動いた。光牙は大穴の開いた体育
館からその機体を見た。

光牙「おつ、動いた。お、おお、機体の正面が見えたぞ。」

光牙は見て驚いた。

光牙「えつ、あのディテイル。中量級二足歩行メカと・・・
軽量級多脚歩行メカかよ！まてまて、落ち着け俺、オーデインはあ

んなに悪っぽいデザインのメカでしかもあんな強そうな二足歩行メカと蜘蛛足の機体なんてないはずだ。なぜならヒーローメカっぽくないからな。」

そしてまた敵の声が聞こえた。

???1「あーあ、どうするよ、もし例の機体が壊れてたら。」

???2「あれぐらいで壊れるような機体じゃないはずだ。第一それぐらいで壊れる機体だったら我らネガタイプの障害にはなり得ない。」

???1「えっ、じゃあ近い未来アレがネガタイプの驚異になるかもしれないから破壊任務が下されたの?」

???2「・・・分かってなかったのか。」

???1「てつきり俺はあの変態博士のところで残骸が実験に使われるぐらいに思ってたよ。なあんだ。」

光牙（緊張感ねえー）

光牙はとりあえず状況を整理した。

光牙「あいつら自分でネガタイプって言ってたな。つーことは今ここに落ちてきた機体が恐らくオーデインの新兵器で性能が高いから邪魔になる前に破壊又は歯獲ろかくしとこうとおもった訳だ。」

奴らの機体がこつちを見たまま静止した。

???1「あつ、あつた。」

光牙「あ、ばれた。」

その瞬間、俺はとんでもない物を見た。

光牙「・・・・・・はぁーーーーー!?!」

奴らの機体に積まれてるキャノン砲っぽいのとミサイルをこちらに向けられていた。

???1「あんな見にくい場所に倒れていたか。では、ちゃっちやと終わらせますか。」

「3 - A」

命「あの機体撃たれるよ！」

影次「待って、もしかしたらまだ光牙があそこにいるんじゃない？」

樹「先生！光牙は見つかったんですか！？」

どっかの先生「いや、実はあの体育館以外調べ終わってるのだがどこにも居ないんだ。」

マナブ先生「じゃあ、あそこにいる確率が高いんですね！？」

どっかの先生「いや、まあそうだが。」

マナブ先生「私が行きますよ！」

どっかの先生「やめなさい。死にますよあなたは教師の金の卵だ、死ぬと困ります。」

この状況では本音が出る。そう人は死を間際にすると地が出る生き物だ。

マナブ先生「教師の金の卵なら助けにいくべきでしょうが！」

揉めている先生達を見て教室内にいる生徒は焦っていた。

リープ「光牙様……。」

ドール「光牙……。」

影次（光牙、無事でいてくれよ。）

「体育館」

光牙「うおおーいガチで死ぬぞ俺！緊張感の欠片のないこの場面で死ぬなんてシャレにならん、良し！一刻も早くここを出よう。」

ズズーン

光牙はその音の根源に目を向けた。

光牙「……（。D。）……体育館のドア付近が壊れたー」

「！！！！」

「？？？１『んじゃ壊しましょうか。』」

光牙「待ってー！本当に死ぬー！ああこんなことになるな

らもつとメカアニメ見て色んなゲームをやっておけば良かったなあ。
・・・なんて言ってられない状況から誰か助けてくれー！ちくし
よー！」

光牙はその時気付かなかった体育館に落ちてきた機体のバイザー
が光り始めたことを。

光牙「ああ、今もだけどこういう時こそ俺が落ちてきた謎の機
体に乗って皆を救うようなシチュエーションに憧れてたなあ。」

???2「！今バイザーが緑に光ったぞ。」

???1「起動させるかよ！」

???1・???2「ファイヤー！」

バシユツ！

撃つ撃つ撃つひたすら武器を撃つ。

光牙「オワターー（。D。）／＼！」

チュドーン！

撃たれる撃たれる撃たれる。

ドドドド、チュドーン！

もはやその空間には発射音と爆音と薬莖などが落ちる音しかな
かった。

???1「ふーっ、弾切れだ、弾薬費が結構掛かるなあこりや。」

」

???2「ああ。そうだな。」

もはや撃たれた場所は煙しか見えなかった。

???1「これだけ撃ったんだもう跡形も残ってねえだろ。」

???2「では、確認は我々が持ってきた偵察用ロボット「イ

スパ」にまかせて帰還するでしょう。」

???1「OK」

奴らはイスパを出そうとした時煙が晴れた。

???1「お、おいなんだあれ？」

???2「ん、どうし・・・！」

なんと体育館に謎の緑色のフィールドバリアが展開されていた。

「????」

光牙（俺は死んだのか？）

光牙は謎の空間にいた。

光牙「体が浮遊している。やっぱり死んだっぽいなあ。」

???「死んでなぞおらぬ。」

その空間に誰かの声が響いた。

光牙「誰だ！」

???「私の名はブライ。」

光牙「糸目男爵だと！」

ブライ「違う。そんな大。長のキャラではない。」

光牙「冷静に返された！」

ブライ「用件を言う。まずお前は死んではない。」

光牙「死んでない？じゃあこの空間はなんだよ。」

ブライ「ここは光天成の中だ。」

光牙「光天成？」

ブライ「今はそのことしか言えない。灯闇の血を引く者よこの
光天成「ブライトライズ」で地球に迫り来る悪と戦うのだ。」

光牙「・・・。」

ブライ「では、また会おう灯闇光牙よ。」

光牙「あ、おい。灯闇の血がなんだっていうんだ。教えてけ！
おい。」

「ブライトライズコクピット」

光牙「うーん。ここは一体」

光牙は目を覚ました。

光牙「なんだったんだ今の。っていうかここどこだよ。」

光牙は辺りを見渡した。

光牙「コクピットっぱいな。でも一体なんの。あつモニターが付いた。」

モニターに出された映像を見て理解した。

光牙「ここって体育館じゃないか！っていうことは俺、あの機体のコクピットにいるってことかぁー！」

???「その通りダ。」

光牙「おうわぁ！びっくりしたぁ。って何が喋ったんだ今の？」

光牙はまたコクピットを見渡した。

???「ここダ。ここ。」

光牙「えつ、俺は今メインコンピュータが喋ったような。いや、まさかそんな超先端技術でなおかつ自律思考回路で学習型のコンピュータみたいなものが積まれてるはずが。」

???「ほう、よくそこまで分かったナ。」

光牙「喋った！そんなバナナ！」

???「君は、外見は中々普通の子供だナ。」

光牙「IKEMENじゃなくて悪かったな。」

光牙は若干を頬を膨らました。

???「ああ、悪いネ。」

光牙「まさかのケンカ腰！」

???「まあ、冗談ダ、よく言うだろう。アメリカンジョークと。」

光牙「微塵もアメリカンじゃねえ！」

光牙はとりあえずこんなことしてる場合ではないのでコンピュータに質問してみた。

光牙「そんで、何で俺は体育館に落ちてきた機体のコクピットにいるんだ？」

???「・・・それは、」

光牙「それは？」

俺はゴクリと息を飲んだ。

???「なぜだろうナ。」

光牙「そうか。・・・って、ちゃんと答えろよ！」

???「いや、私はなぜか君を助けたいと思ったのだ。よく分からないがナ。」

光牙「そうなんだ。まあ、いまさらだけど、ありがとう。」

???「なんだろうナ。その一言を聴くだけで思考回路が熱くなるヨ。」

光牙（このコンピュータ、学習型らしいけど、これじゃあまるで機械じゃなくて人間みたいだ。いかに学習型と言えどここまで起伏のある話し方する機械なんて見たことないぞ。）

???「そういえば、名前を聞いてなかったナ。」

光牙「ああ、そうか。俺の名前は灯闇光牙。」

???「私はこのブライトライズのメインコンピュータ『AC^スE』^ダ。よろしく。」

光牙「へーえ、コンピュータに名前があるんだ。ますます、人間っぽいな。」

エース「君は私を人と呼ぶの力。実は、面白い人間だナ。」

光牙「そら、どうも。」

話していたときにある声が聞こえた。

???1「おい、そのロボット、声が聞こえるなら返事してみやがれ！」

???2「・・・」

光牙「どうする、返事しとく？」

エース「どっちガ？」

光牙「そりゃ、エースが。」

エース「だが、断る。」

光牙「まさかの2ch用語かよ！どんなコンピュータだ。」

エース「まあ、とりあえず返事をしてても良いが何てすれば良いんだ？」

???1「ちつ、アイカメラが光ったからパイロットが乗ってたのかと思ってたのによお。なんだ、なんだ、ただの故障か？」

「???2」・・・油断するな、なんとなく嫌な予感がする。」
「???1」んじゃ、ここはイスパに任せてとりあえず撤退しよ
うぜ。」

「???2」それでもいいけどな。なんか心許ないんだ。」
「???1」それじゃあ、あの変態博士の作った最新型の無人^{むじんひと}人
型^{がた}ロボットを使うつてのはどうだ？実戦テストつてことで。」

「???2」どんな兵器なんだ、それ？」

「???1」なんか、基地強襲型のロボットなんだと、そこら辺
の街が無くなるぐらいまで破壊を続けるんだと。」

「???2」なら、ソレに任せて撤退しよう。」

「???1」よし、「シャドウブレイク」射出！」

二足歩行メカの手の中から謎のカプセルが出てきた。そしてそれ
を前に置いた。

パーン！ 何かが破裂したような音

そして謎のロボットが顕現された。あれこそが奴らの言っている
シャドウブレイクである。

光牙「！」

学校にいる人間「……………」

光牙・影次・命・マナブ先生（あれじゃあカプセル怪獣ならぬ、
カプセルロボットだ。）

もはや、現実とは言い難い光景だった。

「???1」プログラム設定・・・面倒臭いな。いいや周囲20
0kmを粉微塵にするぐらいまで暴れるつと。」

「???2」では、帰還するか。」

バシユ ブーストジャンプした音

光牙「……………エース」

エース「なんだ、光牙。」

光牙「今の話からして俺はもしかしてもしかなくても奴と戦
闘しないといけないのでは？」

エース「そうなるナ。」

光牙「なんだそりゃあ！あんなに倒せる訳ないだろう！まず強そうだよ敵さん！」

エース「落ち着ケ。操作方法は教えるかう。」

光牙「今か！今からなんだな！」

そして俺は今、目の前で起こったことに驚きを隠せなかった。

シャドウブレイク「！！！！！！！」

シャドウブレイクの声にならない咆吼が空間を支配した。

光牙「！な、なんだ？」

バキ ガコン 武器を出し、展開した音。

光牙「何、あのものごつい武器。」

それはどう見てもレールガンの1種だった。

光牙「あ、あの、エースさん。」

エース「なんだ」

光牙「あれって、ひょっとして無反動砲で有名なレールガンじゃないかもしれませんこと。」

エース「なぜそう思う。」

光牙「見た目が。」

エース「WDFのデータ閲覧、検索、ネガティブ、機体、兵器、検索開始、・・・終了、ご名答、光牙あれはレールガンだ。」

光牙「嬉しくねえ！」

シャドウブレイク「！！！！！！！」

ん？もしかしてもしかしなくても

光牙「俺たちを狙ってない？あれ。」

エース「そうだな。」

光牙「・・・・・・。」

エース「・・・・・・。」

お、終わったくせえ。

光牙「んで、操作説明っておま。」

ああ、シャドウさんがレールガンをチャージしていらっしやる。

エース「とりあえず、この機体はパイロットの気持ちで変化する。」

る。」

光牙「アバウトだな、気持ちって。」

エース「仕方ない。プログラムにはそう打ち込まれてイル。」

光牙「『気持ち』ねえ、ラムダ・ライバかよ。」

バシユツ

シャドウが撃った。例のレールガンを。

光牙「アツ、ちよつ、まつ。」

チュドーン

直撃した。

「3 - A」

樹「ああ、あのロボット、やられちゃったよ！」

命「でも、煙で見えないからまだなんとも言えないよ。」

影次「・・・・・・。」

リープ「？影次さん、どうしたんですの？」

影次「ああ、いや、あの撃たれた機体。動きが無いにしても、

パイロットがいるはずなのに、なんで動かないのかなあつと。」

ドール「そういえば、落ちてきた割には動きがないねえ。」

影次「にしても、光牙の奴。大丈夫なのかな。」

マナブ先生「大丈夫だろう、きつと。」

マナブ先生は落ち着きを取り戻していた。というより、どうしようもない状況なので冷静にならざる得なかった。

「戦場」

ブライトライズはレールガンを喰らった。落ちてきた体勢が災いしたか機体が吹っ飛ばされていないのでコクピット内では激しいGが来た。

光牙「あつたつたつた。あーいてえ。頭打った。」

「
Eース「煙で相手が私たちを確認できていないうちに説明すル。」

光牙「そんな短時間でどうやって。」

Eース「とりあえず、パイロット登録すル。何か話セ。」

光牙「へっ、何て？」

女性ナビゲーション「声紋確認、パイロット登録・・・完了。

現パイロット登録しました。」

光牙「おーっとお、登録されちゃったよ。」

Eース「良し。」

光牙「んで、どうやって説明するつもりだ？」

Eース「こうするのサ。」

光牙「えっ、」

そういうと、Eースは機体のプログラムを操る。そうして何かが俺の頭の上に出てきた。

光牙「なんすか、これ。」

Eース「マニユアライザーだ。それを被レ。」

光牙「このどうみてもH M V見たいものを被るのか。」

そうして被る前に躊躇した。

Eース「どうしタ、速くしろ。」

光牙「あのさあ、これ洗脳プログラムとか入ってないよね。」

だって、こういうのに限ってマインドコントロールする機械だったりするんだぜ。怖いよ実際。Eース「・・・・。四の五の

言わずに被レ！」

そうしてEースは機械を操り、強引にそのマニユアライザーを俺に被せた。

光牙「おうわ！」

俺の意識はどこかに飛んでいった。

「仮想空間 マニユアライザー内」

ネットの世界。人には数字の羅列でしかないプログラムの世界。人の命令に従事することを使命として生きているプログラムの世界。ここは現実とあまり変わらない。というのはここは現実世界の建物がある場合はネットではそのままの状態で見えている。要するに座標が絡み合っているのだ。例えば、現実世界の自宅の座標にはネット内にも自宅が同じ座標にある。現実世界に東京タワーがあったらネット内にも東京タワーが、そう、まさに現実の仮想空間なのである。一見同じ世界なのだが違う部分はこの世界は法則（原則）があり、同じ見た目でも作られている物質は電波なのだ。だから建物によっては電波自体を少し改造してよく分らない見た目に変えることができる。例えば、東京タワー内にあるプログラムの奥深い部分に電波の魂とも言える部分がある、そこを少しいじれば仮想空間内での東京タワーの見た目・内部・仕掛けetc・・・を変更することが可能なのだ。だから結構ハチャメチャな見てくれの建造物が多い。

現世ではあるツールを使えば人はこの世界を精神体（人間）又は電波体（CPU）としてネット内に顕現することができる。簡単にいうとオンラインゲームのAvatar（自分の分身という設定のキャラクター）みたいな者になり、この世界にアクセスできる。今の世の中ではあまり普及されていないが、PC関連に強い人間なら誰でも持っている。最近のハッカーなら持っていないければ無理な世界だ。ちなみに顕現される精神体は自分の姿だがハッカーの大企業をハックできるクラスなら電波をいじり自分の姿形を自由自在に変えられる。そしてハックする場合はハックしたい電波と同調し、プログラム内部に侵入し、いじりたい部分を数字に置き換えプログラム自体を閲覧・変更・削除などを可能とする。最後に人間の精神体で入るので感覚神経は反映される。すなわち、ネット内で殺されれば痛みで現実の体がショック死する可能性がある。

光牙「えっ、ここはどこ。私は光牙。そりゃそうか。」

実際、どこだよここ。どうみても現実世界じゃないんだが。だっ

てここ辺りが緑色の形容しがたいフィールドなんだが。

???「来ましたね。」

光牙「来ましたよ。って誰だ？」

後ろから声がしたので振り向いてみたら、ポニーテールで緑の髪、目の色も緑、胸は中途半端、他はキュツ、ボンな、中々タイプのオニヤノコが立っていた。

光牙「もしかしてどっかのボーカロイドさんでいらっしやいますか？」

???「違います。私は、戦艦ハーデストピースのメインコンピュータの『RUN^{ルン}』です。どうかルンルンか、ルンちゃんって呼んで下さい。あつ、ルンルンちゃんでも良いですよ。」

光牙「あの。」

???「はい、なんででしょう。ご主人様。」

光牙「ごっこ、ご主人様とな！」

そう言ったらルンという子は横に顔を傾け『?』という顔をした。どうしよう、萌えるんですけど。

ルン「はい、今はメイドモード起動中ですから。」

光牙「ほ、他には何モードがあるの。」

ルン「えーっと、ツンデレにヤンデレ、クーデレ、幼なじみ、

SM少女、少年、お姉さん、妹、ロボッ娘などです。」

光牙「ロボなのにロボッ娘とはこれいかに。」

ルン「あつ、それもそうですね。えへへ。」

笑いながら『えへへ』つたと。くう、さすがコンピュータ（コンピユータのこと）だなんでもアリで萌えるぜ。

ルン「じゃあ、光牙さんは何モードがよろしいですか。」

光牙「なんで、俺の名前を？」

ルン「ブライトライズのパイロットの情報をWDFは早急に調べてありますから。そしてエースちゃんとはお友達ですから。」

光牙「あつ、そうなんだ。いや、お耳が速いこと。」

恐るべしオーデインの情報網。突っ込まなかったけど、エースが

ちゃん付けとか違和感バリバリすぎるだろう、あれがちゃんって性格だよ。

ルン「それで、何モードですか。」

光牙「ええっと。」

モードっていつでもなあ、やっぱりこの子の自然体がお互い一番良いと思うし。

光牙「君って自我は、あるの。」

ルン「名前かあだ名で呼んで下さい！もう。」

光牙「へっ、ああ、分かった。えーっと、ルン。」

ルン「えへへ。」

嬉しがっていた。・・・うん、良い。

光牙「んで、どうなの。」

ルン「ああ、私にもちゃんとACE^{エース}と同じで自我がありますよ。」

っということはやっぱり素があるってことが。

光牙「じゃあ、モード関係なく、素のルンがいいな。」

俺がそう言うといきなりルンは頬を赤く染めた。

ルン「えっ、・・・は、はい分かりました！！す、っす、素でいきたいと思いますにゃん！」

ルンはますます顔を赤く染めた。

光牙「にゃ、ニヤン？」

たまらず突っ込んでしまった。

ルン「ああ！なんでもないです！」

凄く慌てているなあ。・・・かわいいから困る。でもなんで慌てているんだ？

光牙「でだ。」

ルン「えっ、は、はいなんでしょう！！」

光牙「まず、落ち着こう。なっ。」

ルン「はい。」

光牙「はい、深呼吸！」

ルン「スーツ、ハーツ。」

光牙「落ち着いた？」

ルン「はい、どうにか。それでなんでしょうか。光牙さん。」

光牙「（さん付けか、まあ最初はこんなかな。）えーっと、ここは一体どこなのかな。」

ルン「はい、ここは一種の仮想空間です。」

光牙「仮想空間？いわゆるバーチャルスペースって奴？話には聞いてたけどこんな所なのか。」

仮想空間。そう、現実の空間ではない空間だ。身近なものならネットの構造体だ。ネットの世界を構築している様々な構造体を総称して仮想空間という説明で多分OKだろう。

ルン「この空間はエースのマニユアライザーの中です。ここではエースの操作説明が行えますよ。」

光牙「なるへそ。でも、この説明してる間にエースとブライトライズがやられない？」

ルン「大丈夫です。今は光牙さんの意識体がこの空間にいて、体感時間が相当差があります。」

光牙「なるほど。じゃあ、あっちの1秒はこっちの何秒なの。」
ルン「1日ぐらい違います。」

精神と時の。屋かよ。まあ、あれの場合は1日が1年だけどさ。

ルン「だから、心配はありません。じゃあ、どんどん、行ってみましょう！」

光牙「ああごめん、質問。」

ルン「何ですか？」

光牙「仮想空間ってここ以外の場所でも同じぐらいの体感時間なの？」

ルン「はい。そうですよ。ネット内の原則としては1日1秒です。」

光牙「・・・、じゃあルンやエースって結構寂しかったりするのかな。」

俺はそう思った。彼らのようなCPU的な存在は現実世界の1日は大部分ここにいるとインターネット上でそんな話を聞いたことがあったからだ。

ルン「え！・・・なぜそう思うのですか？」

光牙「いや、こういう客人がいればいいけど、なんかこう、寂しくないのかなあって思っちゃってさ。」

ルン「そう思ってくれて嬉しいです。まあ、確かに寂しいですけど仕方ないんですよ。」

仕方がない。その言葉は光牙に深く刻まれた。仕方がない。これが人に作られたCPUの宿命なのだろうか。それとも使命を全うするための犠牲なのか。それは本当の人間である光牙には分からなかった。

光牙「ご、ごめん、何か立ち入ったこと聴いちゃって。」

ルン「いえ、いいんです。優しいんですね。光牙さんって。」

光牙「光牙でいいよ。」

ルン「はい、光牙さん」

光牙「ああ、さん付けが癖なのね。ルンは。」

ルン「す、すいませえ〜ん。」

光牙「も一つ質問。」

ルン「はい。」

光牙「このブライトライズは輸送機の中にあってその輸送機から出てきたの？」

ルン「ああ、違いますよ。あの情報はガセネタです。」

光牙「ああ、カモフラージュとして輸送機の情報をもとに発信した分けね。」

ルン「他に質問はありませんか？」

光牙「大丈夫。」

ルン「じゃあ、始めましょう。」

「仮想空間 コクピット」

ルン「じゃあ、まず基本説明から。ってあれ？」

光牙「どうしたの？」

その時、俺の視野がグニヤリと歪曲した。

光牙「へっ？」

ルン「精神体強制離脱！？どうして。」

光牙「な、何事だよ、ル」

俺がルンに問いかけようとした瞬間、俺の視野がブラックアウトした。

O O T 　　く 起 動 く 　　E N D

第1話「B

第1話「BOOT 〽起動〽」(後書き)

結局、説明を受けられなかった光牙、彼はここからどうするのか！？

次回、光天成ブライトライズ第2話「ウホッ、男だらけの教室」にライズアープ！！

(次回予告は毎回嘘ですw)

第2話「START THE WAR 〜開戦〜」(前書き)

突如、体育館に落ちてきたスーパーロボット「ブライトライズ」に転送されてしまった光牙、成り行きで戦うことになり操作説明を受けようと時の進みが遅い仮想空間に送り込まれたがなんらかの現象でいきなり現実世界に戻ってしまった!!

どうする光牙!?!?どうする作者!?!?

第2話「START THE WAR ～開戦～」

眩しい。

これが太陽の光なのだろうか。

眩しい、けど暖かく穏やかになれる感覚。

その光を受けながら。

俺の意識は覚醒していった。

ART THE WAR ～開戦～」

第2話「ST

「戦場」

光牙「ハッ!？」

俺の意識が目覚めた。

エース「どうだった。訓練は？」

光牙「ああ、エース、実はな精神体強制離脱とか言ってログアウトされた。」

エース「何!？じゃあ、訓練ハ。」

俺は首を左右に振った。にしても強制離脱したせいか頭というか脳が痛い感覚があるな。

エース「何という事態ダ。よし光牙良く聴ケ。」

光牙「なんだよ。」

俺は頭痛を耐えながら聴くことにした。それに痛みもだんだん無くなってきたしな。

エース「操作説明は今すル。」

光牙「はあ!？マジで言ってるのかそれ!？」

この時に操作説明とか自殺行為だ。

エース「大丈夫だ。奴は生憎、人工智能だ。奴にハッキングを

仕掛けル。恐らく一時的に敵のコントロールは麻痺するだろう。その麻痺している時に説明すル。」

光牙「ハッキング出来るとか。なんという演算能力。」

俺は素直に感心した。いやあ、やっぱ独立したCPUは違うは、やることなすことが。」

エース「でハ、仕掛けてくる。・・・仮想空間にリンク、ダイブ。」

そしてエースは敵のプログラムのある仮想空間にアクセスした。

「仮想空間 シアドウブレイク人工知能内部」

エース「ここ力。」

私は辺りを見渡した。

エース「肝心の命令系統のプログラムはどこにあるんだ。」

今エースはシアドウブレイクの人工知能（CPU）と電波と同調しシアドウブレイクのプログラム内を動き回っているところだ。

エース「にしても、私のこの電波体は慣れんナ。」

そう、私は元がCPUなので見た目というものが無いので仮想空間に入る時は自分で作った人間型の電波体に顕現している。

エース「うん？あれ力？」

気になる見た目の機械があったので少し歩いてみる。

エース「これハ。」

そこには大きい機械があった。そしてその機械のディスプレイには『これは命令系統のプログラムだから関係者以外触っちゃダメですよ。byネガチブ』

エース「・・・ネガチブって、ネガティブのことだろうガ。人間のすることはイマイチ良く分らないナ。わざわざ、プログラムの内容を表示しているとハ。というよりこれはハッカー達に対する挑戦状だナ。」

エースは手を前に出し手の平を広げるとそこからハッキングツ―

ルが召喚された。どう見てもノートパソコンだ。

ピピ

エース「かなり畏な気がしたが・・・モノホンか・・・ファ
イアーウォール侵入・・・解錠。プログラム侵入。数字に置き換
え・・・・・・・・」

エースはさっきのパイロット達の言葉を元に命令のプログラムを
探した。

エース「これカ。音声再生。」

???1『プログラム設定・・・面倒臭いな。いいや周囲20
0kmを粉微塵にするぐらいまで暴れるっと。』

エース「やはりこれカ。プログラム変更。『待機』。よし、
これで奴は止まるはずダ。さて、戻るとしよウ。」

そう言うときエースの体は緑色の数字となって仮想空間から離脱し
た。

「戦場」

エース「・・・・・・・・OKダ。」

光牙「随分速いな。まだ1秒も経ってないぞ。」

エース「仮想空間は1日1秒となっていル。」

俺はルンの言葉を思い出した。

光牙「そういえば、ルンがそんなこと言ってたな。」

その時、爆煙が晴れて敵が見えるようになった。

光牙「なあ、エース。」

エース「うん。なんだ。」

光牙「敵はずっとこっちを見ているのだが。本当に成功したの
か？」

そう、シャドウブレイクはずっとこっちを凝視しているのである。
エース「動かれて周囲に被害がでて困るからな、棒立ちする
よう偽の命令を出して置いタ。」

光牙「へー、命令系統を仕掛けたのかとてもニュービーズ（初心者）には出来ない芸当なこと。」

エース「だからといって、これでホットドガー（凄腕）と呼ばれるのも困るがナ。」

光牙「バ。ドネタが分かるCPUにある意味絶望した！！」

エース「まあ、いい。始めるぞ。」

光牙「ああ。分かった。」

俺がそう返事をする、エースは説明を始めた。

エース「まず、光牙。コクピットを見渡してみ口。そして、とりあえず私の言葉の発生源である、目の前にあるデバイスをいじってみ口。」

光牙「？ああ。」

俺はコクピットを見渡した。とりあえずこの機体は360°全視界モニター。操作系統は俺の座っている周辺以外はなさそうだ。

光牙「えーっと。」

俺は真正面にあるデバイスをいじり始めた。

光牙「起動は、しているよな。立ち上げ、もOK。タッチパネル式か。エース、音声認証ってある？」

エース「どういった意味でだ？」

光牙「例えば、〇〇を検索って言ったら検索されたり、表示されるかって意味で。」

エース「ああ、されル。というより、私がそれを補助すル。」

光牙「OK。エース、操作説明のテキストを検索・表示してくれ。」

エース「ラーサ。」

光牙「まさかの宇宙の騎士だな。返事が。」

エース「日本の文化を知るため色々調べているからナ。」

光牙「ふーん。まあ、とりあえず置いといて。」

俺はテキストを読み始めた。

光牙「まず、操作方法は2つ。1.自分で動くトレース操作。

2・コクピット操作。か。とりあえず今はトレース操作かな。いや、でも運動神経鈍いしやめとこ。」

エース「いや、その点は大丈夫ダ。」

光牙「えっ？」

エース「光牙。君が灯闇の血を引いているならこのアーマーを装着できるはずダ。受け取れ。」

エースがそう言った瞬間に謎の丸い光が目の前に現れた。

エース「君が灯闇の血を引いているなら光は君の中に入る。」

エースがそう言うのと光は輝きを増し、光牙の中に入っていった。

光牙「え、あ。」

エース「入ったか。今の光が入った場合、君が变身したいと思う時にシャウト（叫ぶ）するか念じれば、君は『ブライアーマー』を装着できる。それと、常に私と通信できるようにナル。」

光牙「え、ええー！ー！ー！ー！ま、待て待て。じゃあ、俺、成り行きヒーロー確定なのかよ！」

エース「まあ、そうだな。」

光牙「まあ、今はそんなこと言ってる場合じゃないか。んで、变身した場合に悲劇のヒーロー展開で『变身するたびに、細胞が死滅していつて寿命が減る』とか『必殺技を出すたびに、記憶を失う』とか『变身時間3分、越えたと死亡』とか『ヒーロー条約により事情の知らない人間にバレたら死亡またはヒーローの権利剥奪』とかそういう害は無いだろうな！」

エース「無イ。」

光牙「まじか。良かった。いやあ、ある意味この展開、設定、状況、……良い意味でファンタジーだ。」

エース「まあ、ようするに变身すると感覚神経発達、身体能力向上、感覚神経操作、専用武器使用可だ。そんな訳でトレース操作の方がオススメだ。」

光牙「へっ？感覚神経を発達させるってことは全ての感覚能力を上げられるってことか？」

エース「ああ。視力などが3倍以上上げられる。」

光牙「上がりすぎて困ったときのための感覚神経操作で痛覚や嗅覚を0などにする訳か。」

エース「痛覚を0にすると気付かずに出血死する可能性があるかな。」

光牙「身体能力向上つてまさか。」

エース「そうだ。自分のD。Z的に戦闘力がスーパース。ヤ人と同じく10倍ぐらいは向上する。まあ、スーパースは大げさだから界。拳あたりだな。戦闘力はまあ、グレートサ。ヤマンあたりかな。」

光牙「これはひどいネタ。」

エース「専用武器は後で聴いてくれ。今はブライトライズだ。」

光牙「分かった。じゃあ、とりあえずトレース操作に切り替えしてくれ。」

エース「ラージャ。」

エースは了解と返事をする謎の機械ボイスが鳴った。

女性ナビゲーション「警告、コクピットに座っているためトレース操作に変更できません。トレース操作へと変更したい場合はパイロットは起立した状態になって下さい。繰り返します。」

光牙「おおと。そうなのか。じゃあ、起立するか。」

ピピ 変更が可能な時の合図。

女性ナビゲーション「承認しました。トレース操作への変更を行います。」

光牙「うん？うお！」

俺はびっくりした。コクピット内の機器がやたら変形しているのに。パイロットの座る椅子？は機体の下へと消えてしまい、エースの声の発生源のデバイスのディスプレイは上にいったのだがディスプレイは近未来っぽく空中に浮いていた。

光牙「おお。」

そしてブライトライズ自体は俺が立っていたためブライトライズ

も立った。

光牙「もしかしてもしかなくても、空中のディスプレイはタッチパネル式ですよね？」

エース「ああ。」

光牙「熱いな。でもトレース操作だからいじってる時は機体もいじってる動きをするのか、怪しいな。あ、トレース操作の時は音声認証があるんだから声でいじればいいのか。」

「3 - A」

影次「立った・・・。」

みんな戸惑いながら、その立ったブライトライズを黙って見つめていた。

「戦場」

光牙「おお。立った、立った。」

エース「よし、とりあえずこれで操縦系はOKだ。」

光牙「そういえばエース、語尾のニュアンスがおかしかったのに随分良くなったなあ。」

エース「なんたって、学習型だからな。話していれば慣れる。」

そういやあ、こいつ俺の予感通り自律思考回路で学習型のコンピュータだったな。にしてもエースの場合、何か人の心みたいなのを感じるなあ。

光牙「そうだ。ブーストで飛ぶ時はトレース操作の時はどうするんだ。」

エース「君の思念だ。」

光牙「なるほど。じゃあ、武器を出したりする時は。」

エース「シャウト。」

やっぱりか。そんなんじゃないかと思ったよ。

光牙「はあ、エース、とりあえずマウントしてある武器を検索・表示。」

エース「ヤー。」

ディスプレイに表示されたのは

ERROR の音と文字だった。

光牙「あの、エースさん、」

エース「・・・なんだ。」

俺はあり得なくはないがあつて欲しくない問いかけをした。

光牙「何事？」

エース「武器の説明＋使用不可だ。」

(。D。)

光牙「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!」

エース「なぜ、だろうな？」

エースは至つて冷静な風に喋っているがきつと焦ってる。少し声が上がっているからだ。

光牙「知るかなもん！お前がこの機体の頭脳だろうが！お前が説明しろ！」

エース「実はな、なんかデータバンクはロールバック(原因不明でデータが消えること。)してだな。そして私は、目覚めたばかりなので分かん。」

光牙「わ、分からない。こ、コンピュータの言う言葉とはとても思えない。」

俺は呆れながら毒づいた。

エース「まあ、学習型自律思考回路だからな。分からなかったり、間違えることは少しはある。そこら辺はスルーしてくれ。」

光牙「この状況でスルーするとか、マジキチ。」

俺は恐る恐る、シャドウブレイクを見た。

光牙「(。D。)・・・、え、エースさん。」

エース「何だ。」

光牙「あ、あれが動いてる。」

エース「え？・・・、ああ、ハックが解けたな。」

光牙「軽々しく言うなあーーーーー！」

シャドウブレイクはレールガンを担いでさっきはやらなかったが、チャージし始めた。

光牙「・・・し、死んだくせえ。」

エース「光牙、叫べ！ライズアップと！」

光牙「ええ、唐突過ぎだろ常考！」

その時、レールガンが放たれた。

エース「さつさと、叫べ！」

光牙「ああ、もう言えば良いんだろ言えば！ライズ・アー
ーーーーッブ！！！」

その時、レールガンが直撃した刹那、その弾は反射し青く美しい空へと姿を消した。

シャドウブレイク「！？」

光牙「あ、あれ、い、今攻撃当たったんじゃあ・・・って
なんじゃこりあーーーーー！？」

エース「説明しよう。灯闇の血を引く光牙はライズアップと叫ぶとともに変身し、ブライズスーツを装着することが可能となるのだ！そして弾を弾き返したのは変身した瞬間、ブライトライズは覚醒し、一瞬、己を守るバリアを形成し、その身を守ったのだ！」

光牙「熱い説明ありがとう。」

エース「何、気にするな。」

俺は自分の体を見た。

光牙「なんつか、ロ。アーマーと獣神ラ。ガーそしてどつかのバウンティーハンターのパワードスーツを足して3で割った感じのデザインだなあ。・・・格好いい。」

エース「さあ、奴を倒すぞ。」

光牙「それはぜひそうしたいけど、武器もロクに使えないのに
どうやって。」

エース「・・・。」

エースはお手上げ状態になっていた。そして俺はある覚悟を決めた。

光牙「エース、機体の概要を検索・表示」

エース「分かった。」

表示されたディスプレイを見て、俺は決心した。

光牙「この機体にはオーバーブーストが積まれているのか。・・・よし、いけそうだな。後は踏み込む勇氣だけか。」

エース「光牙、何をするつもりだ。」

俺は握り拳と掌をパチンと合わせ、言った。この時、ブライトライズも俺と同じ格好をしている。行こうか、ブライトライズ。

光牙「もちろん、格闘だ。」

エース「・・・・・。」

エースは呆れたのか黙ってしまった。そして口を開けた。

エース「馬鹿げていると言いたいが、・・・面白いな。やれるのか光牙？」

光牙「合点!!」

エース「よし、じゃあ頼むぞ。」

光牙「応!!」

そして俺はいつでも踏み込めるようにシャドウブレイクと間合いを取り地力をつけた。そして昔やっていた空手の型とトレース操作をしていたメカアニメを思い出し、見よう見まねで動きやすい型を取った。

「3・A」

樹「おい、あのロボット。とうとう勝負するみたいだぜ。」

ドール「そうみたいだね。今までは訳が分らないくらい変な行動していたのに。」

影次「にしても、あのロボットの雰囲気。なんか不思議なくらい見ていて気持ちが悪くなる、こんな状況なのにな。」

命「そうだね。なんか心が暖まるといっか安心感といっか、本当に不思議な気持ち。」

リープ「勝てますよね。あのロボット。」

影次「ああ、きつと。」

「戦場」

普段の空気が痛いくらい震えている気がする。そんな考えがよぎる程、俺は緊張していた。

光牙「エース、周囲に生体反応はあるか？」

エース「君の行っている高校以外にはいない。というより、避難場所は学校みたいだしな。」

光牙「よし、学校にさえ攻撃が行かなければOKか。あれ？でも警察やオーデインは？」

エース「警察は一応、学校周辺にパトカーのバリケードを張っている。WDFは他の国に出たネガティブの方に力を入れている。」

光牙「まじか。応援無しは確実か。」

俺の頭の中にはさつき見た機体の概要を思い出しながら集中を続ける。

シャドウブレイク「!!!!??」

シャドウブレイクの声にならない咆吼が耳をつんざく。まるで戦いの開始の合図であるかのように。

シャドウブレイク「!？」

ヒュオン 風を切る音

動いた。影が離れそうになるくらい速く。実際はそんなにスピードは出てないがそう思えた。

光牙「くっ！」

左にすれすれで避けられた。俺が避けた？避けられたんだ。これがスーツの力か。見えるし動ける。確かに運動神経が大幅に向上してる。体が軽い。

光牙「こなくそ！」

次は反撃、避けられて振り向き途中のシャドウブレイクに向かって右の正拳突きを繰り出した。

シュピツ 鋭いパンチを繰り出す音

シャドウブレイク「!？」

バキヤ HIT

シャドウブレイクの頭？らしき部分をえぐった。思ったより威力があつたみたいだ。

光牙「いよっしゃ。」

エース「光牙、気をつける。」

光牙「ああ、分かつてる。」

追撃、だがやる前にシャドウの奴に吹き飛ばされた。

光牙「な、なんだ！」

見たら、シャドウブレイクの顔から謎の斥力場が発生し吹き飛ばされたらしい。だが俺は足をすぐに地面に付け耐えた。民家を踏みそうになったがまだ学校の広すぎる校庭内だ。そしてシャドウブレイクの方を見てみると壊したはずの頭がまた出てきた。

光牙「おいおい、ナノマシン（増え続け、整備無しで自動回復する細胞のようなもの）にしては妙に速くないかあの再生。」

俺のゲームの知識では再生する装甲はナノマシン以外だと魔法としかいいようがない。

エース「ネガティブは科学で魔法を再現するんだ。その研究結果がああ装甲、そうだなナノマシンと魔法チックな装甲を足してるから。」

光牙「よし、これからは『ナ魔チック合金』と名付けよう。」

エース「はあ。そんなこと言ってる暇は無いと思うが。」

光牙「だって、再生してるのを待つしかないじゃん。変なバリア張ってるし。」

エース「あれも魔法チックな奴の一種だ。」

光牙「なんでもかんでもプラズマじゃなくて？」

エース「ああ。」

光牙「再生するのを待っている今だから聴くが、奴らの魔法チツクな物ってなんだ。」

エース「簡単に言つと、ゲームに出てくるような結界や念動力、超能力、要するにネガティブはその超常現象を科学で起こしているのだ」

光牙「超常現象を科学で起こす？そんなことが可能なのか？」

エース「らしい。まあ、その証拠が目の前にあるだろう。」

俺は再生中のシャドウブレイクを見た。

光牙「そうだな。でもどうするんだよ。俺はどつかの探偵みたいにミスカトニク大学の陰秘学科を出てるわけじゃないし。魔導書もない。かといって俺には超常的な力を所持していない。八方塞がりじゃないか。」

エース「いや一つだけある。」

光牙「え？あるの。」

俺はもはやファンタジー過ぎて逆に驚きが無くなってきた。

エース「光牙のような温いメカオタの概念をくつがえすやり方だ。」

光牙「どういう意味だ。」

どつちの意味でも。

エース「大火力をぶち込む。」

光牙「はい？」

エース「または弱点にピンポイントに攻撃を当てる。」

光牙「ええ！？」

エース「超常的な力はいらない。あっちが超人？ならこっちはゴリ押しだ。」

光牙「なんという無茶苦茶。っていうかこの機体自体、動力源が超常じゃねえか？」

エース「そう言われればそうだな。普通の機体は人の闘志に反応して能力UPしないものな。」

光牙「つーことは、ネガティブに対抗できるのは今のところこの機体だけ？」

エース「恐らくな。まあ、じゃなきゃ狙われないだろう。」

光牙「そらそうだ。」

エース「ああ、でも安心しろ。超常系は変な新型が幹部クラスの機体だけって噂だ。」

光牙「気休めorz」

シャドウブレイク「!？」

シャドウブレイクは活動を再開した。

光牙「どうしよう。」

バキョ ミサイルを展開する時の音

シャドウブレイクは次はミサイルを構えた。

光牙「ざけんな!!ここは街中だぞ!!」

学校に避難している人々「!？」

ここからでも聞こえる学校からの慟哭まるで死を目の前にしたみたいに。人間が発狂していた。

光牙「くそっ!!」

バシユ ブーストジャンプし地面を蹴り上げた音

バシユシユシユ ミサイル連射

俺はジャンプした。シャドウブレイクはその動きに合わせ空中にミサイルをばらまいた。

光牙「エース、アンチミサイルシステムは搭載してるか。」

俺はブーストで高度を上げつつ、ミサイルの接近を見ていた。

エース「積んでないらしい。」

光牙「くそ!どうする。」

ミサイルが迫ってくる。どうする。メインモニターには距離100mと表示されている。

光牙「そうだ!エース、ブライトライズの機体図面検索・表示!」

90m

ピピ データが届いた音

光牙「図面、頭部拡大。」

80 m

光牙「やっぱりあったぜ。」

70 m

光牙「落ちろ！ヴァールカン（バルカン）！！」

ブライトライズの頭部、額の脇の方からバルカンが発射された。

光牙「よし。やっぱりあった。いっけえーーーーー！」

60 m

パキキン バリアで塞がれた音

その時光牙はとんでもない物を目にした。

光牙「う、嘘だろう。ミサイル周辺にもバリアが展開されてやる。ふあ、ファンタジーだ。というより、発射物にまでバリアを張れるなんてどんな技術力だよ。まず積めないだろうバリア発生装置。ち、チートすぎる。」

もはや関心の域だった。

50 m

エース「光牙、そのミサイルはこけおどしだ。当たってもダメージはほぼ無い。」

光牙「なんでそんなことが分るんだよ。」

エース「おかしいと思って解析した。あのミサイルにはほとんど火薬が積まれていない。」

40 m

光牙「えっ？どういうことだ。」

エース「恐らくシャドウブレイク自体が試作品なんじゃないか？」

光牙「そういえばそんなことをあのネガティブのパイロットが言ってたな。」

30 m

ははーん、とりあえずミサイル周辺にもバリアが張れるかの実

験てことか。

光牙「よし、この攻撃を利用する。」

エース「だがどうやって？」

20 m

でも、どうする。俺？・・・高い所、敵は地面。下手に攻撃する

と学校みんなが影次、樹、命、ドール、リープ、明が危ない。・・・

・・・明？

光牙「そうだ！！」

10 m

光牙「オーバーブースト展開！！」

ガキヨ

9 m

光牙「敵補足！！」

ピピ

8 m

光牙「おいエース、スタビライザー（重心を傾けるためのアク
セサリみたいなもん）を傾けて、重心を右足に！！」

7 m

光牙「熱量設定変更、オーバーブースト点火時に全身にかかる
クーラーを右足以外に瞬間冷却。」

6 m

光牙「秒読み開始。3」

5 m

光牙「2」

4 m

光牙「1」

3 m

光牙「オーバー、ブーストーーーーー！！」

キュウン、チュドーン 溜めて爆発した音

この時のブライトライズは太陽の輝きを背にシャドウブレイクに

突っ込む。それはまるで太陽からの使者と思わせる程、神々しいかった。

チュドドドーン ミサイルの連鎖爆発

この爆発でさらに加速した。

光牙「うおおおおー！！！！！！！！！！」

光牙は跳び蹴りの体勢を取った。

シャドウブレイク「!?」

凄まじい速さで向かってくるブライトライズに反応しきれないシャドウブレイクであった。

光牙「喰らええー！！！！！！！！！！」

クーラーで右足以外に瞬間冷却し、全ての熱が右足に逃げ、右足が赤熱し始めた。そう、そのただの蹴りは宇宙^{そいう}を駆ける流星のようであった。

光牙「灯闇流朝寝坊叩き起こし術直伝！『ウェイク ノン・レーム』！！」

ガキヨン 当たった

ブライトライズの放った強力なただの跳び蹴りはシャドウブレイクを貫いた。

シャドウブレイク「……………」

チュドーン 爆発

光牙「光天成 ブライトライズ！！……………くー、一度言ってみたかったんだ。こうゆう感じの決め台詞。」

シャドウブレイクは撃破した。そう影は太陽を真上から受けると逃げられないのだ。

光牙「……………」

エース「どうした。光牙」

光牙「よ……………」

エース「よ？」

光牙「いよっしゃああああー！！！！！！！！！！」

俺は両手を握り拳にして両手を上げて叫んだ。確実に死んでいた

俺がまだ生きているからだ。

エース「？」

光牙「勝った！勝ったんだよ俺は！ハハハ、信じられねえ！生きてるんだ俺！」

エース「まあ、そうだな。」

光牙「良かったあゝ。だってこいつを倒さなきゃこの周囲200km、更地にされてたんだろ？いやあ、良かった良かった。手を降ろして落ち着いた。」

エース「よく頑張ったな。」

光牙「ああ、お前もなエース。」

「3-A」

そのころ学校内は良い意味での絶叫が続いていた。

樹「倒した！倒しちゃったぞあのロボット！」

命「やったんだね！」

影次「す、凄かった。」

リープ「私たち生きてますのね！」

マナブ先生「ああ、お前達が無事で良かった！」

ドール「ふう。良かった。」

影次「っていうか、あのロボットも両手を上げて喜んでるね。」

「1-A」

生徒1「やった！やったんだよね！？明ちゃん！」

明「うん！」

生徒2「よかったあー！」

1-A担任「生きてるって、最高！！」

「戦場跡地」

それから俺は落ち着きを取り戻し聴いた。

光牙「エース。」

エース「どうした。」

光牙「どうやってこの機体から降りて、どこで降りればいいのか、後、このスーツどうやって脱ぐの？」

そつ、そろそろ脱ぎたかったし降りたかった。さすがに疲れた。

エース「光牙一つ聴いてくれ。」

光牙「なんだ。エース。」

エース「まず、この機体にはワープ機能が搭載されているのが明かになった。」

光牙「わ、ワープ機能とな!？」

心底驚いた。だって、ワープ機能って、えっ、有り？

光牙「どうやってワープするんだそれ。俺のゲーム知識から結論すると、時空間跳躍か？それとも次元跳躍？まさか物体置換え？」

エース「次元跳躍の方だ。そして設備があれば物体置換えも可能らしい。」

光牙「何でもありだなあ。この機体。」

説明しよう。次元跳躍というのは、この今いる次元から違う次元に跳躍すること。要するに、この世界には見えないもう一つの次元があり、その次元に入り目的地のある次元に行くと通常かかる時間よりかなりの短時間で移動できる。

もう一つの物体置換えは、装置込みですることが可能なのだが、このワープ方法はその対象となる物体を今いる位置から目的地の座標の大气と置換えられる。ようするに、機体と大气を交換して一瞬で目的地に着くことが可能。

光牙「それで、それがどうかしたのか。」

エース「私達は通常飛行で目的地のWDF本部に行く。君はとりあえず学校に戻してくれとWDFから連絡があった。ということ。で今回は助かった。」

光牙「ああ、分かったよ。でも、本当に俺は行かなくて良いのか？」

エース「いずれ、連絡が行くと思う。まあ、私とは常に通信が出来るようになってるんだ。何かがあった時はすぐに通信してくれ。」

光牙「どうやって？そんなものないぞ。」

エース「さっき言っただろう。例の光が光牙の中に入ったとき。」

光牙「そーい、やあそうだったな、てっきりブライスーツ装着時のみかと思ってた。」

エース「常に通信状態だからな。」

光牙「えっ？」

俺は耳を疑った。

光牙「常時通信状態？」

エース「ああ。それがどうかしたか？」

光牙「うわぁぁぁ。俺にプライバシーが無くなってしまった瞬間。」

エース「私は覗かれ慣れているぞ。」

光牙「お前はCPUだろうが。覗かれて当然なんだよ。」

エース「お前には知られたくない情報があるというのか。」

光牙「そりゃあるよ。」

うん。知られたくないよな。特にエロゲーやってる時とかはガチで勘弁して欲しい。

光牙「受信拒否ってできるの？」

エース「ああ、できる。そういう知られたくないことをしてる時やうつとーしい時に頭の中で『受信拒否』と呟くと『拒否しますか』と問いかけが掛かる。その時に選択肢を選択してくれ。そして再度通信状態をONにしたい場合は『受信拒否解除』と呟いてくれ。ちなみに声に出して話しても聞えるからな。」

光牙「それをやったら独り言で痛い子になっちゃうだろう。」

エース「違うのか？」

光牙「違くないけど、痛いって言っても俺はモノを選んで痛いんだ。」

エース「まあ、とにかく詳しい話は後だ。それではな。」

光牙「待て待て。変身解除と、どうやって乗り降りするか言っ
てけ。」

エース「ああ、そうだったな。忘れてた。」

光牙「はあ。」

俺はため息をついた。

エース「変身解除の仕方は装着の時と同じだ。念じると同時に
シャウトか呟くかすると良い。それさえすればいつでもどこでも変
身可能だ。」

光牙「じゃあ、乗り降りはこのコクピット、開ける場所がな
さそうなんだけど？」

エース「いや、あるぞ。」

光牙「ええ！どこに！？」

エース「真後ろにある。そして開閉する場合はまた念じればい
い。そしてなにかしら喋る。」

光牙「へえー。でも今出ると正体がばれると思うんだが。正直
俺はアレにばれたくないぜ。」

エース「アレ？」

光牙「学校の周辺にいる記者だよ。あの記者達をカメラでズー
ムして音を拾ってみろよ。」

女性レポーター「ごらん下さい。突如高山高校の体育館に落ち
てきた謎の機体が後から来たネガティブの機体と交戦、警察は無力
で見ることしかできませんでしたが落ちてきた機体が勝利しました
！あの機体は一体どこの所属なのでしょうか。パイロットが降りて
くるのが待ち遠しいです！！」

エース「…………。なぜ正体をばらしたくないのだ。」

光牙「報道陣にばれると世界中に顔が知られるだろう。それは

あまり好ましくない。賛美されたりチャホヤされるのは良いが、悪人や、政府の高官だって見る機会がある訳だ。しかも変身の正体だつてばれてもみろよ。謎の集団に捕まって解体されて技術を盗もうとする輩が世の中にはいるって噂だぜ？危なくて正体をばらせないよ。」

エース「なるほど。君は最近の人間とは違い、メディアリテラシーはまだ持ち合わせている方のようだな。」

光牙「まあ、ネットの情報も交じってるからそれさえも嘘の可能性があるけどな。でも良い噂を聞くことがないテレビ局はそれだけ悪いことしてるって俺は考えてるんだ。本当に良い局や政治なら、もっと良い噂が流れてるはずだからな。」

エース「なるほどな。では、ばれない方法を教える。」

光牙「ああ、あるんだ。」

エース「これもワープ機能を使う。」

光牙「ええ！！乗り降りでも使えるの！？」

エース「簡単だ。座標を合わせてそこに飛ばすだけ。置換えだ。」

「

光牙「す、すげえ。」

エース「じゃあ、早速降りるか。」

光牙「よろしく頼むよ。」

エース「どこで降ろせばいい。」

光牙「人のいなそうな場所でも疑われない場所。そうだな。俺は体育館から逃げ遅れたし、体育館で救助を待ってたってことにしておこうか。」

エース「うむ、今なら体育館も人がいないし、倒壊の危険もさほど高くない。では、体育館に送るぞ。」

光牙「頼む。」

エース「またな、光牙。」

光牙「またな、エース。まあ、常時通信できるけどな。」

エース「雰囲気だ。」

俺が微笑むと同時に俺の周囲が光に包まれた。

エース「私はこれからオートパイロットに切り替える。では、また後でな。」

光牙「ああ。」

俺の体は転移した。

「WDF本部 司令室」

WDF、ハワイ諸島にそびえ立つ基地。ここに世界中の精鋭部隊の軍人が集まっている。

???1「灯闇の血の者がブライトライズを操っただと？」

今、驚いているのはこの基地の司令官「ライル＝トルマン」。知的な男性を思わせる見えてくれである。

???2「はい。現在ブライトライズはパイロットを降ろしここにオートパイロットで向かっているとのこと。」

この女性は秘書の「ポート＝サーニャ」やはり、司令官の秘書は美人と決まっていた。

ライル「灯闇があの場合に居たとはな。運命的なものを感じてしまふな。」

サーニャ「そうですね。」

ライル「……………」

サーニャ「司令？」

ライルは考え込むようにサーニャに伺った。

ライル「パイロットは子供なのか？」

サーニャ「はい。ルンからはそのように聞いておりますが。」

そう、ルンはWDFの超問題部隊『ニードハート』の戦艦『ハーデストピース』のメインコンピュータのCPUなのである。

ライル「歳は分かるか？」

サーニャ「はい。18歳、高校生のようです。」

ライルはそう聴くと悲しい表情をした。

ライル「子供を巻き込まないといけないとはな。心苦しいな。」
サーニヤ「はい。同感です。それで司令、どこの部隊に配置する予定で？」

ライル「ルンはなんか言っているか？」

サーニヤ「はい。『光牙君と一緒に良い！』だそうです。」

ライル「はあ。まあ、最初からそのつもりだけだな。」

サーニヤ「なぜです？ここは戦力的に精鋭部隊である『Shooting star』がよろしいかと。」

ライル「いや、普通の高校生なら多少問題のあるニードハートの方が馴染めると思つてね。」

サーニヤ「多少ですか。アレが。」

サーニヤは少し呆れていた。

ライル「まあ、なんにしろ、とうとうネガティブとの戦争が始まるかも知れないな。」

サーニヤ「ですが、戦争をすれば武器商人の思つつぶでは？」

ライル「そうだな。あいつらの存在理念からして我々にはもちろんネガティブにも武器の売買を持ちかけて来るだろうな。」

サーニヤ「どうするおつもりで？」

ライル「どうしようもないのが現状だな。」

サーニヤ「そうですか。」

「???? ネガティブの基地」

謎の場所に佇んでいるネガティブのとある基地。

????3「なんだと！？取り逃がした！？」

今、驚きながらバランスボールに乗っているのはネガティブの幹部「ハイルワッツァー」である。なぜかIKEMENなのである。

????1「す、すみません！？」

この必死に謝ってるのはさっきブライトライズを襲った一人で馬鹿そうだった方である。名前は「ジュンターン」。筋肉バカ。短

髪赤髪、背が高い。

「???2「博士の実験機もやられてしまいました。」

このブライトライズを襲ったもう一人の冷静な方は「カコイルクス」。モテる。銀髪ロングで細マッチョ。ジュンと同じ身長。

イルワ「それで、どうなったんだ。」

イルワはバランスボールからボディブレードを取り出し動き始めた。別に太っている訳ではないのに。

ルーク「ハッ、どうやらシャドウブレイクを撃墜しWDF本部に向かったそうです。」

イルワ「ふむ、面白くなってきたな。」

ルーク「はあ。」

イルワ「このアニメ。」

イルワはいつの間にかテレビの前に座り録画したアニメを見ていた。

ジュン「そっちなよ。」

「体育館」

光牙「ふゝむ。降りたのはいいけど、これからどうしよう。」

そう、俺はこの状況から怪しまれないようにしないといけない。

光牙「ロボットが落ちてきたから拾って戦いましたあ。なんて口が裂けても言えないしなあ。どうしよう。」

その時、入り口を塞いでいた落石から声がした。

マナブ先生「おゝい！光牙。生きてるかあ！」

影次「光牙あ！返事しろあ！」

命「光牙君！」

明「お兄ちゃん！居たら返事してえ！」

そうか、みんな心配掛けちゃったのか。俺は急いで走って落石のあった入り口に近づいた。

光牙「みんな!!！」

そうすると歓喜の声が聞えた。

樹「良かった！生きてる！」

リープ「良かった。光牙様。」

ドール「速く岩をどけよう！」

マナブ先生「よし、俺たち男性陣で手分けして岩をどかさう。」

影次・樹・ドール「応！！」

マナブ先生「女性陣はとりあえず水と救急箱、それと担架を持つてきてくれ。」

光牙「せんせー、俺、奇跡的にケガしてませーん。」

マナブ先生「それじゃあ、岩をどけるのを手伝ってくれ。」

命・明・リープ「はい！！」

光牙「あのー俺は？」

マナブ先生「お前は助けられるのを待ってる。」

光牙「気まずいなー、おい。」

落石自体はそこまで酷くなかったらしく、数分でどけられた。

光牙「みんな！」

つい頬が上がってしまった。ああ、俺は生きて帰ってこれたんだと。

明「お兄ちゃん！」

命「光牙君！」

リープ「光牙様！」

明は俺の胸に飛び込み、命は右腕を掴み、リープは左腕を掴んできた。

光牙「え、あ、あの、み、みなさん？」

明「心配したんだからね！責任とつてよお。」

明はすでに泣いていた。

命「光牙君、光牙君、光牙君。」

命は泣きそうになりながら俺の存在を確かめるようにしながら腕に強く掴んできた。

リープ「……………」

リープは泣くのを必死に押さえながら、腕を、いや手を強く握りしめた。

光牙「……………」

俺は心底申し訳ないことをしたと思ってしまった。まさかここまですみ込まれるとは思ってなかったからな。

光牙「ごめんな。みんな、心配かけて。」

俺のその言葉を聞いて女性陣はしばらく何も喋らずに俺に抱きついてしまった。

そしてこの初戦闘が全ての運命を変える戦いの始まりだった。

A R T T H E W A R 〽開戦〽 E N D

第2話「S T

第2話「START THE WAR」(開戦) (後書き)

光牙ええのう。羨ましいのう(´。ω。´)。だが、リア充ではないw

ああ次回！光天成ブライトライズ第3話「変身時に裸になりませんよ by 光牙」にライズアープ！！

(くどいようですが、次回予告は毎回嘘ですw)

第3話「HARD THE HERO 〜ヒーローは大変だ〜」（前書き）

ブライトライズの正式パイロットになってしまった光牙、そして灯闇の血として託されたブライアーマー。彼の日常はどうなっているのか。彼の運命は誰も分らない。

第3話「HARD THE HERO 〜ヒーローは大変だ〜」

朝。

必ず来る朝の光。

同じようで同じ事の無い新しい朝。

そんな新しい朝の光の下

俺の意識は覚醒していった。

第3話「HARD THE HERO 〜ヒーロ

ーは大変だ〜」

「灯闇宅2F 自室」

光牙「zzzzz」

ドタドタ

廊下から騒がしい音がする。

バターン

ドアは豪快に開けられた。

明「GOOD MORNING ONIITYAN!!」

光牙「zzzzzzzzzz」

光牙は全く起きない。

明「はあ、まだ寝てるよ。まあいつか、今日は私が起こせるから。じゃあ、早速いつてみよう!」ウエイク ノン・レム」を。」

明はジャンプする体勢を取った。しかし、その時。

光牙「明。」

明「!!」

光牙「zzzz」

明「なによあ。寝言?びっくりしたあ。」

明は少し頬が赤く染まった。

光牙「可愛いよな。」

明「・・・・・・!!」

明の顔はリンゴを凌駕するほど頬が赤く染まった。

光牙「命とリープ。」

明「!？」

明の顔は赤から紅に変色していった。

明「お、に、い、ち、や、ん？」

ドスの効いた声が空間を支配する。

明「死にさせえーーーーー!!」

明はいつも以上の『ウエイク ノン・レム』を喰らわせた。

ドキヤ

光牙「くぁwせdrftgyふじこー!!」

俺は2ch用語を叫びながら起きた。

光牙「な、なんなんだ一体!？」

明「お兄ちゃん。」

俺はドスの効いた声で俺を呼ぶ明に恐れを抱いた。

光牙「ど、どど、どうしたんだい。妹よ？」

明「どんな夢、見てたの？」

光牙「ゆ、夢？」

ふゝむ、どんな夢見てたっけ。えゝつと確か、明と猫の番組を見て「ぬこかわゆすなあ。」って言うて。んで、命とリープが猫を飼っていることを明に話していた夢だったな。確か。

光牙「えゝつと。」

明「お兄ちゃんのVAKAゝゝゝ!!」

バチーン

光牙「アウチ!!ひ、平手打ちは痛いお。」

明「はあ、はあ、はあ。」

明はもの凄く顔を赤くしながら俺を凝視していた。

光牙「あのなあ。明。」

俺は夢の内容を分かりやすく説明した。

明「・・・・・・・・。」

明はフリーズした。

光牙「あ、あの？明さん？」

明「ふ、ふん！紛らわしい寝言を言うのがいけないんだよ！
気をつけてよね。」

光牙「ええ〜！ね、寝言を気をつけるって無理じゃないか！
？」

明「う、うるさい、うるさい、うるさ〜い！」
こうして一日が始まった。

「灯闇宅1F ダイニングルーム」

茜「おはよう。この天然たらし。」

光牙「なんでそうなる。しかも天然たらしじゃないぞ。
たぶん。」

明「お兄ちゃん、起こしたよ母さん。」

茜「襲われなかった？」

あのなあ。この母方は何を言っているんだ。

明「大丈夫だったよ。」

光牙「むしろ、俺が襲われたって話した。」

茜「嘘おっしゃい。性欲を持て余してるくせに。」

光牙「な、何言ってるんだ！べ、別に持て余してなんか・・・。」

「
いないような、いるような。」

明「お兄ちゃん、持て余してるの？」

茜「昨日のあの騒ぎで疲れてるだろうから、持て余してても不思議じゃないよね。」

光牙「・・・さ、さあさあ！もうこんな時間だ！速く飯くつち
やお〜う。」

明「逃げた。」

茜「チキンめ。」

光牙「酷い言い様だ。」

そして朝飯を食べ始めた。

光牙「うゝん。白い米に、目玉焼き、お味噌汁。いやゝ優雅な食事だ。」

明「朝の定番メニューだね。」

光牙「そうだな。そして決め手に。」

茜「はい、納豆！」

俺は受け取り、蓋を開け醤油と辛子を掛けて混ぜた。

明「混ぜ混ぜ、混ぜ混ぜ。」

光牙「混ぜ混ぜ、混ぜ混ぜ。」

茜「そしてえ。」

明・光牙「投入ゝゝゝ。」

か、完璧だ。

3人「いただきます。」

ズズゝゝ 味噌汁を啜る音

光牙「寒い朝はこれ一杯！いやゝ暖まりますなゝ。」

明「ですねゝゝ。」

俺と明はホンワカしていた。

茜「はい、二人とも。」

そう言って母さんはソース、胡椒、醤油を出してきた。

光牙「センキュ。」

俺はサニーサイドアップ（目玉焼き）にはソースか醤油を掛けて食う派だ。

光牙「今日は、玉子2個か、じゃあ、一つはソース、一つは醤油だな。」

明「私はせうゆ（醤油の古い呼称）ゝゝ。」

茜「私は胡椒ゝゝ。」

こうして俺たちは昨日何事もなかったかのように朝飯を過ごした。そして家を出た。

「通学路 商店街」

今日もまた明と一緒に通学路を歩く。

光牙「そういえばさ。」

明「うん。」

光牙「昨日、明のクラスには被害はなかったのか？」

明「大丈夫だったよ。あのロボットが学校を守ってくれたから。」

光牙「そうだな。」

あゝ、平和だ。ってうん？

不良A「おいおい、女どこ見て歩いてんだよ！？ああ！？」
という声が商店街の裏道から聞えてきた。

明「？どうしたのお兄ちゃん？」

光牙「明、先に学校に行っててくれ。」

明「どうしたの、急に。」

光牙「誰かが不良に絡まれてる。見過ごせないから行ってくる。」

明「でも、怪我しちゃうよ！お兄ちゃん、ただでさえケンカが弱いんだから！」

光牙「大丈夫、大丈夫。お兄ちゃんに任せとけて。」

俺は軽い口調で明に言った。

明「分かった。私も行く。」

光牙「ダメだ。お前を怪我させたら元も子もない。先行つてろ。」

明はちよつと不満そうに答えた。

明「分かった。お兄ちゃんを心配させるなら先行つてる。」

光牙「ああ、ありがとな。」

明が先に行ったのを確認してから俺は誰にも見られないかつ不良共の様子を見れる場所に移動した。

不良B「その制服、高山高校の生徒か。」

男子生徒「そ、それがどうした。」

一人の男性は少しびびりながら伺った。もう一人の女性の顔がいまいち見えない。

不良A「っていうかこの女めっちゃマブイ見た目してんじゃないか。」

ダメだ、バカは何を言ってもバカだ。話がつながってない。

不良B「俺たちにぶつかってきた礼は体で返してもらっちゃおうじゃん。」

女子生徒「か、体？」

もう一人の女性はかなり動揺しているようだ。

不良A「はは、それ良いじゃん！」

こいつら調子に乗りやがって。どう助けるべきか。……変身すれば勝てるんじゃないか？ だけどこんなことで使っていないのだろうか？ でも悪人に対して使うのは良いんだろ？ ……ふーむどうしよう。普通に行くか変身するか。普通に行く場合は警察呼ぶよなここで。

不良B「じゃあ、こいつには俺たちのチ。ポを舐めさせるかあ。」

光牙「！！！」

ああ、切れたは、今俺完全に切れた。ブライアーマーでボコボコにしてやる♪

男子生徒「や、やめろ。」

不良A「ああ！ 彼氏ちゃんは黙ってるよ。」

不良Aは男子生徒の顔面にパンチを繰りだそうしている。

光牙「いくぞ、テック。ッター！」

俺は光に包まれ変身した。

不良A「死ねやコラ！！！」

男子生徒「！！！」

パシ

光牙「……………」

俺は右パンチを軽く利き手ではない左手で受け止める。余裕だ。
こんなへなちょこパンチ。

不良A「な、なんだ、てめえ！」

男は体勢をそのまま俺に言った。

光牙「人に名前を聴く時は、まず自分の名前からってママに教
わらなかったか。ベイビー。」

不良B「野郎！舐めた口聴きやがって、大体なんだそのコスプ
レは！？」

不良A「そうだ！舐めた格好しやがって、か、格好いいつもり
か！？」

俺を罵倒しようとする能無し共に俺はこう言ってやった。

光牙「ああ。格好いいだろう！！」

もちろん、場はしらけた。俺は断言する。なぜなら俺は格好いい
と思ってるからだ。

不良A「わ、訳分かんねえこと、ほぎきやがって！」

光牙「あーあ。聴いてて思うけど。本当にお前らみたいな不良
は頭悪いし、かつこ悪いよなあ。思わず涙が出そうだよ。」

不良B「んだと！」

光牙「大体何、チャラチャラした格好で格好良くなってるつも
り？ププかつこ悪い♪」

アーマーを着けてるからといって、表情は分かる仕様なので頬を
上げていかにも馬鹿にしていますよ的な表情を作って人指し指をさし
て見せた。

不良A「て、てめえ！」

案の定切れ始めた。

不良B「ぶっ殺してやる！」

光牙「おー怖、これくらいでキレるのかよ。かつこ悪い♪」
不良A「本気で殺してやる。」

不良Aの方は金属バットを不良Bはナイフを取り出した。

光牙「二人とも、少し離れてて。」

カップル「は、はい。」

光牙「さあ、来いよ。格好いい不・りよ・う・さ・ん♪」

不良A・B「うおおー！ー！ー！ー！ー！」

同時にかかって来た。

不良A「死ね！」

まず金属バットから攻撃してきた。その攻撃をあえて右の人差し指で止める。

不良A「！！」

不良B「野郎！！」

次のナイフは左手の人差し指と中指で白刃取り。

不良B「あ、あ。」

不良共の顔は青ざめていた。

不良A「うわああー！ー！ー！ー！」

一人逃げた

光牙「逃がすかよ！」

俺はジャンプし奴の目の前に飛び降りた。

不良A「ひっ！？」

光牙「どこ行くのかなあ？警察なら止めないよ。」

俺はこいつの顔に死なない程度にパンチした。たぶん加減はこの位。

めりっ

不良A「ぶっ！」

不良は壁までぶっ飛んだ。そして気絶したっぽい。ふう、殺してはいないぜ。でも

光牙「あっちゃあー。今の感触的にたぶん鼻の骨折っちゃったな。まあ自業自得だな。」

不良B「う、動くな！」

光牙「あつ。」

もう一人の不良は女子生徒を人質にした。

不良B「う、動くとかいつの命はないぞ！」

不良は女子生徒の喉元にナイフを突きつけていた。

おいおい。もうそれは悪ふざけの域を超してるじゃん。ダメだなあ。こいつら。

男子生徒「や、やめろ！彼女を離せ！」

不良B「っせえ、黙ってる！」

あーあ。面倒臭いことになったなあ。

光牙「エース聞えるか？」

俺は頭の中でエースを呼んだ。

エース「ああ、光牙か。不良相手に何手こずってるんだ？」

光牙「おお、本当に繋がった。って、ええ！なんでそんなこと分かってるんだよ？」

エース「一応、光牙の様子はWDF本部から映像として送られる。」

光牙「おいおい。まじでプライバシーねえな。」

エース「その代わり、しっかりそこら辺の警察に通報しといたにしても面倒事に首を突っ込む奴だなあ。」

光牙「うっせ。見ちゃったら放っておけないだろう。後で後悔するのは俺だからな。でだ。ブライアーマーに武器ってない？」

エース「あるぞ。えーっと、検索。」

光牙「どうだ？」

エース「武器を召喚するらしい。近接武器はトンファー『パイルトンファー』と『ブライトンファー』の1組ずつ。中距離武器は長剣『ライブレード』。遠距離武器は見た目だけ派手な麻醉銃『レムガン』とエネルギースナイパーライフル『ライズル』だ。」

光牙「ら、ライズルで。」

な、名前どうなのよ。てか麻醉銃って、随分ミリタリー色が出てきたなあ。

エース「あと、ネガティブのような超常現象系統も出来るらしい。」

光牙【どういうことだ？】

エース【その気になれば魔法剣を使えたり、魔法を使えるんだと。】

光牙【ま、まごうことなきファンタジーだ。】

エース【じゃ、頑張れ。後もう少して警察も着くからな。】

光牙【ああ。ありがとな。エース。】

そして通信を切った。

不良B「おら、てめえ！なんか言えやコラ！！」

光牙「……………」

不良B「おい、聞いてんのか！」

不良は俺を指さすためなのかナイフを女子生徒の喉元から俺の方に向けられた。

光牙「今だ！来いレムガン！」

そう叫ぶと俺の手の中にレムガンが顕現された。

カチャ 構えた

不良はたまらず女子生徒の首を切ろうとした。

光牙「させるか！」

ドバシュ 麻酔銃の発射音

もの衝撃波で地面の砂煙がかなり俟っていた。しかもやたら弾が光っていた。そして

不良B「……………」

当たった。なぜか血が若干噴き出していた。そして不良は倒れてしまった。

光牙「をいをい。まさか死んだんじゃないだろうな。」

エース【大丈夫だ。吹き出る血は特別製の薬莢の中に積んであった物だ。ペイント弾みたいなものだ。】

不良B「zzzzzzzz」

不良は寝た。ナイフはぎりぎりの所で不良が手を離し落ちた。

光牙「ふう。良かった、死んでない。」

男子生徒「め、恵美——！」

女子生徒「あ、歩ー！」

二人は自分達の存在を確かめるようにお互い抱き合っていた。

光牙（うんうん。よかよか。でもここでキスはするなよ。羨ましいから。）

カップル「本当にありがとうございました。」

光牙「ああ、いえ俺があいつらを煽らなければあんなことにはならなかったんだし。別に礼を言われることじゃないですよ。」

歩「それでも助けて貰ってなければ恵美が穢されるところでした。」

恵美「ありがとうございます！」

光牙「まあ、二人とも無事で良かったよ。」

話をしていると警察がやってきた。

光牙「ああ、この二人の不良がわいせつ未遂です。」

警官「・・・・。君、不思議な格好しているね。」

光牙「ああ、気にしないで下さい。ああ、そうそう時間教えてくれませんか。」

警官「あ、ああ。えーっと8時ちょうどだね。」

光牙「ふう。なんとか遅刻しないで済みそうだな。」

歩「えっ、もしかして高山高校の学生さん？」

光牙「え、あ、えーつとお。」

恵美「ぜひ、お名前を教えてくださいませんか？」

どうしよう。よし、ここはお決まりで逃げようかな。

光牙「通りすがりのヒーローさ。」

そして俺は全速力でその場を去った。

歩「ああ、お礼を。・・・・行っちゃった。」

あの二人は恐らく事情聴取を受けるはずだから学校に行くところを見られないはずだ。と願いつつ学校へ向かった。

「学校内にある茂み」

光牙「よし、ここなら誰もいないな。・・・ログアウト。」
俺は変身解除し、怪しまれないよう教室へと向かった。

「3 - A」

光牙「おはようっす。」

影次「ああ、光牙、おはよう。」

命「おはよう。光牙君。」

樹「おっす。」

早速俺は自分の席に付いた。そしてみんなが俺の所に集まってきた。

リープ「おはようございます。光牙様。」

ドール「おはよう。光牙。」

光牙「ああ、姫さんにドール、来てたのか。おはよう。」

挨拶が済んだと思ったらマナブ先生が教室に慌てて入り込んだ。

マナブ先生「光牙！体は大丈夫なのか！？」

光牙「ああ、先生。おはようございます。」

マナブ先生「挨拶はいい。で、大丈夫なのか。」

光牙「異常なしっす。」

マナブ先生「そうか、良かった。それだけ聞いておきたかったんだ。じゃあ、みんなHRでな。」

嵐が去った。

光牙「全く、良い先生だなあ。マナ先は。」

影次「そうだねえ。そう考えると俺たちは運が良いな。」

樹「全くだ。」

光牙「そっぴやあ、影次。昨日の機体は例のオーデインの公式サイトに何か乗ってたか？」

もしブライトライズのパイロットや機体の概要が掲載されていた場合、えらいことになるからな。何より俺の立場が。

影次「いいや、何にも。更新さえされてないよ。」

俺は内心ホツとした。

命「あれ、でも毎日更新するんだよね。」

そう例のサイトはどうやらニュースでは言わない情報が公開される。そうすることにより、ニュースで色の付いていない生の情報を知れる仕組みで毎日更新することを義務付けられている。なぜなら、彼らは全世界の精鋭を集めているのでどの国、人にも平等に知る権利があるからだ。WDFオーディンといえど、各国の代表とも言える軍隊を集約しているせいか軍の機密情報というものがない。まあ、さすがに技術の提供とかはしないけど。とりあえず新型機の発表やある軍人の昇格の話等を毎日更新される訳だ。

ドール「昨日のロボットの存在をどう世間に伝えるか迷ってるんじゃないか？」

リープ「確かに、オーディンの新型って言うとなぜ秘密裏に開発したのか怪しまれるし、何よりあのロボットが日本に出現したとなると私の国は元より、他の国から日本の優遇としてメディアや国の政治家に叩かれますからね。下手に公開できないのでしょう。」

光牙「……………」

命「どうしたの光牙君？」

光牙「えっ、いや、あの機体ってオーディンの新型っぽくないよなあ。って。」

樹「どうして？」

光牙「いやだつて、あんなアニメ調の巨大二足歩行型ロボットなんてあるとは思えないわけで。」

そうWDFオーディンの機体にはまず巨大二足歩行型ロボットなんて存在していないのだ。まあ単に秘密裏に作られているのか、俺が知らないだけかは定かではないが。とりあえずALD (Attack is the Largest Defense) 『攻撃は最大の防御』』という通称『アルド』という全長15mというモ。ルスーツぐらいの大きさの二足歩行型のメカがあるという噂があるだけだ。それ込

みで後でちよつとエースに聞いてみるか。

影次「まあ、確かに噂のA.L.Dより2倍くらいの大きさはあったしな。」

命「いつもの技術じゃあ開発自体が無理そうな機体だったもんね。昨日のロボットは。」

樹「まあ、ネガティブの新型つて訳じゃないから良いんじゃないか？」

ドール「まあ、ね。」

光牙「……………」

リープ（光牙様？）

「3 - A 授業中」

光牙（はあ、暇だなあ。この先生の授業はとにかくダルい。今のうちにエースに聞くか。）

俺は念じ始めた。

光牙「エース、聞こえるか？」

エース「なんだ、ちゃんと授業を受ける。」

光牙「それを言われると辛いが今のうちに一つ聞きたいことがある。」

っていうかもはや、これは監視の域だな。

エース「なんだ？」

光牙「お前とブライトライズはオーデインに作られたのか？」

エース「違う。」

光牙「へっ？じゃあ一体。どこで作られたんだ？」

エース「それが、その部分の記録がこの間の襲撃で失われたのだ。分かることはあのブライトライズと私は地球以外の星で作られたということだけだ。」

光牙「ち、地球以外！？」

影次（光牙の奴、何で驚いた顔してるんだ？）

樹（あ、怪しい）

命（具合でも悪いのかなあ？）

光牙【お、おい地球以外で作られたのになんでお前は日本語や日本の文明が分かるんだ！？】

エース【最初から私のメモリーに入っていた。】

光牙【開発者は他星の日本オタクか。変な話だ。】

まずどうやって地球の情報を集めたんだろうか。

エース【だから私は手がかりを掴むためWDFに向かったわけだ。】

光牙「そっぴやあ、もうそっぴち着いたのか？」

3-Aの人間「！！」

全員光牙の方を見ていた。

光牙「あつ、な、何でもないです。」

教師「どうしたんだ？何か質問でも？」

光牙「いや、少し意識が飛んでただけです。」

俺は必死に頭を下げた。

教師「まあ、昨日の騒ぎで変な浮遊感というか変な感覚があるから仕方がないにしろだなあ。まあ、この数学の図形がいつか役に立つかもしれないから頑張れよ。」

光牙「はい。頑張らせていただきます。」

数学の図形つつても2次関数とかは数学者以外いらないだろうと思う。

教師「じゃ、授業を再開する。」

光牙（あ、危なかった。ああ、でもあいつらこっちを見て笑ってやがる。まあ、仕方が無いか。）

光牙【悪い。トチった。】

エース【つい口が出たのか。】

光牙【そう、つい口が出たの。んで、そっちに着いたのか？】

エース【ああ。着いて格納庫に入っている。】

光牙【よく入ったな。その巨体で。】

エース【ああ、戦艦用の格納庫だ。】

光牙【なる。】

エース【今はWDFの取り調べをルンから受けてる。】

光牙【そういえば、地球製じゃないのになんでルンと知り合いなんだ？】

エース【地球に降りてきた時に未確認飛行物体への通信でそのネットワークで出会った。】

光牙【へーえ。いつ頃だよ。地球に降りてきたつてのは。】

エース【ああ、3日ぐらい前に私の意識が戻りブライトライズと共に地球の大気圏ぎりぎりの所を彷徨っていた時だ。】

光牙【えっ？じゃあ、お前は3日前まで機能停止してたのか？】

エース【みたいだ。どうやらどこからか地球圏に来た時にブライトライズの回路に支障が起き、私の思考回路がバックアップを取りそしてクリーンインストールを掛けたみたいだ。】

光牙【バックアップがあるならロードすればいいじゃんか。】

エース【それがな、そのバックアップデータがどこかのネットワーク内に置いてきたらしい。どこにも見あたらないんだ。】

光牙【その件もあってWDFで取り調べを受けてる訳か。】

エース【まあ、そういうことだ。】

光牙【ふうん、まあ詳しく聞いても分からないそうな会話なんだろうな。】

エース【そういうことだ。】

光牙【それじゃ切るわ。ありがとな。取り調べしっかりな。】

エース【ああ。】

エースとの念話は切れた。

「3・A」

授業は終了した。そしてみんながこっちに来了た。

樹「どうした。惚けちゃって。」

光牙「いやあ、実は昨日久しぶりに神ゲーやってさ。そのゲームで昨日の事を考えてた。」

影次「どんなゲームだよ？」

光牙「ガチャフォ。スだ。あの小さい機械生命体が地球で戦う奴な。」

命「へえー、それで。」

光牙「いやあ、昨日の機体を見て思ったんだけどさ。機械生命体が違う銀河系からこの銀河まで来て地球で戦うことってあり得るのかなあって。」

影次「それはまた随分ファンタジーだな。」

影次よ、昨日の俺はそのファンタジーの一片を見たんだぜ。

命「なんだ。そんなことだったのかあ。良かった。」

光牙「何が良かったん？」

命「てつきり具合が悪かったのかと思っちゃった。」

や、優しいなあ。命は、やっぱり可愛いよなあ。

そして教室のドアが開いた。

ドール「……。」

リープ「光牙様、一緒に帰りましょう。」

明「お兄ちゃん、一緒に帰ろう。」

光牙「そうそう、命もそうだけど、リープと明も可愛いんだよなあ。って、あ。(。D。)」

明・命・リープ「……。」

女性陣3人は今朝の明と同じぐらいに頬が赤くなってしまった。

光牙「し、しまった。つい口から出てしもうた。」

3人はフリーズ状態だった。

明ファン「あいつ、兄貴だからって、調子に乗りやがってえ。」

(。D。)ハッ!! 殺気!?

命ファン「おのれえ、俺たちの命さんを。」

(。D。)ガクガクブルブル

リープファン「また、あいつかあ。」

光牙「京都へ行こう。じゃなくて。」

俺は必死に考えた。そして成り行きで行くことにした。

光牙「あ！あんなところに銀行強盗が！？」

ファン共「へっ？ああ！ほ、本当だ！？」

いつしか学校内の生徒はその騒ぎで全員窓に釘付けになっていた。

光牙「よし、これで。」

俺は追っ手が無いことを確認し、屋上へと駆けていった。

「屋上」

光牙「案の定、誰もいないな。よし。」

俺は右腕を天に掲げた。

光牙「今回はどうかのビューティフルな人みたいに言ってみよう。」

その右腕を握り拳へと変え、例のビューティフルな人のポーズをし叫んだ。

光牙「変身！a g o g o b a b y！！」

そして俺はブライアーマーを装着した。そして屋上からジャンプして現場へと急行した。

「学校 校門」

ヒュンヒュン 流れ弾の音

影次「うおー！流れ弾が来てるぞー！」

ドール「いや、むしろあいつらがこっちに威嚇射撃しているんだ。」

ダダダダ ヒュンヒュン 威嚇射撃

樹「頭良いんだか、警戒しすぎなんだかわかんねえなあい。」

リープ「みなさん！こっちです。ここに隠れて。」

命「分かった！」

明「うん。」

そうして5人は遮蔽物となる壁に身を隠しながら戦況を伺った。

影次「うん？」

樹「どうした？影次」

影次「いや、なんか今屋上の方で何か光ったような。」

4人「へっ？」

そして彼らは屋上へと目をやった時謎の赤い人影が現場の方へ飛んでいったのを見た。

樹「な、なんだよ今の！？」

影次「わ、分からん。と、とりあえず、現場に降りたみたいだ。」

そして彼らは現場の方に集中した。

「銀行前」

警官はパトカーを盾に犯人と銃撃戦を繰り広げていた。

犯人A「おらあ、警察。退かねえと怪我じゃあすまねえぞ！道を空けるお！」

ダダダダダ アサルトライフルを撃ってる音

警官A「くそお、H Q（ヘッドクォーターの事。要するに隊員に指示する所）、H Q。」

H Q「こちらH Q」

警官A「こちらA小隊このままでは全滅です。増援を。」

H Q「今、その犯行グループの一人がこの状況に便乗して、複数人に窃盗。そいつを捕まえるのにある程度の戦力を割いてるためそちらに増援を送れない。現戦力で持ちこたえるんだ。」

警官A「では、W D Fの住民防衛部隊は来ないのですか！？。」

H Q「現在、応援を呼ぼうとしているが、この地域一帯から外へは通信出来ないよう、ジャマーが張られているらしく通信できない。恐らく先日のネガティブの仕業だ。今そのジャマーを処理しよ

うとしている。そして応援呼ぶのでそれまで何とか持ちこたえろ。』

警官A「くっ、了解。（くそ、今回のH.Q.の担当の無能上司め！淡々と言いやがって。）」

警官は死を覚悟していた。なぜならこの犯行グループは残忍で有名な『バットブラッド』だからだ。今まででも警官が100人以上は死んでいる。

警官B「隊長！！応援は来るんですか！？」

警官A「恐らく間に合わない！！現戦力で乗り切るぞ！！」

警官C「くそお、死にたくねえよ！！」

犯人B「ひやはあ。死ぬ死ぬ死ぬえ！！」

ダダダダダ

実際、このまま戦闘が長引くと警官が負ける。敵はアサルトライフルと刀。一方、警官は拳銃一丁ずつと警棒。火を見るより明らかなのだ。

警官B「大体、なんで犯行グループが軍に支給されるアサルトライフルなんて所持してるんだ！！このままじゃあ、マジで死んじまう！！」

そう、パトカーを盾にしてもアサルトライフルだったら制圧射撃されて顔も出せない状況になるのだ。

警官A「くう、反撃も出来ない。死を待つしかないのか。」

もう、あきらめかけていた。

警官A「新前の隊員No.B-1。」

警官B「な、なんですか隊長！？」

警官A「その若さで死にたくはないだろう。俺が命懸けで援護する。前線を離れて周辺の市民を安全な所に連れて行くんだ。」

警官B「しかし！それは逃げると言っているようなものです！」

警官A「逃げると言っているんだ！！俺は！！お前は俺より4年も若い、今年で俺は22になる。高校出たばかりのお前が死ぬことはない。」

警官B「……。」

警官A「・・・結婚を約束した彼女にこの指輪を渡しておいてくれ。ま、死ぬつもりはないけどな。」

警官B「俺だって生命を張る仕事って分かっているからここに来たんです。絶対にあきらめませんし、死ぬつもりありません。」

警官A「ふ、この手なら逃げてくれると考えたが、どうして、漢だな君も。」

しかし現状は絶望的だった。なぜなら、もうパトカーの耐久力に限界が近いからだ。そろそろ爆発し、A小隊の人間は人生最後の抵抗をしようと思った。

その時、H Qから異様な通信が流れた。

H Q「な、なんだアレは!？」

その時H Qから驚きの声が上がった。

H Q「窃盗犯が謎のスーツを着た者に倒されスーツの人間?が犯人を警官に突き出した!？」

警官A「謎のスーツの人間？」

警官D「とうとう、幻聴まで行ったか俺たち。」

H Q「謎のスーツの人間。A小隊の方に急行!!」

警官A「えっ？」

犯人C「ははあ、そろそろ死期が近いなあ。どうするう。警官?」

犯人D「ん?おい!？あ、あれはなんだ!？」

その場にいる人間全員空を見上げた。そしてその飛んできた物体がパトカーと犯行グループの間に降りた。

光牙「あのなあ、あんたらこんなことしてどうなるか分かっているのか？」

犯人A「な、なんだあ。てめえ!？」

光牙「知りたいか、なら教えてやろう。俺の名前を。」

現場を遠くから見ている影次たちにも会話が聞こえていた。

その場を見ている人間「・・・・・・。」

光牙「助けを呼ぶ声あれば光の速さで参上し!またこの仮面の

下の顔は普通の高校3年生！」

光牙「謎の光高戦士、ブライズマン・グレイプ！！作者の望み通り只今参上！！」

その場を見ている人間「……………」

しらけた。

グレイプ「ええ、あの、みなさん、何かしら反応しようよ。ねえ。」

犯人A「ふざけやがってえ。この変態スーツ野郎！！」

グレイプ「失礼な！！変態だとお。確かに俺はHであるのは認めるが、お前らみたいに犯罪を犯すようなやる事が変態じみている脳みそに蛆の湧いているような奴らに言われたくはない！！」

犯人B「んだとお！高3のガキがるっせえんだよ！！」

グレイプ「それだけ、純粋な考えができるのだよ。犯罪を犯すゴミクス野郎共。」

犯人C「撃て。」

ダダダダダ

アサルトライフルを俺に向けて一斉射撃してきた。

警官A「ああ、あれだけ喰らっては。」

犯人A「へ、撃ちすぎで煙りで奴が見えねえぜ。」

煙が晴れてきた。そしてあの男は

グレイプ「訂正、ゴミはゴミに失礼だな。あれはリサイクルできるからな失敬失敬。」

犯行グループ「！！！！？？？」

立っていた

グレイプ「ということだ」

俺は人差し指で奴らにビシッと指を指す。

グレイプ「ゴミにもなれない哀れな人外に訂正だ。」

犯人A「な、なめた口聞きやがってえ！！」

グレイプ「おいおい、喋るなよ。空気が穢れるだろ。とっととブタ箱に入って心をクリーンにして世間様に貢献しろよな。」

「学校 校門」

影次「い、生きてる。」

樹「す、すごいな。」

ドール「ああ。」

女性陣「……………」

みんなほぼ放心状態だった。

「銀行前」

警官A「H Q、あれは結局何者なんだ？」

H Q「分かん。今は様子を見てるんだ。」

警官A「A小隊、頼まれなくてもそうします。」

もはやグレイプ（光牙がスーツを装着した時の仮名）と犯人たちの世界だった。

グレイプ「警告する。自首しろ。その方が罪が軽くなるはずだから。」

犯人B「んな訳にはいくかよ！」

犯人A「おい、てめえら、刀だ！刀なら奴を斬れるはずだ！」

カチャ 構えた音

犯人A「殺れ—————！！」

犯行グループ「オオ—————！！」

四方八方から攻撃が来たが俺は避けなかった。

キン 金属が弾かれた音

犯行グループ「！！」

グレイプ「あーあ。折角の刀がお釈迦だねえ。勿体ない。俺にやったらそりゃ、折れるよ。」

犯行グループ「あ、ああ。ば、化け物だ—————！！」

犯行グループは車に乗車した。そして逃げようとアクセルを踏も

うとした。

グレイプ「逃がすか！出る！ライブレード！」

そう叫ぶとグレイプの右腕には北欧神話に出てきそうな見た目の剣が出現した。

グレイプ「貴様らみたいな悪党を逃がす訳ないだろうが。」

俺は念を集中し車に剣を構えた。もちろん、ここからでは斬れるはずはない。

グレイプ「うおおおー！走れ！ラン・インパクト！」

ブン、ガガガガ 剣を振った後と衝撃破がコンクリートの地面を削りながら走る音。

警官A「魔。剣かよ！」

車は一閃された。

グレイプ「斬。」

スパン 車が綺麗に真つ二つになった音。

グレイプ「おお、本当に魔法っぽいのが出た。やってみるもんだな。・・・楽しい。」

犯人A「野郎共！走って逃げろー！」

グレイプ「ああ、ソレはないね。召喚」

ドドド 犯行グループに全員にレムガンを放った。

犯人グループ「うわあ！！」

もちろん、仕様通り血が噴き出した。

警官A「こ、殺したのか！？」

HQ『生体反応確認、どうやら麻酔銃のようだ。』

犯人グループ「zzzzzz」

グレイプ「ふう〜。終わった終わった。じゃあ、警察官さん、よろしく。」

警官A「え、あ、ああ。」

そして犯人は全員逮捕され、凶悪組織『バットブラッド』の人間なのでオーデインのブタ箱に入ることになったらしい。

警官A「協力に感謝する。」

警官は握手を求めてきた。

グレイプ「へっ、あ、ああ。どうも。」

その手を俺は握った。

警官B「いやあ、君のおかげで死なずに済んだよ。ありがとう。
」

グレイプ「いやあ、お役に立ったなら光栄です。」

警官C「謙虚なんだなあ。君は、それで正体は秘密な訳か？」

グレイプ「え、あ、はい。すいませんね。訳ありなもので。」

警官D「じゃあ、報道陣に捕まる前にここを去った方が良いでしょう。
もう来てるぞ。」

グレイプ「あ、本当だ。」

女性レポーター「ご覧下さい。あの謎のスーツの人間を。彼があの凶悪組織バットブラッドの暴拳から無力だった警官の危機を救ったのです。」

警官A「あーあ。これじゃあ、明日の記事は謎のヒーロー出現と昨日のメカに警察は役立たずってところだな。」

警官B「確かに。記事なんてそんなもんだもんな。電通の社訓なんて『人の嫌がることを書け』だもんなあ。」

グレイプ「ああ、それは聞いたことがあります。やっぱり真実なんですか？」

警官A「まあな。解決した事件のことを取り上げないで失敗した事件のことばかり書いて警察は役立たずだのなんだの好き放題さ。」

グレイプ「……。」

間違ってると思う。失敗したとしても彼らは俺たち市民のために生命を張って事件を追っているのにそう書かれるなんて。

グレイプ「そう言えば、あのKEEP OUTって、いつ無くなるのですか？」

警官A「ああ、そろそろ、取れるかな。だから記者が押しかけるぞ。」

グレイプ「あ、これからまた俺戦っていくつもりなので差し支えなければ隊長さんのお名前を教えて下さいませんか？」

警官A「え、ああ、いいけど。俺の名前は『かいどう皆藤 まもる護』隊長兼捜査官だ。これからも協力お願いしちゃうな。」

グレイプ「はい、よろしくお願いします。」

「学校 校門」

相変わらず6人とも呆然としていた。

影次「とりあえず、終わったみたいだな。」

樹「あ、ああ。」

ドール「何なんだろう。あれ？」

命「さ、さあ？」

明「ブライズマン・グレイプかあ。」

リープ「高校3年生って言っていましたね。」

影次「うん。正体バレちつくなことをする秘密の変身ヒー

ローってのも考え物だな。」

その時光牙が校舎の方から走ってきた。

光牙「おい、みんな、大丈夫かー!？」

影次「ああ、光牙。」

明「お兄ちゃん、見た!？あのブライズマン・グレイプっていうヒーロー!？」

光牙「へえ、あいつそんな名前なのか。学校の窓から見てた。凄かったな。」

命「なんかギャグっぽい会話してたね。」

光牙「……ギャグっぽかったかあ。まあ、あんなこと言えばなあ。今度からはシリアス路線で行こうかなあ。」

リープ「どうしました？光牙様？」

光牙「へっ？あ、何でもないよ（しまったつい黙ってしまった。）。」

そして俺らは帰路に着いた。

それから家に帰ってテレビを見てたら、見事なまでに変更報道していた。警察は非難されていた。なんかネガティブとやってること本質的に変わってない気がした。まあ、当事者さえ分かればいいか。

第3話「HARD THE HERO」ヒーロ

「は大変だ」END

第3話「HARD THE HERO 〜ヒーローは大変だ〜」（後書き）

正義感に突き動かされて体が動いてしまう光牙、彼は一体これからどうなってしまうのか。

次回、光天成ブライトライズ第4話「騎士道大原則1つ!」にライズアープ!!

第4話「CHANGE DAYS OR NOT CHANGE FEELING」

正義の味方？ブライズマン・グレイプになった光牙、彼の日常はこれから一体どうなっていくのだろうか？

第4話「CHANGE DAYS OR NOT CHANGE FEELING」

光。

それは生命の輝き。

光。

それは人の輝き。

光。

それは必ず昇る太陽の輝き。

第4話「CHANGE DAYS OR NOT CHANGE
FEELING」変化する日常・色褪せない想い」

「高山高校 3 - A 教室」

眠い。ひたすら眠い。それもこれもぜんぶ昨日の犯罪者のせいだ。俺の前で犯罪を起こすから俺は気を遣いながら人のいないところで変身し、言い方は悪いがフルボッコにする。ああ、いつそのことやるのなら俺の目の届かない場所ですてもらいたい。だけどそれで友達が傷ついたら困る。八方塞がりだ。ああ、変身して戦うのは新鮮でいいけど。いくらなんでも犯罪者が多すぎる。変身なんて遊びや移動に使うぐらいがいいぜ。

キーン、コーン、カーン、コーン

光牙「やっと授業が終了した。な、長く辛い睡魔との激しい戦いだったぜ。」

犯罪者より強かったぜ。

そして影次たちが来た。

影次「今日はいつもより眠そうだったな。」

光牙「うーん、そうなんだよなあ。」

命「ゲームもいいけどちゃんと寝ないとダメだよ。」

光牙「分かったよ。母さん。」

命「！！」

命は頬を赤くした。

命「か、母さん、そ、それってもしかしてわ、私が光牙君の、
つ、妻であるからしてえ、あ、ああ。」

あーあ、なぜか命が暴走している。

光牙「お、落ち着くんだ命。戻ってこい。」

命「ハッ！！ご、ごめん、どっかに飛んできた。」

そういえば、樹の奴が見あたらんなあ。

光牙は周囲を見渡した。

光牙「ああ、寝てるのか。」

樹はイビキを立てながらぐっすりと夢の世界へと旅立っていた。

樹「もう、食べられないよ。zzzzzz」

光牙「・・・ここからでも聞こえる声でしかもありきたりな

寝言なこと。」

影次「ハハ、だな。」

樹「この女体祭り。zzzzzz」

クラス内の空気が固まった。

光牙「前言撤回と行こうかな。」

命「ひ、酷い夢だね。」

影次「そう思う。」

光牙「はあ、そういう夢や妄想は家に帰ってからにして一人で
賢者タイムに入ってたの。」

クラス内の女子「へっ？」

光牙「おっと、問題発言だったな。」

影次「お前も目を醒ませ。」

命「・・・エッチ。」

命は小声で呟いた。

光牙「う、うめえ。じゃなくて。」

俺は命にささやいた。

光牙「命もそういうゲームやるだろ。」

命「やるけど、私そんな才。二ーなんてしないもん。」

爆弾発言

光牙「!!!!!!!!!!」

俺の顔が赤く染まるのが自分でも分かった。

光牙「あ、あの、命さん？そ、それ、ま、マジで言っているんですか？」

そう言っていると命はもっと顔を赤くして言った。

命「嘘だけど。ちゃんと好きな男の人を考えてするもん。」

光牙「いいよ！！言わなくて！」

俺はつい大声で言ってしまった。

クラス内「……………」

ああ、俺を見る女子の目が変に潤んで、そして男子からは殺気の目が。にしてもなぜ潤んでいるんだ？女子は。

影次「あのさあ、二人とも、聞こえなかったけど。そんな恥ずかしい話してたの？」

光牙・命「なんでもないです！！」

影次（声を合わせてると妙に怪しいって。）

にしても平和だ。こんな日常が一番良い。きっとパラレルワールドではもっと平和で穏やかで楽しい日常があるんだろうな。作者：「おおっと、あからさまにパラレルワールド作品フラグだ。」

光牙「ま、いいや。帰ろうぜ。帰ってゲームしたい。」

命「昼寝つていう選択肢はないんだね。」

光牙はあくびをしながら言った。

光牙「俺は睡魔より生き甲斐であるゲームの方がずっと大事だ。」

影次「うーむ、分かるから困る。」

命「困っちゃうんだ。」

光牙「とりあえず、あの賢者を起こしてドールとリープに帰りを誘つか。」

影次「む、そうしよう。」

その時、教室の扉が開いた。

マナブ先生「をいをい、HRあるだろう。」

光牙「おっと、そうでした。」

俺らは席に戻り、HRが始まった。

マナブ先生「でだ、昨日の威嚇射撃で誰も怪我がなくて良かった。そしてあの事件はえーっと、あの微妙にファイター・。アッばいデザインのヒーローのおかげで解決したな。」

光牙「やっぱり先生もファイター・。アッばく見えますか？」

マナブ先生「ああ。見えたね。実はあの一昨日のメカはコンパチ・ルカ。ザーみたく、あのヒーローの物だったりして。」

す、鋭い。まあ、でも思うような。メカオタだったら確実に。

影次「あり得そうですね。それは残念な事に2次元の話です。」

マナブ先生「そうなんだよなあ。はあ、俺は今独身なんだから影女の。影さんという俺の嫁が出てくればいいのに。」

光牙「。影は俺の嫁。」

命「光牙君、今HRだよ。先生も。」

光牙・マナブ先生「ハッ！俺は一体。」

影次「あの二人、なんか師弟関係っぽいよなあ。」

クラスの腐女子「師弟関係・・・きゃあーーーーー！！！！それはありかもーーーー！！！！」

影次「しまった。」

命「これはひどい。」

マナブ先生「まあ、腐女子は置いてだ。例の2件以外にも不可解な事件が多発しているらしい。とりあえず、有名なのはサイバーテロだな。俺も昨日、ウィ・。でスーフアミエミュと『D・。？・。C』を落としてたら、なぜかウィ・。自体が落ちた。それと同時にウィ・。に繋がっていたPCは全て落としていたデータが破壊された。ちくしょーーーー！！三咲里奈ルートやりたかったよおー

「！」

光牙「じゃあ、今度データ持ってきますよ。」

マナブ先生「本当か！！」

光牙「いいですよ。18の方でしょ。持ってきますよ。」

マナブ先生「うおおおー！持つべきものはいい生徒だー！
ー！ー！」

命「あの、HR」

マナブ先生「おーとつと。ついはいでしまったな。それだ。それ以外にも公式ホームページやグー。ルが被害に遭っているまあ、グー。ルの方は米の国が特定アジアの『中』の付く漢字の国がやったと言っているがな。」

光牙「時事ネタかよ。」

影次「しかもほぼ答え言ってるし。」

命「先生わざとやってますね。」

マナブ先生「八割程な。」

光牙「どう見ても十割なのに吹いた。」

マナブ先生「だから危険な嵐がここ最近増えたのでサーフィンするのに気をつけろよ。」

光牙「ほい。」

マナブ先生「ああ、忘れてた。ここら辺で、不審車と不審者が出たから気をつけろよ。」

光牙「そっちが大事だろ常考！！あと何でふしんしゃって2回言っただんですか。」

マナブ先生「ああ、分かりづらかったな。不審な車と不審な人物が出没したらしい。」

光牙「その不審シリーズは何かやったんですか？」

マナブ先生「ああ、車の方は幼女を拉致しまくっているらしい。人の方は変質者集団だと。」

光牙「かなり凶悪な情報じゃないですか。先生被害にあったせいでこっちの方を甘く見てるでしょう？」

マナブ先生「ああ、幼女つつても俺が興味あるのは同年代で見た目ロリだけだしな。」

光牙・影次「あるある。」

命「ねえよ。」

いい突っ込みだ。命。

樹「zzzz」

マナブ先生「・・・樹には後であなた方が説明してくれな。」

光牙「なぜ俺たちを見る。」

マナブ先生「あなた方は光牙達の事だからな。」

光牙「はい、先生。」

俺は手を挙げた。

マナブ先生「なんだ光牙。」

光牙「まんどくさいとのことです。（面倒臭いのこと）」

マナブ先生「奇遇だな。俺もめんどいことこの上ない。」

光牙「これはひどい。」

そしてHRが終わり、マナ先にいつ例のゲームを持ってくるか相談し、帰りの挨拶をした。・・・普通そいう話は帰りの挨拶で個人で相談するよなあ。まったく、職権乱用だな。

「帰り道 桜並木」

光牙「はあ、今日は何にもなければ良いが。」

命「本当だね。」

影次、樹、ドールは用事があるので先に帰った。そして今は

リープ「昨日も凄い騒ぎでしたものね。」

明「お兄ちゃんなんてその前に不良をお天道様に晒すように人助けしてたもんね。」

命と2人ではなく、ハーレム空間だった。そして桜並木。俺は義之君の気持ちを痛感した。

リープ「まあ、本当ですか?」

命「あれ、でも光牙君って。」

光牙「ああ、ケン力が弱いつて知ってるんだっけ。命は。」
命「そ、そんな、弱いなんて。」

そう命や明は長い付き合いなので俺の長期不登校期間の理由を知っている。

リープ「もしかして、例の小学校の頃の話ですか？」

光牙「そういえば、リープには簡単には話してたっけ。」

重いから簡単に説明しておいたんだっけか。

命「なんだかんだで見てられないんだね。」

光牙「まあ、人を呼んだくらいだから大したことしてないよ。」
そんな話をして俺たちは家に帰った。

「灯闇家 玄関」

光牙・明「ただいま〜。」

し〜ん。

光牙「あれ、母さんいないのか。鍵あいてたのに。不用心だなあ。」

明「そういえば、今日母さん夕方頃に買い物しに行くって言うてたよ。」

光牙「そうだったっけ。」

朝は眠くて聞いてなかった。っていうか変質者が歩き回ってるんだから。あの凶悪な双丘を変質者が見たらやばいんじゃないやあ。

明「やる事ないし。お母さんを迎えに行く。」

光牙「まあ、今回は俺も付き合っは。」

明「なんで？」

光牙「なんとなくだな。」

明の場合車に拉致され兼ねない。まあ、巨乳ロリを捕まえるかは知らんがな。

「サミ。ト前」

・・・なんか騒がしいな。

光牙「どうしたんだろ。」

明「そうだね。」

俺達は歩みを進めた。そして俺は人集りしている中を見た。

光牙「！」

明「どうしたのお兄ちゃん？」

俺は視力が2・0なのと変身のおかげで元のステータスも上げることが可能なので視力を上げたら見えてしまった。そう、男の巨根が（複数）。

「人集り」

光牙「あの、どうしたんですか？」

周りにいた野次馬に聞いてみた。

男「ああ、変質者が誰かを探しているみたいだ。」

光牙「誰か？」

俺は奴らを我慢して見てみた。やっぱり裸の野郎が5人いた。

変態A「女、女ハ、ドコダ。」

変態はどうみても様子がおかしかった。

光牙（女を探してるのか。でもこの野次馬にも一人ぐらい。・・・いないんですけど。）

明「ねえ、お兄ちゃん、どうしたの？あの人なんて。」

光牙「！！」

そうだった。俺は今、明と一緒に。

命・リープ「あ。光牙君・光牙様。」

光牙「！！」

茜「あれ、光牙に明。」

光牙「ブーーーーー！！」

俺はつい吹いてしまった。

変態B「オ、オン、女ノ声ガシタ。」

変態C「犯ス、穴、全テ。」

変態D「レ、レイ、レ。プ、シ、シタイ。」

変態E「種、付ケル、女ニ。」

奴らは異常だった。片言で喋り、よだれをダラダラと流していた。

光牙（な、何なんだあいつら？何かに取り憑かれてるようにか見えない。）

その時、奴らの目はこっちに向けられた。

光牙「し、しま！」

女性陣「へっ？」

変態A「女、四人モイル。オ、犯ス。」

こいつらまともにしゃべれていない。どう見ても逝っちゃってる。

光牙「みんな逃げるぞ！！」

女性陣は捕まってナニをされるかの恐怖で声が出ないのか俺の声に反応し、首を縦に振った。

「路地裏」

俺達は一目散に逃げていた。逃げている内に恐怖になれ始めたのかみんな愚痴りながら逃げていた。

光牙「にしても、裸のくせにしつこい奴らだなあ。」

茜「私みたいな熟女のどこがいいのよぉー！」

変態A「ム、ムネ、胸、モ、揉ム、オカ、ズ。」

光牙「こいつら乳狙いかよ！」

そういえば、俺の周りは。

光牙「……………」

命「え、光牙君？」

明「お兄ちゃん？」

リープ「光牙様？」

うーむ、よく見るとみんな割とある方だなあ。それに美少女ときた。そりゃ狙われるわな。っていうか見てたことがばれると小言言われそうだな。走る美少女のたゆんたゆんは脳内保存しとこ。

変態E「オ、オト、男、俺、犯ス、オト、男、尻、興奮。」

光牙「うおーい！！バイもいるのかよ！！ざけるなあ！！」

や、やばい、捕まったら俺まで掘られる。開発されてしまう。

光牙「みんな大丈夫か。」

明「もう、きついよ。ハア、ハア」

命「私も。ハア、ハア」

リープ「ハアハア。」

茜「みんな、頑張つて！」

やばいな。リープが限界だ。

命「きゃあ！」

バタ

光牙「くそ、命の方が限界だったか！」

明・リープ・茜「あっ！」

バタバタバタ

光牙「くそ、連鎖かよ！・・・仕方ないか。」

俺は奴らの度肝を抜くような作戦を思いついてしまった。

光牙「あまりやりたくないが仕方が無い。オイ！変態共！」

変態共「??」

光牙「気持ちよくなりたいか？」

変態A「ナ、ナリ、タ、タ、イ。今、ス、スグニ。」

光牙「じゃあ、気持ちよくなるために俺が見本を見せてやる！

！」

女性陣「！！」

俺は命の方に向かって歩き出した。

光牙「いいか、女性を使って気持ちよくするためには。」

俺は命を正常位の形にした。

命「こ、こう、光牙、君？」

命はやたら赤く頬を染めていた。

光牙「こうするんだよ!!」

シュツ、チーン 変態Aに金的きんてきした音

俺は右足のかかとで金的した。

変態A「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

変態1人は倒れた。

光牙「さあ、次だ。こいつは気持ちよくて倒れたんだ。気にすることはない。」

変態共はその異様な光景に止まるしかなかった。

光牙「まず、この女性をあの集団の中に連れ込み。命をみんなの所に連れて行った。」

光牙「そして次にこのロリのきつつーい。内で。」

俺は明を座位の体勢にした。

明「お、お兄ちゃん?」

明の顔もちろん赤い。

光牙「逝く!」

腰を突き上げる動作をした。実際は逝ってないよ。

変態共「!!!!!!」

悶絶していた。

光牙「次はこの姫の鬼畜プレイだ。」

俺はリープをフ。ラさせる体勢にした。

リープ「こ、光牙様?」

リープはなぜかうつとりしていた。

光牙「こうする!」

俺はリープの頭を股間ギリギリの所まで持って行った。

変態共「!!!!!!」

あろうことかオ。ニーしていた。

光牙「そしてラストは。」

茜「.....」

俺はみんなを背にして奴らの前に立った。

光牙「てめえらを逝かせる!!」

光牙「変身!!グレイプモード!!」

俺はみんなを助けるため、奴らを油断させるため、あんなヤヴァイ芝居をし、そして変身した。まあ、俺の生命は後で確実に無くなるんだけどね。

グレイプ「ブライズマン・グレイプ!!」

場にいる人間「!!??」

グレイプ「お前らは絶対に許さない。俺の、俺の大切な人たちを穢そうとしたお前らを。俺は絶対に許さない!!」

変態共「ジャ、邪魔、オン、ナ、ヤ、リタイ。」

グレイプ「お前達変態には素手で充分かも知れないが俺の気がすまないんでな。いくぜ、レムガン!!」
レムガンを召喚した。

グレイプ「標準セット、シユート!!」

そう、俺は奴らの玉に打ち込んだ。

変態共「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

奴らが声にならない叫び声を上げた。そして倒れた。

グレイプ「ふう。・・・ん?」

車が路地裏に入ってきた。おいおい。このままじゃあ、轢かれるぞ。

護「までえー!!」

警察官の隊長の護さんがこの車を追っていたためパトカーで路地裏に。

グレイプ「カ、カオス。」

俺の視界には仰向けの5人の裸(男)にその後ろからこっちに目掛けてすっ飛んでくる車が2台。あなたには想像できるだろうか。

グレイプ「・・・不審車っぽいし、とりあえず止めるか。」

ドン!

俺は不審車が5人を轢きながら(裸の5人はしぶとく生きている。)
来たので片手で受け止めた。

運転手「！！！？？」

グレイプ「何より、速さが足りない！」

俺はパトカーがぶつかる前に不審車を上空へと投げた。

護「ちよつ、あ、当たる！」

グレイプ「護さん！ちよつと我慢してね！」

ドン

俺は両手で5人を轢いたパトカーを丁寧に衝撃を緩和させながら
レムライフル右手に両手で受け止めた。

グレイプ「あ。」

やばい、落ちてくる。

グレイプ「間に合えよ。」

ダン

「上空」

俺は地面が若干削れるジャンプをし上空にいる不審車をまた受け
止め、誰もいないパトカーと5人の後ろにぶん投げた。

グシャ 地面に落ちた音

運転手「ひいひいひい！！！！」

運転手は車から降りて逃げた。

グレイプ「逃がすか！！」

レムライフルの照準にセットし俺は引き金を引いた。

バシュ・・バス

運転手「！！」

運転手は倒れた。後頭部から血を噴き出しながら（運転手の血で
はありません）。

グレイプ「ふう。一件落着だな。」

俺は自由落下しながらそう口にした。

「路地裏」

グレイプ「護さん、あなた達が轢いた裸が変質者です。」

護「ああ、そうなのか。ありがとな。昨日に続き。」

グレイプ「いえ。たまたま出くわしたから協力できただけです。
よ。（軽いなあーこの人）」

護「しかし、」

護さんは辺りを見渡した。

護「カオスだな。」

グレイプ「ですよね。」

護「変質者か。全く、これでこいつらの部屋から二次元グッズが見つかったらまた、マスゴミに叩かれるよ。オタクは性犯罪者に近いつて。全く勘弁して欲しいよ。」

グレイプ「ですね。落とす人はともかく、エロゲー買いづらくなったり、また変な目でオタクを見ますからね。」

護「全くだ。って、君もいける口か？」

グレイプ「はい、メカオタです。」

護「私が君の正体を知ったときに色々話すかな。」

グレイプ「ハハ、楽しみにしますよ。」

護「では、協力に感謝する。」

グレイプ「あ、待った護さん。」

護「うん？」

グレイプ「運転手は知りませんが、この変態5人はWDFの牢屋の方が良いと思います。」

護「こんな露出狂を？」

グレイプ「なぜか、彼らは獣のようになっていました。まるで野獣の性欲のように。ただただ体を欲していたんです。しかも片言で喋って。もう異常でした。」

護「良くあることだと言いたいが片言で野獣か。確かに無い例だな。うん、一応上に掛け合ってみるよ。」

グレイプ「はい。」

護「では。」

護さんは敬礼したので、俺もつい敬礼した。

そして俺達関係者以外いなくなつたのを確認した。

グレイプ「解除。」

俺は変身を女性陣の前で解いた。

光牙「・・・・・・。」

みんな凍っていた。まあ、3名程顔が赤い訳だが。

光牙「えーっとみなさん？」

明「お兄ちゃんの。」

光牙「あ、明？」

明「お兄ちゃんの。」

光牙「？」

明「VAKA——————！！！！！！！！」

バチコンー！！ 思いつきりアップー

光牙「（。D。）なぜえ——————！！！！！！」

俺は空に舞った。

ドサ

墜ちた。そして俺の意識はアッパーと疲れて視界がブラックアウトした。

「灯闇家 自室」

光牙「うーん、こ、ここは。」

俺の家で俺の部屋っぽいな。この布団の寝心地。

光牙「もしかして夢だったのか？もしそうだったらあの3人にあんな羞恥なことしちゃって俺の獲物が立つちまったことも、正体バレしたことも夢！？」

俺は喜んでいた。なぜか顎が痛いを見ない振りして。

光牙「とりあえず、起きるか。」

ガバ 起きた

明・命・リープ・茜「……………」

啞然としていた4人がベットの横に椅子に座っていた。

光牙「……夢か。」

ガバ 寝た

茜「光牙、残念ながら夢じゃないんだけど。」

ガバ 起きた

光牙「なん、だと？」

俺の頬が赤く染まっっていくのが分かる。

命「えっと、こ、光牙君。」

命が俺の顔を見ないように声を掛けた。俺もつい顔を背けた。

命「話してくれる、かな？」

光牙「……………」

リープ「こ、光牙、様。」

リープも顔を背けた。

明「お、お兄ちゃん、どうしてブライズマン・グレイプになつてるの？」

明も。

光牙「話すけどさ。その前に俺。」

い、居づらすぎる。

光牙「ご、ごめん、芝居にしてもこ、凝りすぎた。本当にごめん。」

なんとかみんなの方を見て言えた。

命「あ、謝らなくて、良い、かな。」

リープ「そ、その、通り、ですの。」

明「むしろ、な、殴っちゃってごめん。」

光牙「えっ、あ、いや、ありがとう。」

茜「じゃあ、今は若い人達に任せておばさんは抜けようかな。」

光牙「悪い、い、今はそうしてくれると助かる。」

茜が出て行った。

また部屋に静寂が包む。

光牙（ここはあえて地雷を踏んで、変な空気を断ち切ってみるか。アーメン、ソーメン、俺 Y O M E N。だ、ダメだ、落ち着け俺。訳の分からん事を考えるな。）

光牙「えーっと、は、はじめてだよな。あ、あんな体勢。」
ボン

3人は爆発したように赤くなった。蒸気さえ出ている。

光牙「ご、ごめんな、ほ、本番じゃ、ないにしろ。あんなの。」
チュドーン

命がまず、倒れた。 兵士：「1人やられたー!!」
光牙「し、仕方が無かったんだ。つで済むとも思っていない。あの体位。」

チュドーン
リップが倒れた 兵士：「衛生兵、衛生兵はどこだー!!」
「！」

光牙「な、なにかしらの方法で、せ、責任は取る。」
チュドーン

明が倒れた 兵士：「H Q、H Q、救援頼む!!」
バターン

ドアが思いつきり開いた H Q：「救援を送った。持ちこたえろ。」

茜「光牙、地雷というより、それはもはやねえ。」

光牙「うわあ！母さん。」

茜が麦茶を持って来た。 兵士：「了解！」

茜「ああ、3人とも倒れちゃって。」

光牙「やっぱ、不味かったのかな。」

茜「うーん、ちよつと3人ともピュア過ぎたね。」

光牙「そうなのか。」

茜「光牙もよ。」

光牙「そうだったのか。」

茜「それにしても、やっぱり光牙はお父さんの血を引くのね。」

母さんは麦茶を机に置き、ベットの横にある椅子に座った。

光牙「えっ？」

茜「父さんね。私にだけ教えてくれた事があるの。」

光牙「母さんだけに教えたこと？」

茜「そう、父さんね。異星人だったの。」

光牙「えっ？」

多少、考えていた。俺の父が特殊な人間なのは、なぜなら灯闇の血という単語が出てたから。

茜「あの人の出会いは夏至だった。一番太陽の輝きが長い日。」

光牙「……………」

「回想　いつもの桜並木」

茜「あの時はなぜか桜が咲いていてね。花咲きじいさんでもいたのかもね。フフ。」

茜の話している時の顔は優しく悲しくも楽し表情で遠い目をして語っていた。

茜「そう、あそこにある桜並木に会ったの。」

茜「や、やばい。このままじゃあ、遅刻しちゃう。」

茜「私が料理の専門学校に通っていた時だったわ。」

ドン

茜「痛った。すいません。大丈夫でしたか？」

「???」「こちらこそ、すいません。お怪我は、ありません。」

「

茜「どうしたんで……………」

茜「今思うと、随分とネタな出会い方だったのね。その人が私の旦那、あなたのお父さん。『クライム・ライト』。日本名『光闇輝』。思い出すわね。通称『ムウちゃん』。」

光牙「それはまた随分と古代の帝国だなあ。」

茜「あの人もあの人の父も科学者だったからね。余計に。そし

て私達はお互いに一目惚れしたとは思わなかったわ。それに私もあの人も一目惚れじゃなくて友達付き合いから恋愛に入るのが良いと思う人間だから。》

クライ「す、すいません、婦女子に当たるなんて失礼なことを。どうかお詫びに何か埋め合わせさせて下さい。」

茜《あれはきつと、恥ずかしいからデートしよう、なんて言えなかったのでしょうね。もの凄く顔を赤くしてたわ。ちょうど、この3人みたいに。》

光牙《どういう意味だよ。》

茜《フフ、鈍感なもの、あの人から受け継いだのね。フフフ。》

茜「えっ、う、埋め合わせですか。・・・いいですよ。言っておきますけど、私は遠慮しませんよ。なんてね。」

クライ「はい、遠慮しないで下さい。」

茜「えーっと、お名前は？」

クライ「え、あ、はい。私は『光闇ひかる輝』と申します。」

茜「輝さんか。私は『灯火ともしび茜あかね』よろしくね。」

クライ「はい！よろしくしたいと思います。」

茜《そして私達はあの日から付き合い始めたの。最初はちょっと気になる人として、そして後に恋人、夫妻として。そう、恋人になっすぐにあの事件が起こったの。》

光牙《あの事件？》

茜《私の家が火事で燃えてしまったの。そして私は両親の死体を見て恐怖し、助けを求めている時だった。》

「回想 茜の家」

輝「茜！！」

茜「輝さん！！」

輝「くっ、どうにかしないと。・・・あれしか。」

茜「きゃあ！火がこっちに。もう、ダメなの？」

輝「躊躇ってられるか！！来るんだ！！ブライ！！」

光牙《ブライ？》

茜《あの人とあの人の父が開発したアンドロイド『ブライ』そのアンドロイドが私を救出したわ。彼ったら自分じゃなくてロボットに行かせるんだもん。ちよつと興ざめよね。》

光牙《あまり人のこと言えないからノーコメントで。（ブライか、もしかしてあの時の謎の空間にいたあのブライと同一人物なのか？）》

茜《私は元からアニメを良く見ていたのだけれど彼のオタク趣味で学んで分かったの、この技術と動きの滑らかさ、思考パターンはどう見ても地球の技術じゃないって。そして彼の素性を知ったの。》

光牙《素性？》

茜《彼はこの銀河系より遙か遠くにある『ブライズ星』から来た科学者だったの。》

光牙《ブライズ星？》

茜《ブライズ星は、地球に似ている星で技術が遙かに進んだ惑星なの。それで彼は似ていると言われていた地球に興味を持ち、旅行目的で地球に来たの。》

光牙《随分軽いな。》

茜《そして私と出会って地球に長い間居ようと思ったみたい。》

光牙《待った。旅行目的で来たのに、アンドロイドのブライを持ってきたのか？》

茜《なんかね。ブライは粒子として彼の通信端末に保存されていたから持ち込めたみたい。》

光牙《アンドロイドのような物質を粒子に変換するなんて、ぶっ飛んだ技術だ。》

茜《なんでも、彼の父である『クライメイズ博士』が変換理論やワープなどの理論を作り上げたんだって。》

光牙《俺のじいさんは超天才博士かよ。っていうか、博士まで

が名前？」

茜「そうよ。ある意味凄い名前よね。」

茜「そして、結婚する時に付けた氏が『灯闇』でああなたが産まれたときに付けた名前が『闇を灯す光の牙』日本名『灯闇 光牙』で、第2の氏名としてブライズ星での名前『グレイブ^{クライ} K マスカ』」

光牙「グレイブ！？奇跡的に一致してるな。」

茜「きつと、あのブライアーマーにインプットされていたのかもね。」

光牙「母さん、ブライアーマーの事まで。」

茜「あなたが産まれてからは凄いわよ。博士がああなたのためにロボット作るって言って、送ろうとしてきたし。」

光牙「もしかして、その機体って。」

茜「そう、その機体こそが『光天成 ブライトライズ』のオリジナル。」

光牙「オリジナル？」

茜「玩具のロボット『チャイルド』よ。あれは勘弁だったわ。なにせ全長15Mもあるから送ってくるなって言っちゃったもんね。」

光牙「で、でかい、子供の玩具にWDFのALDと同じサイズかよ。」

茜「そこら辺の時かな。明を拾ったのは。」

光牙「えっ、明を拾った？」

茜「そうよ。実はね。あれは4月の桜満開の桜並木の時だったわ。」

「回想 いつもの桜並木」

茜「ねえ、見て、光牙ったら、こんなに笑顔で。可愛いわね。」
輝「ハハ、本当に凄い笑顔だ。まだ泣きわめく年頃なのに今日」

は笑顔だな。」

茜「穏やかな。今日も。」

輝「ああ、そうだな。こんな日がいつまでも続くと良いな。」

茜「えーっ、じゃあ、光牙は成長しなくて良いのぉ？」

輝「い、いや、そんなんじゃないよ。」

茜「分かってるわよ。」

輝「全く、からかわないでくれよぉ。」

茜・輝「ハハハハハ。」

茜「うん？光牙どうしたの、いきなり静かになっちゃって。」

輝「あの桜に気になるのか？」

茜「ねえ、あなた、見てきてよ。」

輝「ああ、分かった。」

輝「あ、茜、こっちに来てごらん。」

茜「うん？なあに。」

輝「あ、赤ちゃんだ。」

光牙「それが、明だったのか。」

茜「そう、光牙が3才の時よ。」

光牙「3才！てことは明は1才の時に捨てられたのか！？」

茜「置き手紙にはこう書いてあったは、『拾って下さい。無責任とは思いますが、どうかお願いします。私には育てられるだけの寿命が無いのです。私の夫は自分一人で育てると言ったのですが、事故で他界し、私は不治の病で産んで1・2週間で他界するでしょう。どうか、この子を拾って下さい。この子の名前は明です。』」

光牙「……。また随分、重苦しい話になったな。」

茜「そして私達は女の子も欲しかっし、拾わずにはいられなかったから。」

光牙「……そうだよな。」

茜「そしてここからも重要。彼が他界した日よ。」

「回想 ブライズ星」

茜「私はこの日、ワープ機能でブライズ星に来ていたの。その時に限って、ブライズ星で天災が起きたの」

光牙「どんな天災だったの？」

茜「星の中核の限りなく近くにあるマグマが突然噴き出したの。」

光牙「！」

クライ「父さん！マグマがこっちにも来ます！速く逃げて！」

メイズ博士「バカモン！お主が逃げんか！ワシはここでマグマを食い止める！」

クライ「そんな無茶です！！報告だと、この星は最終的に爆発するんですよ！！」

メイズ博士「老いばれより先に若いもんを逃がすのが先じゃ！特に孫の光牙だけは絶対に！！」

クライ「ですが！？」

茜「その光牙のためにも、生き残るんですよ！！」

メイズ博士「大丈夫じゃて、それに、ワシにはこのチャイルドをベースにしサブメカとしてブライを合体させての改造機、光天成ブライトライズの完成がもうすぐなんじゃ。」

クライ「なぜです！？何もこんな時にまで！」

メイズ博士「こいつは、いつか、地球という双子星に近いあの星のいつかある危機に立ち向かえる力を孫に託したいのじゃ。」

クライ「だったら、なおさら、今生きて延びて、後で。」

メイズ博士「ならん！！この機体まで溶けて無くなってしまふ！！後、ワープ機能プログラミングと、学習型思考回路ACEに再起動を掛けるだけなのじゃ！！」

クライ「なぜ、どうして、そこまでして、その機体を？」

メイズ博士「ワシはなあ、どうしても、世にはびこる悪が憎いのじゃ、その悪がお天道様の下に出れぬような心と力を残したいのじゃ。こいつはいつか銀河を救う救世主になるのじゃ、ワシはそう

思う。太陽の光を浴びて、人々が暖かくなる心の光を輝かせ空を羽ばたく姿をな。そして何より。」

クライ「……。」

メイズ博士「漢はどうしてもやり遂げなければならぬ時がある！……！」

クライ「……！」

メイズ博士「この機体のコンセプトは熱血じゃあ！パイロットが熱ければ熱い程強くなるのじゃあ！……この機体の設計者が逃げながら開発して見る！じじいのイ。ポのようになってしまっぞあ……！」

クライ「……！！！」

メイズ博士「それにワシがこれで死んだら、偉大な博士になるからの。どうせ長くないし、孫も見れて満足なんじゃ。悟りを開いたんじゃ。最後くらいこのじじいに見せ場を作らせんかい。」

クライ「しょうがない親父だよ。本当に。」

茜「どうせ、あなたも燃えてきたんでしょ。」

クライ「ああ。」

茜「行つてきなさい。」

クライ「ええ……でもここで死ぬんだよ確実に……！」

茜「あなたは成すべき事を見つけたんでしょ？使命を見つけたんでしょ！？漢なら最後まで行きなさい……！」

クライ「茜。」

メイズ博士「いい嫁を持ったの。クライ。」

クライ「はい。」

メイズ博士「茜さん。こっちに来なさい。孫2人と一緒に地球にワープする。」

茜「もしかしてそのワープ装置って。」

メイズ博士「ああ。あと一回が限度じゃ。」

クライ「茜。」

茜「輝。」

茜「そこで私達は別れのキスをしたの。もちろんディープよ。」

ディープ。》

光牙「母さん。ここシリアスシーンですよ？」

メイズ博士「光牙よ！願わくば、このブライトライズに乗り、悪に、悪に、悪に心の輝きを見せつけるのだぁー！ー！！」

「灯闇家 自室」

茜「これでお終い。」

光牙「母さん。」

茜「そんなに悲しい顔しない。父さんが死んで悲しいけど、あの時の決断や行動の嬉しさの方が勝ってるんだから。」

俺は思った。母さんとはとても強い人なんだと。

光牙「にしても、明が捨て子だったとは。」

実は3人共気絶していた訳ではないのでこの話を全て聞いてしまっていた。

明・命・リープ「……………」

光牙や茜はそれに気付いていなかった。

茜「でも、私は本当の家族だと思ってるの。」

光牙「俺だってそう思ってるさ。血が繋がって無かろうが関係ない。明は明。俺の大切な家族だ。それに下品な話。これで近親相姦って訳じゃないね。」

茜「そうね。うまくやれば結婚もできるわよ。」

光牙「おお、普通のお二ヤの子として見れるって、ある意味魅力的だなあ。まあ、俺にはまだ好きな人はいまいち分かんないんだけどさ。」

茜「下は敏感なくせに気持ちちは鈍チンなのね。」

光牙「母さんも大概下品だよな。」

光牙・茜「ハハハハハハ。」

明「お兄ちゃん。」

光牙・茜「へっ？」

命「光牙君。」

光牙・茜「おっ？」

リープ「光牙様。」

光牙・茜「あつ。」

明「バ——————カ——————」

「……………」

バチーン

明は顔を嬉しそうにしながらビンタした。もちろん、俺の意識はブラックアウトした。

第4話「CHANGE DAYS OR NOT CHANGE
FEELING」変化する日常・色褪せない想い」

第4話「CHANGE DAYS OR NOT CHANGE FEELING」

衝撃の過去が明らかになり少しショックのあった光牙、この話は彼にどんな影響を与えていくのだろうか。

次回、光天成ブライトライズ第5話「変身って言ったらスター。インドですよね分かりますw」にライズアープ!!

第5話「BIG BUST INFANT GIRL DANGEROUS」

過去が明らかになった光牙、彼の両親は一体どれだけカオスなのか。作者はこの伏線などを回収できるのだろうか？作者は不安でたまらないお（´。ω。´）

第5話「BIG BUST INFANT GIRL DANGEROUS」

痛い。

頬が痛い。

寝たい。

眩しい。

俺の意識は戻ってしまった。

第5話「BIG BUST INFANT

GIRL DANGEROUS SMELL」巨乳口りは危険な
香り」

「灯闇家 自室」

光牙「うゝん。」

命「あつ、起きた。」

光牙「ここは、・・・そうだ、俺は明にビターンされて意識が
飛んだんだ。」

いっつゝゝゝ。本当に痛い。頬が今だにヒリヒリしている。まあ、
あんな発言したら当然か。

光牙「んで、明は？」

明「・・・。。。」

明は俺の死角に立っていた。そして俺の寝ている横に立った。

明「ごめんなさい。お兄、・・・光牙さん。」

明はなぜか俺に対して、もの凄い他人行儀で謝り始めた。

光牙「ああ、まだ夢か。もう一回眠れば覚めるだろう。」

俺はまた横になった。

明「え、あの。」

光牙「なんだ。明？」

明「だって、もう私、血が繋がっていないから。」

明は若干泣きそうになっていた。

光牙「そーい、あ、あの話聞いてたのか。命もリープも聞いてたのか？」

命「うん。・・・ごめん。」

リープ「聴くつもりはなかったのですけれど。・・・ごめんなさい。」

茜「だから、いいって、っていう風に私は説得してるのに」。

光牙「そうそう、そんな気にすんなよ。そこまで気にしてはいないからさ。」

嘘だ。俺は嘘を付いている。父や博士のそうまで作ろうとしたブライトライズの事で頭が一杯だった。でも、彼女らの悲しい顔は見たくないから俺は嘘を付いた。

明「・・・」

光牙「でだ。明。」

俺はベットから起き上がり、ベットに腰掛けた。

明「何ですか？光牙さん？」

光牙「馬鹿かお前は？」

全くこいつと来たら。

明「!？」

光牙「お前なあ。なんでそんな他人行儀なんだよ？」

明「だって。」

いつも甘えてくる癖に。

光牙「さつきも言っただろ。血の繋がりなんて関係ないって。」

明「・・・」

いまさら何言い出すんだか。

光牙「あのなあ、俺はずっと明のことを可愛い妹として暮らしてきたんだぞ？いきなり血が繋がってませんなんて言われてもその暮らしや態度を変える気はねえよ。」

明「妹止まりなの？」

???

光牙「はい？」

明「妹以上は無いの？」

ああ、そう言うことか。でも明の奴。

光牙「はあ、もう一回ギャルゲーやエロゲーの話をしないといけないようだな。」

明「えっ？」

俺に好意なんて無いはずなのになあ。↑鈍チン。

光牙「よく聴け。……姉や妹がいて、血が繋がってる場合でも主人公と攻略ヒロインがくっついて心以外も、体のつながりもするんだ。そう！ようするに愛のSEXだっつの！！」

明「き、近親相姦だよ！？」

光牙「関係ないね。それこそ子供が欲しけれりや、養子を貰ったり、^{じいちゃん}鸛にでも頼めばいいだろう！！とりあえず、好きになったもんはしょうがないんだよ！！それが男と女、いや、人間の本能じゃないのか！？」

明「で、でも。」

光牙「血が繋がってない状態なのは逆にラッキーなんだよ！！近親相姦？何ソレおいしいの？って状態になるからな。しかも普通に他人だから、普通に付き合っていける。しかも、お姉ちゃんなら『弟くん』って言われて甘やかされて、妹には『お兄ちゃん』なんて甘えられるんだぞ？くぅぅおいしいです！！神よ、あなたが本当にいらつしやるならば、私は血の繋がってない妹に感謝したい。ああ、血の繋がってない兄妹最高！！」

ちなみに、血の繋がりがある方が良いつて人もいますのであくまで作者の価値観です。

明「……お兄ちゃんのエッチ。」

明は小さい声でそんな風に言った。

光牙「か、神だ。俺は幸せ者だなあ。血の繋がってない妹にエ

ツチつて言われるなんて、もう死んでもいい。でも死にたくない。」

命「光牙君、趣味が露見しまくってるよ。」

リープ「光牙様のやつてる抜きゲーが分かる気がします。」

茜「エロい所は博士にそっくりね。・・・これはひどい。」

光牙「と、とにかく！！明、今も昔も今からも、俺はお前のお兄ちゃんだ。だから、いつものお前で居ろ。その方が俺は好きだ。」

ボン

明の頬が赤く染まった。

光牙「うん？今俺、変なこと言ったか？」

普通にその方が良くから言ったのになんで赤くなるかなあ？

茜「に、鈍い。なんでそこは輝似なのかなあ？」

明「・・・お兄ちゃんのバカーー！！」

バチーン

光牙「ふぐおう！！」

命は小声で言った。

命「正体が分かってても、変わらないな。光牙君は。」

リープ「私、もっと光牙様のことが好きになりそうです。」

命「・・・。私も。」

光牙「待て明！！落ち着け！！」

明「なんでお兄ちゃんはそのなのー！！？」

光牙「そんななのってなんだ！？一体俺が何をした！！！」

明「それがいけないのー！！！」

茜「うんうん。良い雰囲気だこと。」

「リビング」

そして夜も深いので命とリープは泊まることになったのであった。

光牙「んじゃあ、命とリープは俺の部屋に泊まれば良いんじゃないか？」

命・リープ「えっ？」

茜「そうね。敷き布団もあるし、それが良いんじゃない。」

明「えっ？お兄ちゃんはどこで寝るの？」

光牙「えっ？ここでソファに寝っ転がって寝る。」

命「それじゃあ、悪いよ。」

リープ「そうです。なら私達がここに。」

光牙「何言ってるんだ。こういう時はこれがお約束だろう。それに明、命、リープの内誰かの布団の中で一緒に寝るなんてこと無理だろ。それに、リープなんてお姫様じゃないか。さっき親御さんに電話した時だって、ヘリで駆けつけるなんて言い出したし、とてもしゃないがソファなんかで寝させられん。俺の心臓にもの凄く悪い。もう一つ。」

女性陣「？」

光牙「俺が格好付けるため。なんてな。」

女性陣「ああ、納得。」

光牙「ちょー！！納得しないでくれ！！冗談だ。冗談！！女の子をソファなんかで寝させるぐらいなら俺がソファで寝るぜ。って思っただけだ！！」

茜「本当にそれだけ？」

光牙「ううん、後、お客さんだし、成り行きだから。そしてぶっちゃけると、自分を抑えられるか心配なんだ。」

明・命・リープの頬はかなり赤くなっていた。

明・命・リープ「……………」（で、でも風邪引かれても困るしなあ。）

茜「じゃあ、みんな学校あることだし、今日はもうピザなりラーメンなり出前として食べて寝よう。」

光牙「そだな。命とリープは一回家に戻らないといけないしな。」

命・リープ「うん。」

光牙「そうだな……………うん。正体バレしちゃったし、俺が変身して担いで行った方が速いかな。」

命・リープ「えっ？」

光牙「あ、やっぱダメかな？」

命「いや、良いんだけど。」

リープ「大丈夫なんですか？」

光牙「人に見つかつたら適当に誤魔化せば良いだろう。」

命「どうやって？」

光牙「危ないところを助けて貰って、尚かつ家まで運んでくれたって。」

リープ「私はお姫様抱っこで運んで貰いたいなあ、何て。」

リープは上目で俺に頼んできた。

光牙「あ、あのなあ、やりたくても恥ずかしくないか、それ？
くっ、リープめ、俺の弱点であるお願いの仕方を心得ている。

リープ「私は姫です。一度くらいは殿方にされてみたいですわ。」

命「それなら私だって。お姫様抱っこは女の子の夢だもん。私もさりたい。」

明「私も。」

茜「私も。」

光牙「熟女は却下。」

茜「あら酷い。私もみんなみたいにはっちゃけたのに。」

光牙「熟女に興味は無い。例えば血の繋がりが無くても、熟女だけは無。あり得ません。」

ちなみにこの価値観も作者のもんです。

明「それでどうなの？お兄ちゃん。」

光牙「わーったよ。明日の送りはお姫様抱っこするよ。」

リープ「私達、秘密を守らなきゃねえ〜。」

命「だよねえ〜。」

明「ですよねえ〜。」

光牙「……分かった、分かったよ！！明日3人ともお姫様抱っこで送り迎えます！！」

リープ・命・明「やったあ〜。」

茜「あらあら、みんな恥じらいが無くなっちゃったわね。」

俺（作者）はビッチが嫌いだからこの女性陣は光牙がはっちゃけるからってだけでビッチって訳じゃないからな！！

「高山学校 3・A」

光牙「おはよう。」

そう、俺は朝起きて、とんでもない速さで女性陣を家に送り、学校へと送った。今日学校に往復したのは計3回だった。自宅〜リープ家、リープ家〜学校、学校〜自宅、自宅〜命家、命家〜学校、学校〜自宅、自宅〜学校、↑ここまで20秒。疲れはしないのだが変身をこんな風に使って良いのか疑問に思えた。そして帰りもこの逆をやらねばならなかった。

影次・樹・ドール・命・リープ「おはよう。」

何で俺の席に5人も溜まっているのだろうか？まあ、いいけど。

1人より全然良いからな。

影次「光牙、聴いたか？」

光牙「今日は一体、どんな情報だい？」

影次「あの例の巨大ロボットはオーデインの格納庫に入ったっ

て噂。」

光牙「へえーそれまた凄い噂だな。」

どこで漏れたのが気になる。

樹「今回は俺も聴いてたぜ。何せニユースでやってたからな。」

ドール「なんでも、三日前にWDFの本部にあの機体が入ってたのを見たていう情報がマスコミに入ったんだと。」

光牙「へえー。実際どうなんだろうな。」

おいおい。エース、一応気に掛けるよって言っても、あいつも事情を知るためにオーデインの本部に向かったんだから、それは無理なものか。

命「でもさ、あの機体オーバーテクノロジーっぽかったよね。」
リープ「確かに。あんなアニメ地味な動き、初めてみました。」
命とリープはブライトライズの出生を知ったので嘘何じゃないか的なことを遠回しに言った。

光牙「うーん、それにしても人を救うためのロボットなのになんで極秘で作ったのがバレると叩くんだろうなマスコミって。オーデインが嫌いなんかなあ？」

影次「そうだね。どっちみち人助けのために開発したのに隠してるだけでこれだもんね。」

リープ「やはり外交にも繋がってくるからでしょうね。実際、運営資金は全世界の税金から来てるらしいですから。」

光牙「なるほどな。」

ドール「そういえば、このあいだの五輪に関してで韓の国がアメリカのサーバーにF5アタックでサーバ落ちさせたんだってな。」

リープ「FBIが出勤する騒ぎになった奴ですね。」

樹「なんでそうなったんだ？」

命「ある選手を2の数字の付く某サイトが『あの点数はおかしいだろ。点数買ってるだろ』とかそういう批判をして、どっかの掲示板で集めた約11万人の韓の国民が某サイトのサーバーが日本と思い込んでいて、F5アタックでサーバ落ちさせようとしてやってみたら、米のサーバーでしたorz。という事件。」

樹「へえー。」

光牙「ああ、ちなみに被害総額は約2万ドルがうんたらって話もある。それで請求額が円換算で2億を超しているそうだ。」

樹「うお、悪戯のつもりでやったら2億円でしたってか。」

影次「うーむ、ざまあとしか言い様が無い。」

光牙「てか、最初に何かあったら日本にF5アタック仕掛けようぜって言った奴に恐らく請求されるっばいからかなり気の毒だな。まあ自業自得な訳だが。」

リープ「少し疑問だったんですが。F5アタックって何ですか

？」

樹「ああ、それは思った。」

光牙「姫さん、それは知らないんかい。」

俺は事件内容を知ってるみたいだったから知ってることと思って
いたぜ。

光牙「F5アタックというのはだな。」

樹・リープ「ふんふん。」

「灯闇 光牙の教えてそれなんて教室」

光牙「はい。やってきましたこの教室、今日は良い子のみんなにF5アタックについて教えちゃうよー。」

影次「またこれか。」

ドール「メカニズムが分からん。」

光牙「まず、F5について教えちゃおう。」

樹・リープ「よろしくお願いします。」

光牙「うん、良い返事だね。ということでF5とは何かな？」

俺は耳をみんなの方に向けた。

命「キーボード上にあるF1〜F12のことです。」

光牙「そうだね。その通り。Fには色んな機能があるよね。例えば、F1を押すとアクティブ（現在使われているってこと）のファイルのヘルプが表示されたり、文字変換時にF7を押すと全角力タカナにできるし、F8なら半角力タカナ、F9だとなんとアルファベット変換になるんだよ。そして今回のF5の効果は、インターネットでサイトを開いている時にF5を押すとそのサイトを更新するんだ。これにより、サーバーからはまた新しくサイトが開かれたことになるよね。」

リープ「そうなんですか。」

樹「更新ボタンとは知らなかったなあ。」

光牙「そしてF5アタックとは、F5の更新ボタンを連打して

何回もサーバーを働かせてその負荷でサーバーを落とす。つまりサーバーヒートさせるアタックな訳だ。」

樹「そんな簡単にサバ落ちするの？」

光牙「古典的な方法だからこの方法は人数がいる。今回は約1万人だからその大人数が特定のサイトで一斉にF5を連打してしまつたら、凄い更新数になるよね。ボタンを押すだけで更新なんだから相当の更新数になってしまう。」

樹「そつか、1秒に5回連打しただけでも55万人という数がサイトにアクセスしてることになるのか。」

リープ「確かにそれならサーバーに多大な負荷を掛けられます。」

光牙「そう、その通り。そして今回は見事にサバ落ちさせてしまつた訳です。」

樹「うお。勘違いとか。アメリカとばつちりじゃん。」

「教室」

光牙「まあ、悪口や凶星を言われたぐらいで勝手に切れて犯罪を起こすような国民性の奴らが一方的に子供なんだけだな。」

影次「しかもこの事件は土曜日の昼間ぐらに起きたらしい。」

もちろん仕事中だな。」

樹「仕事しろよ。」

命「ですよね。」

リープ「民度が低いのも考え物ですわね。」

光牙「まあ、今の日本人も大概だけだな。メディアリテラシーの欠片も無いから。」

ドール「あるある。」

俺達はそんな危ない話をしていた。

「授業中」

光牙【エース、聞こえるか？】

エース【何だ？光牙。】

光牙【一つ聞き忘れたことがあった。】

エース【なんだ？】

光牙【ALDって本当にあるのか？】

エース【ALD、ALD（Attack is the Largest Defense『攻撃は最大の防御』）通称『アルド』という全長15mというモ。ルスーツぐらいの大きさの二足歩行型のメカのことか？】

光牙【そう、まさにそれ。】

エース【ああ存在する。というより主力機体だ。ネガティブと戦闘する部隊なら大体配備されている。】

光牙【でもマスコミや公式サイトではALDの話はまるで聴かないぞ。】

エース【あれが世の中にあると一般人に知られてはまずいことでもあるのだろう。WDF、つまりオーデインの場合は抑止力のために公表したいらしいがマスコミが止めているらしい。】

光牙【何でまた。】

エース【分かん。マスコミも戦争が無いと困るのだろう。】

光牙【『戦争はビジネスの一環であり外交である』っか。武器商人じゃないんだから。】

エース【マスコミには何か裏があるのは間違いないだろうな。】

光牙【はあ、はつきり言っただけの本当の敵はネガティブだけじゃないって部分が悲しいよ。】

エース【そうだな。戦争は無くならない。もし無くなるなら。】

光牙【やっぱり、共通の強敵が現れれば良いんだけどな。でもそんなことになるとなあ。】

エース【そうだ、確実に死人が出る。】

光牙【その強敵を倒したらまた戦争する訳だろ。はあ、実際や

ってらないなあ。」

エース「だから今の人類の課題は子供達に戦争の愚かしさや人の心の光などを教えなくてはならん。」

光牙「『人の心の光』か。」

何となく分かる気がした。

エース「そういえば光牙。君はその地域の警察官と知り合いがいたな。」

光牙「ん？ああ、護さんの事か。それがどうかしたのか？」

エース「なんでもその地域の警察署の長官がオーデインの一部の部隊でかなり評判が悪い。」

光牙「どういう事だ。」

エース「どうやら現場に出たことのない人間でオーデインの高官にワイロを送ったりして成り上がっているんだと。」

光牙「どこでそんな情報を。」

エース「ルンがあのかくそじじいは嫌いと言って色々聞いたからな。」

光牙「んで、何かそのくそじじいの話を持ってきた理由は？」

エース「その長官は自分の地位を上げることしか考えてないから護隊員のことか心配だな。」

光牙「なんで心配なんだ？」

エース「最近のニュースでは、警察が無力と非難されてメンツが丸つぶれだろ。」

光牙「そう言えば、そうだな。」

エース「今はネガティブのせいもあるけど不況だ。公務員は普通、解雇されないがその長官は偽書類を作り問題があるので解雇すると報告し何人も除隊させたらしい。」

光牙「なるほど。最近、護さんの小隊が頑張っているけどマスコミからしたらそうでもないからメンツを気にする長官殿はご立腹で護さんが解雇される可能性があるって訳か。」

エース「そう言うことだ。」

光牙「はあ、本当の敵は腹黒い大人なんじゃないかならうか？」

エース「言うな。私も心底絶望してるよ。」

光牙「じゃあ、そろそろ通信切るな。」

エース「ああ、分かった。」

光牙は念話を切った。

「HR」

マナブ先生「ほーい。HRの時間だ。まず、昨日は大変だったらしいな。」

光牙「何がですか？」

マナブ先生「何かある女子生徒と一般人が不審者に追われたって話があるじゃないか。」

光牙「へーえ。」

命「それは怖い話ですね。」

どう聴いても俺達の話だ。

マナブ先生「その事件は話によると警察が駆けつけた時にはブライズマン・グレイプが全てを終わらせていたらしいぞ。」

影次「結局、正体は分かってないのですか？」

マナブ先生「うーむ、そうらしい。」

樹「どうせなら正体バレして感謝されて贅沢すればいいのにな。」

└

光牙「お前みたいに恩着せがましい人間じゃないんだろう。」

正体がバレるとそれ以上に厄介なんだよ。

樹「何おう！俺が恩着せがましいだと！？」

その時、影次がタイミングを見計らって言った。

影次「樹、あの時助けてくれてありがとう。」

そして樹は

樹「よし、何か奢る＋可愛い女の子紹介でいいよ！」

瞬間、恩返しの話をしていた。

教室内「・・・・・・・・。」

樹「あ、あは、ははは。ま、まあ、そうとも言つ。」

マナブ先生「でだ、次の連絡なんだが。不審な車の方はまだ捕まってないらしい。」

光牙「へっ？でも昨日、不審車とカーチェイスしているパトカーを見ましたよ。」

マナブ先生「ああ、あれはただの窃盗を犯した人間の逃亡車だ。」

光牙「へえー。じゃあ、不審な車と言われている方は。」

マナブ先生「逮捕されてない。話によると奴は少女の拉致監禁をするらしい。」

樹「なんだロリコン犯か。」

命「この中にはそんな子いないね。」

影次「そうだね。」

光牙「・・・・・・・・。」

マナブ先生「どうした光牙？考え事か？」

光牙「いや、何か、不安要素がある気がしてですね。」

マナブ先生「？不安要素？お前がロリコンで仲間に入ってしまったということか？」

光牙「それはあなたでしょ。」

マナブ先生「失礼な。私は少女を見て愛でているだけだ。」

樹「あーあ。あるある。俺も少女を見て愛でてハアハアするは。」

命「それはもう、視姦レベルなんじゃあ。」

影次「逸脱するのは二次元だけにしときな。by 絶。先生のキャラクターより。」

タタタタ、ガラ

思い切りドアが開いた。

1 - A教師「灯閻君はいますか！？」

その男性教師は肩で息をしていた。どうやら走ってきたようだ。

光牙「命。」

それを俺は止めた。

命「あ、……。そうだ。警察は動いているんですか？」

命はうまく誤魔化すような態度だった。

樹「そうだよ。警察はもう追い詰めてたりするんじゃないの？」

1-A教師「今、連絡してその車を追っている。」

光牙「もしかしたら、その車は護さんかも。」

マナブ先生「護さん？何だ光牙、警察官に知り合いでもいるのか？」

光牙「え、ああ一応。」

あつちは俺の正体は知らないけど。

光牙「すいません。俺、ちよつと母に連絡入れます。」

1-A教師「今から連絡するつもりだから大丈夫だよ。」

光牙「いえ、俺から言いたいんです。」

マナブ先生「光牙の言うとおりにしてあげて下さい。」

命・樹「お願いします。」

1-A教師「……。分かりました。」

光牙「えーつと、携帯、携帯……。あつた。」

教室内は緊迫した空気であつた。誰一人話せるような空気ではなかった。

茜「何？光牙？」

光牙「ああ、マザー？」

茜「どうしたのこんな時間に？」

光牙「落ち着いて聴いてくれ。」

茜「？」

光牙「明がロリコン野郎に拉致された。」

茜「……。え、ええーーーー！！！」

茜の奇声は教室内全体に聞こえた。

茜「どうして、そうなったの！？」

光牙「何でも、校門の前で人待ちしていた所を狙われたらしい。」

「茜（警察は？）」

光牙「もう、動いてる。とりあえず、その車を追っているらしい。」

茜「……光牙、分かってるわね？」

光牙「ああ、そのつもりだ。」

マナブ先生・樹「??」

茜「とりあえず、帰ってきなさい。」

光牙「OK」

ピ

俺は電話を切りマナブ先生に言った。

光牙「母がショックで動けない状態になったっぽいので不安なので一応母の側にいます。」

マナブ先生「分かった。気をしっかり持てよ。」

光牙「はい、分かってます。」

影次・樹「光牙。」

光牙「平気平気。明は気が強い方だからな。むしろ、捕まえたのを後悔するはずさ。」

俺は影次と樹にそう言った。

命「光牙君。」

光牙「おいおい、そんな目で見るな。俺は大丈夫だ、って言っても説得力ないけどな。」

マナブ先生「何。光牙の妹だ、犯人も途中で捕まえたのを後悔するさ。」

光牙「俺の妹だとかい。」

俺は速攻で家に帰ることにした。

「屋上」

光牙「よし。誰にも見られていないな。」

光牙は右腕を高く上げ手の平を開けて叫んだ。

光牙「バー。ウ・ファー・ド。グ・ファイターグレイプ!!。」

グレイプ「よしよし。変身完了。」

エース「どうした光牙。いきなり変身して。」

グレイプ「それがな。」

俺は家に向かいながらエースに事情を話した。

「灯闇宅1F ダイニングルーム」

茜「それで、明は？」

グレイプ「まだ分らない。」

茜「エースに聴いてみたら？」

グレイプ「母さん、エースの存在まで知ってるのか？」

その時、俺のスーツの額にある小さく丸いクリスタルの部分から等身大の謎の人物が出てきた。

グレイプ「えっ、誰？」

エース「私だ。光牙、エースだ。」

グレイプ「どういうこと？」

エース「これは私のネット上の電波体だ。」

グレイプ「ああ。なる。じゃあ、何でこの現実世界にいるんだ？」

エース「そのクリスタルは映写機でな。今、ネット上からアクセスしている。」

グレイプ「へえー。」

茜「これが博士の作ったエースね。」

エース「あなたは私の出生を知っているのですか？」

グレイプ「ああ、なんたって、ブライトライズを開発した人間の婚約者だからな。」

エース「どういうことだ？」

茜はエースに俺と同じ説明をした。

エース「私達はブライズ星出身だったという訳か。」

茜「そういうこと。」

エース「しかし、私の記憶が蘇らなければ、武器は使えないまだ。」

グレイプ「そだな、今は生身戦闘しかないけど、またネガティブが攻めてくる確率が高いしな。」

茜「まあ、それは置いといてちゃっちゃんと、明を助けましよう。」

グレイプ「そだな。」

茜「じゃあ、行つてらっしゃい。」

グレイプ「えっ、あの母さん。何で俺を家に呼んだの？」

茜「あっと、忘れてた。エース。」

エース「なんだ？」

茜「明のいる位置をWDFのサテライト（衛星）で確認できない？」

エース「ちょっと待ってくれ。……、東京、練馬、指名

手配逃走車検索、確認。」

グレイプ「どうだ？」

エース「今は、ああ、もう奴らの家の中にいるみたいだな。」

グレイプ「警察は？」

エース「見失ったらしい。」

グレイプ「まじか。じゃあ、すぐにそこへ向かおう。」

エース「ではこの情報は私がインプットしておく。」

グレイプ「おお、目的地への方角が俺の視野に表示された。」

エース「では向かおう。」

エースの映像は途切れた。

グレイプ「じゃあ、母さん、行ってきます。」

茜「いつてらっしゃい。明のこと頼んだわよ。」

グレイプ「まかせとけて。」

「犯人の家」

犯人A「ふーむ、今回の少女は中々良いじゃないか。ロリで巨乳、うーん、そのミスマッチがそるねえ。」

犯人B「それで、こいつはいつ犯すよ。」

犯人A「まだ輪姦は速いな。俺達の手で開発してから売る。」

犯人B「じゃあ、いつ開発するよ。」

犯人A「もう少ししてからだな。」

明「ん~~~~ん~~~~。」

明は縄跳びに使う縄で縛られ、口はガムテープで塞がれていた。

犯人A「この少女、犯行的な目をしているだけで恐怖に煽られていない。これはいけない。少女はもうちょっと、怖がってくれなければ。」

犯人B「そうだな。怖がっている時に優しく介抱してやるんだな。」

犯人A「そういうことだ。」

明「ん~~~~ん~~~~。」

犯人A「それにしてもうるさいな。縛り上げる場所を変えるか。」

└

犯人B「あそこ縛り上げるか。」

犯人A「それは良い案だ。」

明「!!!??」

「犯人の居前」

グレイプ「ここか。」

護「グレイプ君、どうやってここを割り出したんだい？」

護さんを道ばたで拾ってからここにやってきたのである。

グレイプ「まあ、このアーマーの役割です。警察のデータをちよつと覗かせて貰って逃走車のデータが存在しているサテライトに

アクセスして場所を割り出したんです。」

護「へえー、無許可で覗いたのは犯罪だけど、まあ悪用しないなら良いんじゃない。」

グレイプ「話の分かる人で助かります。」

護「どうも。では突入しますか。」

グレイプ「あ、そう言えば、この姿ってもう有名ですかね。」

護「ああ、相当。」

グレイプ「じゃあ、俺が行ったら明が危ないかな。」

護「明？被害者の名前かい？」

グレイプ「えっ？あつ、は、はあ。」

護「グレイプ君、機密保持したいならもつと気を付けることだ。」

グレイプ「はい。」

護「それで、グレイプ君が知っている明さんは何歳なんだ？」

グレイプ「見た目は巨乳ロリなんですけど、……16歳なんです。」

護「見た目で捕まった訳だ。」

グレイプ「はい。」

護「どう助けようか。……あの麻酔銃ってまだあるかい？」

グレイプ「ああ、レムガンのことですか？」

そう言っただけ俺は右手にレムガンを召喚した。

護「うお、そうそれ。」

グレイプ「単身で突入して明を助けると？」

護「いや、そうじゃない。子供だけに任せる訳には行かない。」

グレイプ「おお、珍しくまともな大人だ。」

護「ふふ、ありがとう。よし、作戦を言っ。」

「犯人の家」

犯人A「素晴らしい!!」

犯人共は明を十字架に縛り付けていた。

犯人B「このスイッチを押せば完了だ。」

ポチ・・・ブブブブ

明「?・・・!!」

明はその謎の振動音に目をやった。

犯人A「十字架に縛り付けられている少女!迫ってくるバイブ!少女の口に近づいてくる我々の種子!最、高だ!!!ああ、興奮してきましたよ」。後、1時間でくっつくという恐怖感!!たまりませんねえ~~少女を穢すというのは~~!!」

男はもはや乱心状態だった。その姿を見て、そして1時間後の恐怖で明の顔は涙目になっていた。

犯人A「なおかつ!!この状態で口のガムテープを剥がす!!」

犯人B「オラ!!」

ビリ

明「痛!!」

犯人A「ん~~~~いいですよ良いですよ~~~~!!痛がる少女、その涙目~~。はあ~~犯すまでの時間がもつたないくらいです。早く速く早く速く早く速く早く速く早く速く早く速く早く速く~~~~!!」

男は自分の趣向に酔っていた。明はたまらず右に顔を逸らした。

明「!!」

明は目にしてしまった。男の液まみれになっている5歳~12歳ぐらいの女の子達を。

明「あ、あ、ああ。お、お兄ちゃん。」

犯人B「お前と組んでるのは少女を犯せるからだからな。早くやろうぜ。」

犯人A「お前はもうちょっと余興を楽しんだらどうです?」

ピピ~~~~

その時、バカでかい笛が鳴った。

犯人B「何だ!？」

犯人A「窓を覗いてみなさい。」

犯人達は窓を覗き笛の出所を見た。

護「は〜〜い、そのロリコン二人組、出てきなさい。さもないとRPGで吹っ飛ばしますよ〜〜。」

そこには犯人を説得?している拡声器を持った護がいた。

護「おい、顔覗かせてるのがバレてるんだから、話ぐらいしようや〜〜。」

ガラ

犯人B「うるせえ!!俺達は何もやってねえつての!」

明「・・・・!!」

護「でも、君たちの部屋から毎晩毎晩、あえぎ声がするって近隣住民は言ってるわけよ。ちよつと家宅捜査させてくれないかな〜〜?」

犯人A「あのねえ、あえぎ声なんて出してる訳無いでしょう?嘘も大概にしなさい!」

護「いや〜でもさ〜。あえぎ声でなくても、変な声がして不気味がつてる人がいる訳よ。その音源を確かめなきゃいけない訳で〜。」

犯人B「何なんだ?あの警官は?」

???「Freeze(止まれ)。」

犯人A・B「!?!?」

二人は窓の外にいる護さんに気を取られているため、家に突入した俺の存在に気がつかなかった。

グレイプ「Take your hands(手を上げろ)」

俺は見よう見まねで銃を構えていた。

犯人A・B「・・・・。」

二人は窓の方を向いたまま静止していた。

グレイプ「軍隊用語は通じないか?手を上げる。」

犯人B「・・・・ね。」

グレイプ「えっ？」

犯人B「死ね。」

犯人の着ていたコートに拳銃が入っていたのを気付いてなかった。

パーン・キン・コロコロ

薬莢が落ちる前に弾かれる音が聞こえた。

護「あっちゃ〜あ、撃たれちゃったよ。これは始末書ものだな。まあ、説得する気はさらさらなかったけど。」

グレイプ「残念でした〜」

犯人B「!？」

二人は焦って振り向いた。

犯人A「こ、こいつは、テ、テレビに出ていた。」

こいつらには俺を怒らせたことを

グレイプ「相手が悪かったねえ。俺にはPb（鉛の元素記号）

弾は効かないんだ。」

光牙の声は怒りに燃えていた。

犯人B「あ、あ、あ、あ。」

後悔させてやる。

グレイプ「死にさせ〜」

バキ、ドカ、ベキ、ドコ、ズガ、プチ、グシャ、メキメキ、

ドンガラガッシャーン

護「何やってるんだ？あの音？もう麻酔銃の意味無いですよ。」

「

そしてその怒りの殴打は10分にまで及んだという。

グレイプ「ふう。スッキリした。」

犯人の二人は倒れて痙攣していた。

明「お兄ちゃん！！助けてえ！！」

グレイプ「へっ？ああ！わ、悪い。すぐにそんな装置叩き壊すからな。」

犯人A「あ、あ、あ、あ、あ。」

グレイプ「悪いねえ〜。君にはもう一働きしてもらつよ。」

光牙は犯人の一人（Aの方）の両足を抱えた。そして

グレイプ「デッッ。ライ。〜ング！」

犯人を思いっきり振り遠心力により犯人をバット代わりにした。

ベバキヤ

機械は粉碎はしなかったものの動きは止まった。

グレイプ「うゝゝん、何か凄い音が鳴ったけど気にしない気にしない。とりあえず動力装置は壊れたし、良しとしよう。」

そして使えなくなったバット（犯人A）をそこら辺に捨てて俺は明に近づいた。

グレイプ「今、降ろしてやるからな。ほっ、よっ、外しくいなあ。・・・よし、取れた。大丈夫か？明？」

明「・・・・・・。」

グレイプ「明？（ハッ！？この表情的に！！）」

明「怖かったよゝゝお兄ちゃゝん！」

抱きつかれた。そして泣いた。いままで我慢していた分を開放するかのよう。

やっぱり泣いちゃったか。相当怖い目に遭ったんだな。ふう、何事もなく良かったぜ。

明「私、あの子達みたいな目に遭うかと。」

明は泣きながら指を指した。

グレイプ「へっ？あの子達？」

俺はそこに明を無理矢理おんぶしてそこに移動した。

グレイプ「うおっ。ってなんだよ。そんなか。」

こんなギャグストーリーでおかしいと思ったよ。こんな話の重いエロゲー展開。

明「そんなって？」

グレイプ「良く見てみる。コレは、ロリコン御用達のエロ雑誌のポスターだ。」

明「えっ？」

グレイプ「しかもコレ、合成画像だな。違和感バリバリだ。 2

Dならまだしも、にしても現実でこんなことをしようと思うなんて正気じゃないな。」

明「本当？」

グレイプ「ああ。大丈夫、これは画像だ。……（あれ？でもこいつら幼女を拉致監禁しているって話だったよなあ？明だけなのか？）。」

おかしい。辻褄が合わない。

グレイプ「もしかして隠し部屋があるんじゃないあ。」

明「え？」

グレイプ「お、やっと泣き止んだか。ちよつと、降ろすぞ。」

明「へっ？……あ、あ、お、おんぶ、だったんだ。」

明の顔が赤く染まっていた。そして光牙は明を降ろした。

グレイプ「もしかしてこのポスターの裏。」

ビリビリ

グレイプ「おいおい、本当に隠し部屋があったよ。」

俺はその部屋に入ってみた。

グレイプ「！？」

俺は奴らのやってきたことを目の当たりにした。

グレイプ「……。」

光牙は赤面した。そう5、6歳の幼女複数人がいた。そしてある子はメイド服姿でウインナーをしゃぶり、ある子はチャイナ服でバ。プをロー。ヨンまみれの手でしごき、ある子は体操服ブルマで男子の名前が書いてある笛を舐め、ある子は旧スク水（スクール水着）でビート板を股に挟んで秘部にくい込ませ、ある子はランドセルを背負った子が筆箱で下着の上からオ。ニーしていた。

グレイプ「ここは、パライソ（天国）かパラダイス（天国）かヘブン（天国）、それともアズガルド（北欧神話に出てくる神の世界）なのか？」

犯人A「フ、フフフ、ど、どうですか？私のマイベスト、シチュエーションは？」

グレイプ「うお!？」

俺は慌てて後ろを向いた。

犯人A「私の夢の世界。どうでしょうか？」

彼は床を這いながら、俺に近づいてきていた。明はびっくりして
いて言葉もでなかった。

グレイプ「あんたしぶといな。」

犯人A「伊達や酔狂で犯罪を犯している訳ではないですから。」

グレイプ「あのなあ、これ以上はやってないんだろうな？」

犯人A「やっていません。もう少し時間が経ってから楽しもう
と思ったんです。」

グレイプ「じゃあ、彼女達はあんなことしてるけどもあれしか
やってないんだな？」

犯人A「はい。相方は今回の拉致監禁作戦から入ったのでこの
部屋が存在知りません。」

グレイプ「ということは、今回の目標にあんなことをやらせた
後に。」

犯人A「そう、この子達と共に私色に染めるつもりでした。」

グレイプ「ふう、とりあえず他の女の子も無事？ってことが。

はあ、でも変な性知識を植え付けられたなあ。」

犯人A「あなたもどうですか？」

グレイプ「……………」

犯人A「いいですよ。幼女を染めるのは、どんな娯楽よりも最
高です!さあ、あなたも。」

グレイプ「うつさい。」

バシユ

犯人A「はう。……zzzzzz」

グレイプ「ふう、酷いもんだな。にしても、やっぱり男は性に
自制できないとヤバイな。俺もこれからより一層気を付けよう。」

明「お兄ちゃん?こ、この子達どうするの?」

グレイプ「そっぴゃあ、こんなに騒いでるのにこっちを見向き

もせずに快樂を求めているしなあ。．．．．良し。」

明「お兄ちゃん？」

俺は大声を出して言った。

グレイプ「君たち、もう大丈夫だよ。もう怖いお兄さんは退治したから。」

少女達「！！」

グレイプ「だから君たちは家に帰ることができるんだ！だからちよつと、僕に付いてきて。」

少女達「！！」

少女達は首を縦に振った。

明「お兄ちゃん。」

グレイプ「帰ろうか。」

明「うん！！」

明は今日一番の笑顔で返事した。

第5話「BIG BUST INFANT

G I R L D A N G E R O U S S M E L L 〽巨乳口りは危険な香り〽」 f i n

第5話「BIG BUST INFANT GIRL DANGEROUS」

これは15なのかそれとも18なのか定かではない。とりあえず伏せ字にしよう。

そして気になる次回予告！！

次回！！光天成ブライトライズ第6話「俺、この戦争が終わったら、結婚するんだ。」にライズアップ！！

第6話「UNEMPLOYMENT ROAD」失業への道（前書き）

とりあえず、凶悪犯罪者をフルボッコにした光牙。これから一体どんな敵が待ち受けるのか。作者はどうやって話を書けばいいのか。それは誰にも分からない。

第6話「UNEMPLOYMENT ROAD」失業への道」

俺は明と他に監禁されていた少女達と共に外に出た。

ボタン

ドアを開けた瞬間、眩しい光が降り注いだ。

太陽の光。

カメラの光。

えっ？カメラ？

第6話「UNEMPLOYMENT

ROAD」失業への道」

「犯人の家 前」

記者A「おおっ！出てきたぞっ！！」

女性レポーター「ご覧下さい！！またあのヒーローが凶悪犯罪を一つ解決してしまいました！」

護「おっ！いい。こっちこっち。」

護さんが手を振っていた。良く見ると護さんの周りにはパトカー数台が止まっていた。そしておその後ろには『KEEP OUT』のテープが張り巡らされていた。

グレイプ「あの護さん、この騒ぎは一体？」

護「ああ、俺が救援を呼んだらな、この事態だ。全く、暇だよなあマスメディアは。」

少女達「……………」

少女達は記者やレポーター達の好奇心な目に怯え、光牙にしがみついていた。

グレイプ「あちゃあ。これは不味いな。」

俺はその場で言い放った。

グレイプ「すみません！この子達が怯えているんで、関係者以外寄らないで下さい。」

記者B「おお〜。喋ったぞ！！」

女性レポーター「皆さん！お聴きましたでしょうか！？日本語です！日本語で彼は私達に呼びかけしてきました！！」

よりいっそうフラッシュが焚かれた。

グレイプ「あの〜。聴いてます？」

女性レポーター「彼は日本人なのでしょうか！？それとも外国人なのでしょうか！？」

グレイプ「お〜い、日本語通じるんなら意味を汲み取ってくれ〜。」

護「無駄だよ。グレイプ君、あいつらは空気を読むことができないんだ。」

グレイプ「まあ、知ってますけど。」

そうニュースではよくあることだ。大地震の被害者に関係者は死んだのかとインタビューしたりする辺り相当空気を讀まない。

グレイプ「この子達どうしましょう？」

護「ちよつと待っていてくれ。そろそろ、親族の方が来るはずだ。」

グレイプ「そうですか。」

護「それで、犯人は？」

グレイプ「ああ、家の中にフルボッコにしたままです。」

護「ああ、放置してるのね。よし、みんな捕まえに行ってくれ。」

「

隊員「サー、イエッサー！！」

グレイプ「なぜ、軍隊用語なのか。」

女性レポーター「おっと、今警官が中に入っていました。犯人でも捕まえるのでしょうか。しかしあのヒーローだよりとは情けない。」

グレイプ「ちつ、勝手なこと言いやがるな。」

護「まあ仕方ない。よくあることだ。」

グレイプ「納得行かないなあホント。」

隊員「犯人、確保しました!!」

護「よし、連れて行け。」

隊員「サー、イエッサー!!」

グレイプ「護さんって本当に隊長なんですねえ。」

護「それはどういう意味かな？」

グレイプ「いや、凄いなあ。って。」

護「超人なことが出来るのに私が凄く見えるのか。ハハハ。」

グレイプ「いや、だって、信頼が無いと隊長なんて出来ませんよ。凄いです。」

護「ハハハ、ありがとう。」

グレイプ「じゃあ、これで・・・うん？」

少女達はすっかり俺を頼ってしまっているので俺にしがみついたまんまだった。

グレイプ「護さん。すいません、毛布はありますか？」

護「ああ、そうだった、すまない。忘れていた。」

俺は毛布を受け取り少女達に掛けてあげた。その仕草仕草でフラッシュが焚かれるの言うまでもない。

護「おっ、来た来た。」

親族が泣きながら自分の娘の名前を叫びながら駆け寄った。

グレイプ「良かった良かった。うん？」

茜「明～～!!」

グレイプ（か、母さんまで。）

明「お母さん!!」

母さんと明は他の家庭と同じように抱きついて、自分の親と子の存在をそれぞれ確認するかのよう泣きながら抱擁していた。

グレイプ「いやはや、本当によかよか。」

護「関係ないが、明ちゃんの親族は兄もいなかったか？」

グレイプ「ギク!!」

護「おかしいなあ。被害者家族全員で来るようになって連絡したのになあ。」

グレイプ「や、やばい。そんなの予想してなかったぞ。普通、そんな連絡しないんじゃないか？」

護「まあ、色々大変なんだろ。」

護さんは意味深な目で俺を見ていた。

グレイプ「な、何ですか？」

護「いや、兄も大変だなあって。」

グレイプ「はいはい。そうですよ。俺の正体はその兄ですよ。」
俺は護さんにしか分からないように声を潜めて言った。

護「これからよろしくな、灯闇 光牙君。」

グレイプ「正体バレ早いなあ〜。」

護「だから言っただろ？気を付けろって。」

グレイプ「はい。気を付けます。」

護「さ、そろそろKEEP OUTを解除するぞ、帰った帰った。」

グレイプ「ありがとうございます。」

護「何、良いつて。それに正体は一部の人間にしか知らない方が燃えるしな。」

グレイプ「ハハ、確かに。」

俺達は笑いあった。

保護者「ありがとうございます。」

少女達「ありがとう、ヒーローのお兄ちゃん。」

グレイプ「いやいや、できることをしたまでです。」

茜「本当にどんな礼をすれば良いやら。」

グレイプ「ハハハ、じゃあいつか正体がバレた時にでも精一杯礼を貰いますよ。」

明「……………」

グレイプ「じゃあね。可愛い妹さん。」

明「うん!!」

グレイプ「じゃあ、俺はこれで。」

記者達「えっ!!」

女性レポーター「待って下さい!!」

グレイプ「アディオス!!」

ダン

俺は思いつきり地を蹴り上げ空へと消えた。

オーディン
「WDF本部 司令室」

ライル「……………」

WDFの司令官ライルは秘書のサーニヤと共にニュースを見ていた。

女性レポーター「彼は一体何者なのでしょうか？もはや警察の
いらない超人。彼はどんな人間なのでしょうか？私達はこれからも
彼を追い続けていきたいと思います。」

ピ テレビの電源を切った。

ライル「すごい活躍だな。彼は。」

サーニヤ「そうですね。目立ちすぎです。」

ライル「まあ、目立ちすぎではあるが、それは致し方無いとい
うものだ。」

サーニヤ「はあ。」

ライル「やはり彼には後にWDFに入隊して貰いたいな。」

サーニヤ「そうですね。」

ライル「しかし、少年なのが心痛むがな。」

「???? ネガティブの基地」

イルワ「……………」

ネガティブの幹部イルワはやたらプルプル震えていた。

女性レポーター「ここで臨時ニュースをお伝えします。」

イルワ「ふざけるなあ!!」

チュドーン 雷が落ちた音

ルーク「どうしましたか？」

イルワ「臨時ニュースのせいで、ゴールデンタイムのアニメが消された~~~~!!」

ジュン「な、なるほど。」

イルワ「ちくしょ~~~~~~~~!!」

ルーク「……………」

イルワ「くそう。ネガティブ（私）の怒りを買った奴がどうなるかいつかその身にたたき込んでやる!」

ジュン「く、くだらねえ。」

イルワ「今何か言ったか？」

ジュン「ななな、何でもございませ〜ん。」

「地方警察署 長官室」

光牙が事件を解決した後。

護「何でしょうか長官。」

捜査官兼小隊長である護は長官に呼び出されていた。

長官「君を呼び出したのは他でもない。最近の警察、特に君たちの隊についてだ。」

護「と言いますと？」

何かやらかした覚えは護には無かった。

長官「知らん風に言うな!! なんだあのニュースは!？」

護「ニュース、ですか？」

長官「しらばつくれるな!! マスメディアにかなり叩かれているではないか。え!？」

護「と言われましても。」

長官「お前達は何で飯を食ってると思っているんだ。」

護「公務員ですから。まあ、国民が払っている税金ですよね。」

長官「分かっているなら、なぜそれ以上の仕事が出来ない!?」
護「それは。」

長官「最近はある訳の分からんヒーローに見せ場を持って行かれ、私達は無能扱いだ。」

護「はあ。」

長官「それもこれも、お前らの気合いが足りんせいだ!! いい加減死ぬ気で仕事したらどうだ!」

護「お言葉ですが、私達の隊員はいつも死を覚悟して仕事に挑んでいます。」

長官「何だと? 貴様、どの口がそう言うのだ。」

護「……………」

長官「それなら成果の一つや二つでるだろう!! 言い訳してるんじゃない!!」

護「我々は国民の安全を第一に考えていますので、成果が出なくても、被害は最小限に押さえているつもりです。」

長官「国民の安全?」

護「はい。」

長官「そのような問題より先に顔を立てるために犯人を追い詰める!!」

護「お言葉ですが、今の長官の発言では国民より活躍する事を優先しているように思えますが。」

長官「その通りだ。その何が悪い? 活躍できなければ私の立場もあつたものではない。」

護「……………(こいつ、腐ってやがる。実戦に参加したくない事務長官が。)」

長官「何か言いたそうだな。」

護「いえ、何も。」

長官「そしてだ。私にも仏の心がある。」

護(ねえよ。)

長官「貴様らの小隊は次の事件で活躍出来なかった場合、除隊

とし、警察をやめてもらう。」

護「な!？」

長官「不服かね? 今追い出さなくていいのだぞ? むしろ感謝されたいものだ。」

護「私に責任があるのは分かります。ですが、他の隊員達にまで。」

長官「関係ない。連帯責任だ。他の者への見せしめもあるからな。特にマスメディアには。」

護「……………(耐えろ。耐えるんだ俺。今暴れてしまえば全て終わる。)」

長官「私はな。ここで終わるつもりはない。こんな地方の警察署ではなく本部にまで登り詰める才能の持ち主なのだ。貴様もここで終わるわけにはいくまい。」

護(この世の中。本当の敵はこんな腐った人間な気がする。こんな税金泥棒の下に付かないといけない俺達隊員はどうしたらいいんだか。)

護は隊の人間にそのことを伝えるに長官室を出た。

「灯闇宅1F ダイニングルーム」

光牙「ああゝゝ、ちかれた(疲れた)。ただいま。」

明・茜「お帰りなさい。」

光牙「いやゝ全く、今日は大変だったなあ。」

明「本当にありがとう。お兄ちゃん。」

光牙「いって、俺からしたら明が無事で良かったんだから。」

明「お兄ちゃん。」

明の頬は薄く赤く染まっていた。

茜「そう言えば光牙、今、疲れたって言ってたけど大丈夫なの?」

光牙「ああ、言いたかっただけ。変身できるようになってから

俺の体力がかなり上がったから。平気。」

明「便利だね。」

光牙「本当にな。」

茜「よし。今日は腕によりをかけて夕ご飯作るわよ。」

光牙「お、それは楽しみだ。」

明「私も手伝う。」

光牙「おいおい。無理するなよ？あれの後なんだから。」

明「お兄ちゃんにお礼がしたいの。」

光牙「まあ、そこまで言うならいいけどさ。」

そして俺達は仲良く飯を食って寝た。

「灯闇宅2F 自室」

光牙「zzzzzz」

明「おつはよう。お兄ちゃん！って、まだ寝てるよ。よし、いつも通りって言ってもお兄ちゃん、このごろ大変そうだし、なんか違う起こし方ないかなあ？」

明は考えた、よく考えた。

明「慌てない慌てない。一昔一昔」

と一休さんをマネしながら。

明「そくだ！」

ピカ

明の頭上に豆電球が飛び出した。

明「で、では早速。」

明はベットの横に移動した。

明「お兄ちゃん、おつきして。朝だよ。」

ゆさゆさ

光牙「うん、後5分。」

明「ねえ、お兄ちゃんってばあ、おつきして。」

ゆさゆさ

光牙「zzzzzz」

明「おつきしないと、大変なことしちゃうからね。」

光牙「zzzzzz」

明「ほ、本当に、たた、大変なことしちゃうんだからね。」

明は何を考えているのか、どんどん頬が赤くなっていた。

明「……、ダ、ダメだ。とてもじゃないけど、目覚めのききき、キスなんてできないよ。」

光牙「zzzzzz」

明「で、でも、寝てるし。……。いや、やめとこ。」

光牙「zzzzzz」

明「そ、そうだ。お兄ちゃんの敏感な所を……。」

さわさわ

光牙「う、うう。」

明「ほ、ほら、早く起きてよお。お兄ちゃん。」

光牙「あ、明？」

俺は目を覚ました。そして俺は驚愕の映像を見てしまった。

明「起きたの？お兄ちゃん？」

明の奴、俺の脇を突いていた。どうりでくすぐったい訳だ。

光牙「夢、だな。」

明「えっ？」

光牙「ああ、D……。？の。夢ならフ。ラしてくれたのになあ。

惜しい夢だ。なんだなんだ、次は命のフ。ラか？それともリープのパイ。リか？はあ、俺も溜まってんなあ。」

明「な、な、ななな。」

光牙「zzzzzz」

明「……。」

明の周りから深紅のオーラが放出されていた。

明「神。烈空斬光。風滅。神伐。殺撃――――――――――

――！！」

光牙「にやあああ~~~~！！」

8 Hit!! 敵を倒した。 RESULT

経験値 5 + COMBO BONUS

2 ガ。ド 10 GRADE 2.10

獲得アイテム 灯闇の肉塊 グ。ー プグ

ミ フ。アリイリ。グ

称号取得 明は『USER KILL』

を手に入れた。

料理 『み。おでん』 HP / TP 10

0%回復、状態異常回復

明「あつ。お、お兄ちゃん？」

光牙「……………」

その後、光牙の姿を見た者は誰もいなかった。

「3 - A 教室」

光牙「いつつつつ。」

樹「さつきから何を痛がってるんだ？光牙？」

光牙「妹に朝起こされる時にいつも以上の威力で起こされた。」

影次「ええ！」

影次のびっくりもうなずける。本当に痛かったからな。

命「明ちゃんに。」

リープ「起こされてる」

ドール「つだとお！？」

光牙「あ、そつち。」

(。D。) ハ！殺気！！

樹「光牙……。お前、あんなに可愛い妹に起こされているだ
とお……。？」

(。D。) ガクガクブルブル

樹・明ファン「ゆるさんぞ……。」

(。ω。、) こいつあ、またこのパターンだお。

命「光牙君の寝顔可愛いのかなあ。」

リープ「見てみたいものですね。」

影次「あ、あのお二人さん？」

樹・命、リープファン「貴様」。その二人にまで毒牙をくく。

（。ω。、）なんか、規模が大きくなってるお。

ドール「あっちゃあ、フォローできんなこれは。」

（。ε、）もうどうにでもなれだ。

樹「野郎共、こいつが憎いかー!？」

ファン共「オオーーーーー!!!」

ガラ

マナブ先生「おあい。HRまでには済ませとけよ。」

光牙「ええ〜〜〜!!!止める義務があるだろうよ。あんたは!？」

マナブ先生「イジメは発覚しませんでした。」

光牙「どこの自殺した生徒の学校の言い訳だよ!!!」

マナブ先生「（。）。旦茶飲め。」

光牙「微塵も関係ねえ!？」

そして俺はHRが始まるまで走らされた。

「保険体育の授業」

マナブ先生「つーことで今回は担当の先生がお休みなので俺が来たわけだ。」

光牙「危険な臭いがプンプンするぜ。」

樹「授業の続きからだと思事に性教育だからな。」

マナブ先生「光牙と影次の場合、教えて!唯。先生をやっているから習わなくても大丈夫だろ。」

光牙「失礼すぎる。」

影次「そう言うことは言わんでよろしい。」

マナブ先生「何となくだ。」

光牙「何となくで社会的評価を下げないで欲しいものですね。」

影次「うんうん。」

マナブ先生「良いだろう。俺もやってその知識を教えるんだから。」

光牙「ええー!!」

マナブ先生「はい、つーことで今回はDVDを見る。」

影次「ま、まさか。」

マナブ先生「教えて！唯。先生のプレイ動画だ!!」

命「あのーそれはセクハラになるのでは？」

マナブ先生「さあ〜？」

樹「エロ動画だろ？早く見ようぜ!!」

樹が一番興味があったらしくやたら興奮していた。

光牙「違うー!!性教育動画だ!!」

影次・マナブ先生「唯。先生に謝れ!!」

樹「ごめんちゃい。」

その時だった。

ズズーン

学校「・・・・。」

光牙「今凄く嫌な音を聞いた気がするんだけど？」

マナブ先生「奇遇だなあ。俺もそんな音を聞いた。」

影次「ですよねえ。なんか3日ぐらい前に聴いた感じがしますよねえ。」

ピンポンパンポン

教頭先生「ただいま、テロが発生しました。教室で待機して下さい。繰り返します。」

光牙「まさかの爆発!？」

教頭先生「ただいま、家庭科室、理科室が爆弾により爆破されました。」

影次「家庭科室に。」

命「理科室？」

樹「なんでまた。」

光牙「……！！（待て、理科室だと？やばくないかそれ、化学薬品が引火したりして有害物質を撒き散らしたりしたら。）」

マナブ先生「いいかみんな！絶対にここを動くんじゃないぞ！」

光牙「先生！理科室つてどのクラスが近くにありますか！？」

マナブ先生「俺達が今いるこの教室が一番近い。」

ざわ・ざわ・

マナブ先生「落ち着け！大丈夫だ！」

校長「皆さん、理科室の発火により引火を引き起こし爆発するかも知れませんが、ですがいつもと同じ訓練みたく避難すれば助かります。」

光牙・影次・命・マナブ先生「！！（そんなこと今言ったら。）」

クラスメイト「うわーーーーー！！！」

マナブ先生「おい、お前ら、廊下に出るな、おい！！！」

教室には光牙、影次、命、樹、マナブ先生が残っていた。

ガラ

ドアが開いた。

リープ「光牙様！！！」

ドール「先生、3・Bも今の放送で俺達以外勝手に逃げました！！！」

マナブ先生「おいおい、生徒を最優先だろう。」

マナブ先生は呆れていた。

「学校前」

警察の部隊が待機していた。

護「爆弾処理隊点呼！！！」

隊員A「1」

隊員B「2」

隊員C「3」

護「長官。点呼終了しました。」

護は通信機を使い長官と連絡を取っていた。

長官「うむ。よろしい。貴君ら爆弾処理隊はすぐさま爆弾を処理しろ。」

護「えっ？あの、場所は特定出来てないのですか？」

長官「そんなの分かるわけないだろう！さっさと探して処理。

そして犯人逮捕だ！」

護「犯人逮捕は他の部隊が。」

長官「人手が足りないんだ。貴様らで全てを完遂しろ、以上。」

護「ちよつと待って下さい。犯人が発砲してきた場合は？」

長官「何とか殺さないように捕まえろ。以上。」

プツ

護はため息をついた。

隊員A「私達は奴の捨て駒ですかね。」

護「ああ、全くだ。しかし死人を出すわけにはいかない、行く

ぞ。」

隊員「ラジャ！」

「校舎1F 廊下」

タタタタタ

護達は爆弾処理と人命救助、そしておまけの犯人逮捕のため走っていた。

護「俺は爆弾処理専門じゃないから部隊を分ける。」

隊員「ハッ！」

護「人命救助は俺一人でやる。お前達は爆弾処理を手分けして行ってくれ。」

隊員「了解！！」

護「では解散!!」

隊員達は爆弾のありそうなところに走っていった。

護「よし、俺はクラスを回ろつ。そして脱出ルートを確保する。これだな。」

護は理科室の近い3年のクラスから回っていった。

「校舎3F 3-A」

光牙「それで、どうします?」

マナブ先生「脱出するしかないだろ。」

樹「どうやって?」

光牙「脱出するなら……どうしようか。」

変身するのでもいいけど。バレちゃうしなあ。

命「光牙君。」

リープ「光牙様。」

光牙「うん、悩んでる。」

理科室はすぐ近くにある。やっぱり悩んでられないよなあ。

ガラ

護「君たち!今すぐにここから逃げるんだ!!」

光牙「護さん!?!」

護「ああ光牙君!君がいれば何とかなりそうだ。」

マナブ先生「へっ、何で光牙がいると何とかなるんですか?」

光牙「影次、樹、ドール、先生、良く見ていてくれ。」

俺は呟いた。

光牙「変身。」

俺はブライアーマーを装着した。

グレイプ「ブライズマン・グレイプ。」

影次「なっ!?!」

樹「光牙が」

ドール「変身した。」

マナブ先生「嘘だろ？」

グレイプ「説明は後で必ずします。それとこれは秘密ですから俺や護さん、明、命、リープ以外に言わないで下さい！」

4人は頷いた。

護「光牙君、悪かったな。俺が不注意ばかりに。」

グレイプ「いえ、気にしないで下さい。変身が悩んでましたから。逆に決意できました。」

護「そうか、ありがとう。」

グレイプ「エース、聞こえてるよな。」

エース「ああ、聞こえてる。」

映写機からエースが出てきた。

影次「え、え、え？」

樹「何だ何だ何だ！？」

ドール・マナブ先生「……………」

護「相棒、なのかい？」

グレイプ「ええ、まあ。後で説明します。」

エース「それで、私に何をさせたいんだ？」

グレイプ「テロリストは未だに学校にいるのか？」

エース「場所は分からないが生体反応がある。恐らくいるな。」

グレイプ「場所が分からない原因は？」

エース「火事による煙だ。」

グレイプ「護さん、消防車は来てるんですか？」

護「実はまだ、来ていないんだ。」

グレイプ「くそ。生徒の避難状況は？」

護「まだ全然済んでいない。」

グレイプ「じゃあ教師は？」

護「嘆かわしいことにそこにいる教師以外は全員外に。」

マナブ先生「ゴ、ゴミ過ぎる。」

護「だからとりあえず、私は引き続き脱出ルートを確保し避難させる。君はここにいる人間を頼む。」

グレイプ「分かりました。」

影次「でも、光牙、どうやって抜け出すつもりだ？」

グレイプ「窓」

樹「はい？」

グレイプ「俺が一人づつ担いで窓から飛び降りる。」

マナブ先生「なるほど。」

俺はとりあえず窓を開け、みんなを担ぎ避難させた。

「校庭」

グレイプ「これで最後つと。」

俺はマナブ先生を降ろした。

マナブ先生「ありがとうな。こ、」

マナブ先生は教師共が避難していたのに気付き、俺の名前を自重した。

マナブ先生「グレイプさん。」

グレイプ「いえいえ、それでは私は引き続き救助に移ります。」

命「頑張つて下さい。」

リープ「はぐれた光牙様を絶対見つけて下さい。」

グレイプ「分かってます。（ナイスだリープ。）」

校長「なんとお礼を申したらいいか。」

グレイプ「……。」

俺は校長を睨み付けシカトして学校へと戻った。

「校舎3F 廊下」

護「まずはこの階の脱出ルートを確保しなければ、にしてもな
んでこの学校は火災避難が全く施されていないんだ？ ずさんすぎる。」

タタタタタ

護「にしてもテロが身近で起きるなんて。」

護は廊下を右に曲がったその時。

テロリストB「！」

ダダダダダダダ

護「ちよつ。」

護はすぐに曲がつてきた道に隠れた。

護「まじかよ。（テロリストとご対面とはな。）」

護は壁からチラッとテロリスト達を見た。

護「！！」

3年生と思われる人間が全員いた。どうやら捕まっているようだ。

護「そう言えば、光牙君の友達と担任しかいない状況だったな。ということはさっき聞こえた校長の空気の読まない発言で焦って逃げようとした子達か。」

撃ってきた奴はアサルトライフルのAK-47を携帯していた。そして数は2人。もう一人のなぜかロングコートの男の武器はハンドガンのカトラスだった。そして子供たちは大縄で縛り上げられていた。

テロリストA「どうしました！？」

テロリストB「あそこから警官が曲がってきた。」

テロリストA「何ですって！？まあ、この状態なら奴も動けないでしょう。その人には絶望を聞かせてあげましょう。」

マイクの電源を付けた。

ブツ

護「？」

学校についているの大きいスピーカーに電源が入った。

テロリストA「えーっ、テストス。」

「校庭」

マナブ先生「何だ？」

「校舎1F 玄関」

グレイプ「スピーカーに電源が入ったのか？」

エース「それだけじゃない。警官の通信機をジャックしている。」

グレイプ「割り込んでるのか。でも、なんで？」

「校舎3F 廊下」

テロリストA「たった今、我々バットブラッドが各学年の生徒を人質にしました。」

護「！？（バットブラッドだって！？）」

テロリストA「私達の目的は二つ、まず一つは金とWDFの技術。そしてもう一つは快感です。」

護「？。」

テロリストA「この緊張感だ。……、フッフ、ンフッフ。」

護「？。」

テロリストA「ヒャーーーーーハッハッハッハ！たまりませんねえ。人を大量に殺せる状況で脅すというこの緊張感！……とても気持ちが良い！！興奮すぎて今にも逝きそうです！！この喜び、そうそうありません！！これですよ、これですよ！！」

テロリストB「あの、『クルーエル』ブラッドマン』隊長。」

クルーエル「黙りなさい。」

パーン

テロリストBの額に紅い穴が開いた。

護「！？（み、味方を殺しやがった！？）」

クルーエル「全く、人の余興の邪魔をするからです。」

生徒「あ、あ、ああ。」

クルーエル「おーつと声を出して泣かないで下さいねえ。まだ死にたくないでしょう？」

クルーエルは泣きそうな生徒の額にカトラスの銃口を当てた。

クルーエル「良いですねえ。その泣き顔、非常にそそる。おつと、お話の続きをしましょうか。」

クルーエルはマイクを持ち直して話を再開した。

クルーエル「これぐらいではWDFは動いてくれないだろうか。これはほんの余興です。そう、私の充実な一時と見せしめのためのいわばプレゼンテーションなんですよ!!」

護「くつ、どうすれば。」

クルーエル「ここに時限爆弾のスイッチがあるんですよ。これを押すと、即座に爆発します。」

護「や、やめろ!!お前も死ぬんだぞ!？」

クルーエル「私にはネガティブから譲って貰ったバリアがあるんですよ。ここににいるぐらいじゃあ、死にません。」

護「な!!」

クルーエル「では、」

クルーエルがスイッチを押そうとした時だった。

???「まってえーい!!」

クルーエル「!？」

その者はクルーエルの後ろの通路から歩いてきていた。

???「自分の快樂のみを考え」

コンコン

その距離はどんどん詰めていた。

???「人の生の道を踏み倒す者」

その姿が止まった。

???「人それを、『外道』という。」

クルーエル「何者です!？」

???「貴様に名乗る名前は無い!!」

???「来い!!光よ!!我に力を与えたまえ!!!!!!」

！」

その者は変身した光の使者に。

クルーエル「き、貴様は!？」

グレイプ「光よりの使者、グレイプ参上!!」

エース「わざわざ変身解除してからやるなよな。」

グレイプ「うるさい!せつかく口。兄さんマネが決まったのに野暮なこと言うんじゃない!!」

クルーエル「ほう、あなたが噂のヒーローですか。」

グレイプ「分かてるなら結果も分かてるだろ。除装しろ!」

クルーエル「この私が除装?残念ですねえ。お別れです。」

グレイプ「?」

クルーエル「ドカーン。」

グレイプ・護「げ!!」

ポチ

・・・・。爆発しない?

クルーエル「ハハハ、フフフ、ヒャーーーーハッハッハ

ッハ!!残念、爆発はしない仕組みでしたー!!」

グレイプ「こ、こいつう。」

クルーエル「その怒った顔、最高ですねえ。そそりますよお。」

護「・・・・。」

パン

護さんの銃弾はクルーエルの肩を貫いた。

クルーエル「ふぐ、な、なぜ、私を撃ったのですか?」

護「バリアは嘘だと思ってね。つい、撃っちゃった。」

クルーエル「いいですねえ。」

護・グレイプ「?(こいつ、何笑ってたんだ?)」

クルーエル「この自分が死ぬかも知れない緊張感!!これですよこれ!!ここで私の大、ピン、チ。たまりません!!私はもう逝ってしまいそうだ!!ヒャハハハハ、ヒャーーーーハッハッハッハッハッハッハッハ!!」

クルーエルは舌を出しながら笑っていた。

グレイプ「うっさい。」

バシユ

クルーエル「はう、・・・なんてね。」

グレイプ「なっ!？」

クルーエル「高揚状態の私には麻酔は効かないんですよ。しかし良いんですかねえ。」

グレイプ「な、何がだ!？」

クルーエル「今も高性能爆薬であるC4爆弾は時間を刻んでます。例えば、今私が持っているC4は。」

クルーエルはロングコートから爆弾を取り出した。

クルーエル「聞こえますか?この音が。」

チツ、チツ、チツ、

グレイプ「後何分だ?」

クルーエル「30秒。」

護「バカな!?お前も死ぬんだぞ!？」

クルーエル「別に構いません。この死へのカウントダウンがたまりませんから。」

グレイプ「今までによく死んでなかったな。」

クルーエル「自爆テロは初めてですから。」

グレイプ「死にたいなら、一人で死ねよ。」

クルーエル「複数で死ぬから楽しいのです。今回でやっと最高の死に方ができそうだ。」

クルーエル「おっと、お喋りが過ぎたようですね。」

護「爆弾処理班!まだ終わってないのか?」

隊員「無理です、今、敵と交戦中。」

「校庭」

クルーエル「4」

もはやみんな声もでなかった。

「警察署 司令室」

クルーエル「3」

長官「何をやつとるんだ、何を!!」

「校舎3F 廊下」

クルーエル「2」

生徒「うわぁ——————!!」

クルーエル「1」

護「くっ。」

クルーエル「0」

ポン

グレイプ「へ?」

クルーエルのC4から花が出てきた。

クルーエル「ドッカーン」

チュドーン

グレイプ「なっ!!」

クルーエル「嘘、私は爆破凶でねえ。人や物を爆破することを快感にしているからまだ死ぬつもりはありません。」

護「くっ。」

学校が崩壊を始めた。

グレイプ「どこを爆破しやがった!!」

クルーエル「さあてね。では私はこれで。」

ピカ

グレイプ「うお!!」

護「くそ、眩しい。」

グレイプ「くっそぉー。閃光弾とスモークグレネードを同時に

使うなんて。」

護「早く避難させなければ。」

グレイプ「でもどうやって。……そうだ。エース。」

エース「いまさら何だ。」

グレイプ「爆発した場所はどこだ。」

エース「学校の端全てだ。」

グレイプ「ということは最終的にはこの学校は綺麗に周辺被害も無しに崩壊するわけだ。」

解体業者と同レベルの爆破解体だな。

グレイプ「後どれくらいの時間で崩壊する？」

エース「2分が程度だろう。」

グレイプ「護さん。2分以内に人質みんなを2Fの中央広場という場所があるのでそこに移動させて下さい！！」

護「何をするつもりだ？」

グレイプ「全員助かる方法があるんですよ。」

護「分かった。期待するからな。」

グレイプ「まかせんしゃい！」

俺はまず校庭へと向かった。

「校庭」

グレイプ「みんな！少し離れてくれ！」

校長「何を？」

グレイプ「いいから早く離れろ！！死にたいのか！？」

俺は大声を上げて離れてもらった。

グレイプ「エース、ブライトライズを召喚するぞ。いいな。」

エース「ああ。」

俺は召喚シーンをイメージした。

エース「さあ！呼べ！光の使者を。」

俺は右手を上げて手の平を開いた。そして咆吼した。

グレイプ「汝の光は心の光。」

空間が歪み、直径20M程の謎の光の球体が姿を現した。

グレイプ「汝の体は鋼鉄の肉体。」

右手を拳にする時、その球体の中から光を纏う鋼鉄の四肢が大の字で顕現された。

グレイプ「汝の武器は魂の咆吼。」

右手を肩ぐらいに落とすと共に、球体の上の方から光を纏う鋼鉄の顔が顕現された。

グレイプ「汝の主は光の牙。」

右手を開き手を胸に当てた時、球体の中心部に光を纏う胴体が見え隠れした。

グレイプ「そして汝の名は必ず登りし太陽!!」

右手を指パッチンの形にしながら前に突き出すと共に顕現された機体に纏う光が収縮していった。

グレイプ「汝の主が命ずる!!出でよ鋼鉄の太陽、ブライトライズ!!」

パチン

指を鳴らすと共に光を飛ばした。衝撃波が周りの大気を震わす。そしてブライトライズが顕現された。

グレイプ「天成!!」

光牙はブライトライズに吸われた。コクピットにワープしたのだ。

グレイプ「ふう。」

エース「.....」

グレイプ「こんな感じか？」

エース「厨二病全開だが、まあいいだろう。」

グレイプ「よし。これ後は中央広場に熱源が揃うのを待つだけだ。」

俺はリーダーを見ながら時期を待っていた。そして学校が崩壊し始めた。

グレイプ「早く。早く。」

リーダーの熱源が全て2Fの中央広場に集まった。
グレイプ「今だ!!」

「2F 中央広場」

護「くそつ、崩れる。」

明「お兄ちゃん!!」

隊員A「天井の崩壊来ます!!」

ガラガラガラ

みんなは目を閉じた。しかしいつまで立っても落ちてこない。

バカ

足下の物が崩壊しみんなが落ち始めた時。

スト

護「アレ?今、落ちたはずじゃあ。」

明「これは?」

グレイプ「おゝい。大丈夫だったか?」

護・明「!!」

グレイプ「いやゝ、危なかったなゝ。どうだ、右手の乗りこゝ

ちと左手の傘は?」

ブライトライズに乗っている光牙が外部スピーカーでそう語りかけた。

男子生徒「お、俺達、た、助かったんだ。」

女子生徒「や、やったー!ー!ー!ー!!」

護「あいつ、こいつのパイロットだったとはな。」

明「お兄ちゃん。」

ブライトライズの手の中で生徒それぞれ喜んでいた。

「校庭」

その後、俺はブライトライズに乗せたみんなを降ろし、ブライト

ライズをエースに頼んで引き上げて貰った。そして相変わらず、俺はKEEP OUTの中にいた。

護「いやゝゝ、今回は本当に助かったよ。ありがとな。」

グレイプ「いえ。」

俺はKEEP OUTの外を見た。

女性レポーター「ご覧下さい。またあのヒーローがやってくれました！なんと彼はあの巨大ロボットのパイロットだったのです！」

グレイプ「はあゝゝ。」

女性レポーター「彼さえいれば警察なんかいりません。彼のこれからの活躍が楽しみです！」

隊員A「隊長、長官が。」

護「はあゝゝ。」

長官「ご苦労。そして君達は解雇だ。」

護「・・・・・・。」

長官「そもそもお前らは学生なんぞを優先し、俺の昇格の踏み台であった犯人にまで逃げられるとは、最低だ。これで私の顔にまた泥が塗られてしまう。」

グレイプ「・・・・・・。」

トントン

長官「ああ、ヒーローさんか。話は少し待ってくれな。」

ベバキ

護「！！！」

俺は長官の振り向きざまに顔パンを入れた。そして長官は鼻血を吹きながらその場で倒れた。

長官「き、貴様！！何するんだ！？」

グレイプ「すみません。俺が立ち去るまでKEEP OUTを張って置いてくれませんか？」

護「あ、ああ、構わないが。」

グレイプ「・・・・・・。」

俺は長官の頭を驚づかみにして記者達の所へ向かった。

隊員A「お、おい、そっちに行ったら記者に問い詰められるぞ。」

女性レポーター「ああと！彼がこっちへやって来ます！インタビューしてみましょう。」

グレイプ「……………」

女性レポーター「あの、あなたの名前は？」

グレイプ「ブライズマン・グレイプです。」

女性レポーター「何者なんですか？」

グレイプ「ただの高校3年生です。」

女性レポーター「え、じゃ、じゃあ、無力だった警官にどう思いますか。」

グレイプ「無力？誰がですか？」

女性レポーター「え？だから足手まといになっていた警官ですが。」

グレイプ「足手まとい？……ハア、あなたは勘違いしているようだ。」

女性レポーター「へ？」

グレイプ「私が守ったとされている警察官たちは結果が悪く運ばうとも生命を懸けて奴らと戦っていたのです。あなた方でもできますか？」

女性レポーター「え、あの。」

グレイプ「彼らはいつも生命を懸けてまで仕事を全うしようとしているのに、なぜそんな風に使えないみたいに言うんですか？実際私は警察官が時間稼ぎをしてくれたから戦ったり協力して人命救助できたし、警官が居てくれたからこそ民間人に被害が出なかったんです。あなただって警官が居なければこのような危険な場所に赴きましたか？できないでしょう。戦場カメラマンでもない限り。」

女性レポーター「……………」

グレイプ「お願いですから。あの人たちを傷つけるような、そして名誉や誇りを穢すような記事を書かないで下さい。お願いしま

す。」

グレイプ「ですが、この長官は叩いていいと思いますよ。」

女性レポーター「は？」

長官「き、貴様！！」

グレイプ「こいつは人命より自分の昇格の方が大事だと思っている。中年太りの現場に出たことのないこの間のバットブラッドの不良ども以上に汚い税金泥棒だ。そして、」

俺は近くにいたマナブ先生以外の教員を指さした。

グレイプ「生徒より自分を優先するという教員としてあるまじき行為を行ったこういう事務的で本当に生徒のためを思っていない税金泥棒も。」

女性レポーター「は、はあ。」

グレイプ「あなたたちはこういう人間を叩くべきだ。それでは」

グレイプは報道陣の前を去り警官たちの元に戻った。

護「ハハ、ハハハ！君は本当のヒーローだな！」

隊員A「いやあ、こんな気持の良いの久しぶりだな！」

隊員B「これからは喜んで君の協力をするよ！」

隊員C「本当にありがとうな！」

グレイプ「ども。」

俺は頭を下げた。

護「これから何かあった時よろしくな！」

グレイプ「はい。じゃあ、俺はこれで。」

護「ああ、またよろしく。つっても高校生にこんなことを頼むとはな。」

グレイプ「ハハ。」

パシユ 俺は高く飛び姿を消した。

護「…………グレイプか。本当に不思議な少年だな。（灯闇光牙か。）」

ROAD
「失業への道」

第6話「UNEMPLOYMENT」

第6話「UNEMPLOYMENT ROAD」失業への道」(後書き)

見事に学校が壊れてしまい当然休校になる高山高校、この時期に光牙は一体どうなっていくのだろうか？

次回、光天成ブライトライズ第7話「厨二病？関係ないぜw」にライズアープー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8439k/>

光天成 ブライトライズ

2010年10月10日01時58分発行